

前　掛　り

—新潟県柏崎市・前掛け遺跡発掘調査報告書—

1997

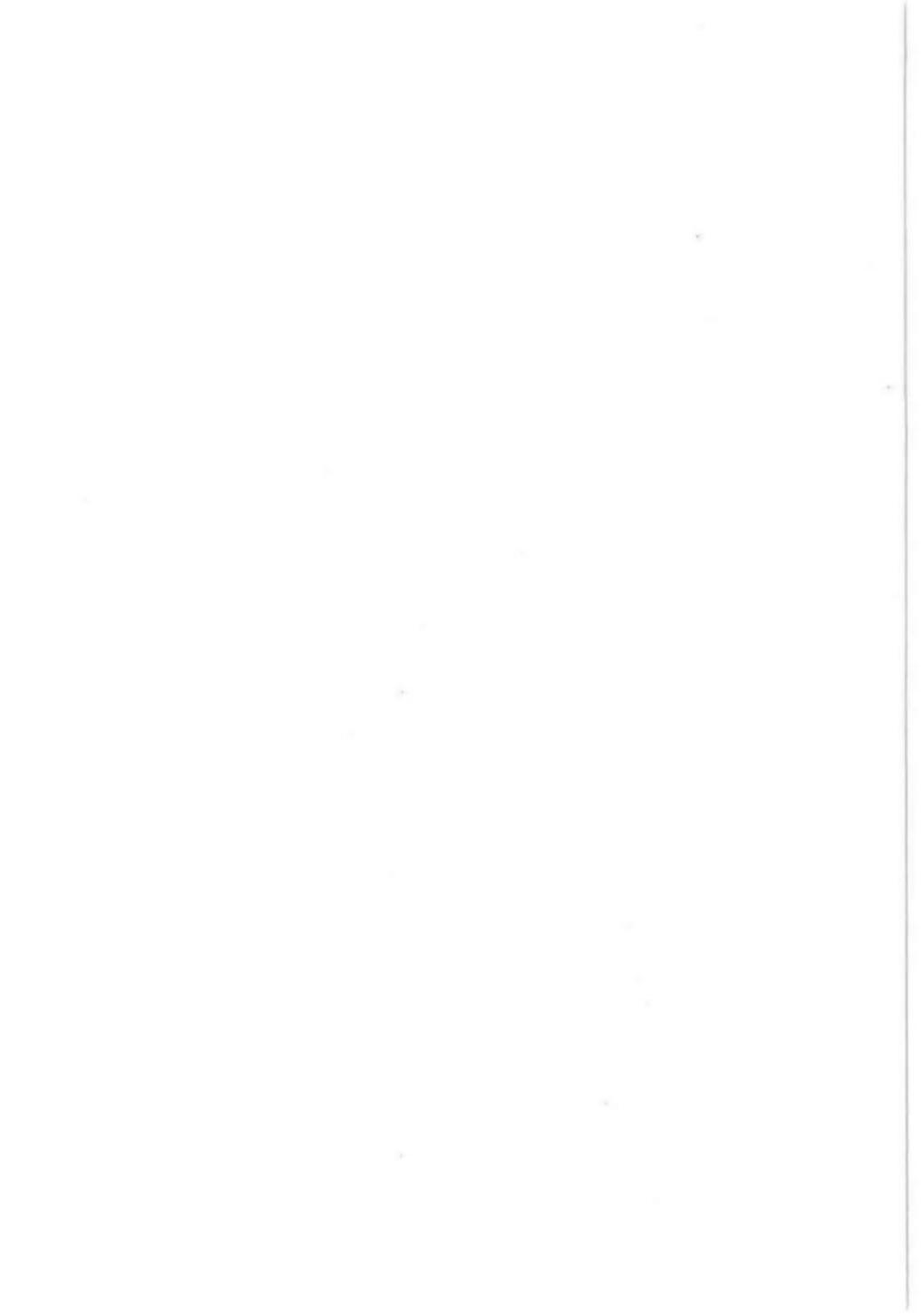
柏崎市教育委員会

前　掛　り

——新潟県柏崎市・前掛け遺跡発掘調査報告書——

1997

柏崎市教育委員会



序

柏崎平野の南部、鶴川中流域は、東西の丘陵にはさまれた細長い沖積地です。現在でも田園風景に富んでいるこの地域は、柏崎でも有数の稻作地帯となっています。かつて丘陵に住んでいた人々も、米作りの技術を知ると次第に平野部を開墾していき、平安時代になるとこの地域にもいくつかの集落が形成されるようになりました。平安時代というと、華やかな都の貴族が優雅な生活を送っている様子などを思い浮かべることができます。都から遠く離れ、三嶋郡^{みしま}三嶋郷^{みしま}と呼ばれていた柏崎平野に住んでいた人々はどのような暮らしをしていたのか、とても興味のあるところです。

鶴川中流域にある市内大字新道字前掛地内では、農免農道整備事業が行われています。本報告書は、それに先立って実施しました発掘調査の記録です。この地域を囲む丘陵では、近年のさまざまな開発に伴って、製鉄遺跡や須恵器の窯跡など、平安時代の手工業に関わる遺跡が発見され、調査されています。しかし平野部では、今回が初めての調査となりました。当時の人々の普段の様子を知る貴重な遺跡の調査といえます。

調査期間中には、大雨によって何度か調査区が水没しましたが、期間も後半になると比較的天候に恵まれ、調査を無事終了することができました。調査面積はとても小さく、遺跡の一部分を調査したにすぎません。しかし小さいながら平安時代の建物跡や、大きな流木の横たわる河川跡が発見されました。いずれも私たちの祖先の歴史を復元していく上で極めて貴重な資料となります。調査の成果を報告する本書によって、遺跡を身近に感じていただき、遺跡保護に対する認識を深めていただければ、この上ない幸い드립니다。

また、このように調査を無事に終了できましたことは、事業主体でもあります新潟県柏崎農地事務所、ならびに施行責任者となられた石高建設株式会社のご理解とご協力の賜物と思っております。また、時には雷雨に見舞われる中、最後まで調査に参加されました柏崎市シルバー人材センターの会員の皆様および調査員各位、そして本事業に格別なるご助力とご配慮をいただいた新潟県教育委員会の各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成9年3月

柏崎市教育委員会

教育長 相澤陽一

例　　言

1. 本報告書は、新潟県柏崎市新道1104-1番地ほかに所在する前掛り遺跡の発掘調査の記録である。
2. 本事業は、県営農免農道整備事業〈高田地区〉に伴い新潟県柏崎農地事務所から柏崎市が委託を受け、柏崎市教育委員会が事業主体となって発掘調査を実施したものである。
3. 発掘調査は、平成8年10月1日から同年10月30日まで現場作業を実施し、その後平成9年3月31日まで整理作業及び報告書作成作業を行った。現場作業は、柏崎市シルバーハウスセンターから会員の派遣を受けて実施し、整理・報告書作成作業は、柏崎市西本町3丁目森柏園内社会教育課遺跡調査室において行った。また現場作業は、社会教育課職員及び遺跡調査室のスタッフを調査員とし、整理・報告書作成作業は、職員（学芸員）を中心に、遺跡調査室のスタッフで行った。
4. 発掘調査によって出土した遺物は、注記に際し遺跡名を「前カガリ」と略し、グリッド名や遺構名および層序等を併記した。
5. 本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（社会教育課遺跡調査室）が保管・管理している。
6. 本報告書の執筆は、下記のとおりの分担執筆とし、調査担当の品田が編集もあわせて行った。

第I章・第III章・第IV章・第VI章第1節 伊藤啓雄

第II章・第V章・第VI章第2・3節 品田高志

7. 本書掲載の図面類の方位は、すべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。

8. 発掘調査から本書作成までは、事業主体である新潟県柏崎農地事務所並びに工事施行責任者石高建設㈱からは数多くのご理解とご協力を賜った。なお出土土器については春日真実氏、笹沢正史氏、また墨書き土器の解説については小林昌二氏から多くのご教示を賜った。さらにこのほかにも多大なご助力並びにご協力をいただいた。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

大橋　勇・中野　純・布尾幸恵・三井田忠明・渡辺三四一

(五十音順・敬称略)

調査体制

調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 相澤陽一

総括 西川辰二（社会教育課長）

管理 坂口達也（社会教育課長補佐兼文化振興係長事務取扱）

庶務 宮山 均（社会教育課社会教育係主査）

調査担当 品田高志（社会教育課文化振興係主査学芸員）

調査員 伊藤啓雄（社会教育課文化振興係学芸員）

帆刈敏子（社会教育課文化振興係嘱託）

調査補助員 黒崎和子（社会教育課文化振興係遺跡調査室）

現場作業スタッフ

相崎与吉・大岡信一・木村勝治・小林辰雄・関矢愛子・高橋孝信・吉田雄二

(柏崎市シルバーハウスセンター会員：五十音順)

整理作業スタッフ

渡辺富夫（社会教育課文化振興係嘱託）

徳間香代子（社会教育課文化振興係嘱託）

赤沢フミ・片山和子・竹井 一・高塩加代子・萩野しげ子・堀 幸子・吉浦啓子

(遺跡調査室：五十音順)

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	2
1 遺跡の位置と地理的環境	2
2 前掛り遺跡をめぐる歴史的な環境	4
1) 柏崎平野の古代・中世概観	
2) 鶴川中流域の古代・中世遺跡	
III 調査	8
1 調査の方法と調査区（グリッドの設定）	8
2 発掘調査の経過	8
IV 遺跡と遺構	10
1 遺跡の概要	10
2 層序と遺構の分布	10
1) 層序	
2) 遺構の分布	
3 建物跡・柵跡	12
4 溝跡	13
5 土坑とピット群	14
1) 土坑	
2) ピット群	
6 その他の遺構と落ち込み	15
V 出土遺物	18
1 平安時代の遺物	18
1) 土器類・木器類	
2) 柱根	
3) 碓と自然遺物	
2 中世以降の遺物	30
1) 中世陶器	
2) 石製品	
3) その他の遺物	

VI 総 括	32
1 前掛り遺跡の古代集落	32
1) はじめ	2)
3) 須崎平野の古代集落遺跡	4)
5) おわりに	
2 前掛け遺跡における古代土器の様相	36
1) はじめ	
2) 前掛け遺跡出土古代土器の編年位置付け	
3) 在地における土器生産の変貌	4)
5) おわりに	
3 調査のまとめ	49
1) 平成8年度調査の要約	2)
2) 遺跡の消長と時期区分	
引用・参考文献	51
報告書抄録	52

挿 図 目 次

第1図 柏崎平野地形分類図と前掛け遺跡の位置	3
第2図 鶴川中流域の地形と遺跡の分布	6
第3図 前掛け遺跡7~9グリッド土層柱状模式図	11
第4図 前掛け遺跡古代土器・木器の器種分類図	19
第5図 前掛け遺跡古代土器(食膳具)法量分布図	21
第6図 前掛け遺跡の転用須恵器(無台杯)	29
第7図 前掛け遺跡古代土器胎土分類図	42
第8図 前掛け遺跡における主要遺構出土土器類の器種構成図	45

表 目 次

第1表 前掛け遺跡遺構一覧表	16~17
第2表 前掛け遺跡出土古代土器の編年的位置付け(試案)	39
第3表 前掛け遺跡主要遺構の土器組成表	44

挿 写 真 目 次

挿写真1 前掛け遺跡調査の流れ	9
挿写真2 SD-70溝跡: 流木除去箇所の状況と工具痕のある流木	31

図版目次

図面

- 図版1 前掛り遺跡と周辺の旧地形 1:6,000
図版2 前掛け遺跡発掘調査区とグリッドの配置図 1:500
図版3 前掛け遺跡遺構全体図 1:200
図版4 前掛け遺跡調査区東壁土層断面図 縦軸1:50 横軸1:100
図版5 前掛け遺跡遺構個別図1 (S B-79・S A-80・81) 1:60
図版6 前掛け遺跡遺構個別図2 (S A-82・S D-01・70) 1:60
図版7 前掛け遺跡遺構個別図3 (S D-70) 1:60
図版8 前掛け遺跡小グリッド別遺物出土量 1:80
図版9 前掛け遺跡出土遺物1 1:3
図版10 前掛け遺跡出土遺物2 1:3
図版11 前掛け遺跡出土遺物3 1:3
図版12 前掛け遺跡出土遺物4 1:3
図版13 前掛け遺跡出土遺物5 1:3
図版14 前掛け遺跡出土遺物6 1:3

写真

- 図版15 前掛け遺跡1 a. 調査区全景(南から) b. 遺構群全景(北西から)
図版16 前掛け遺跡2 a. S B-79建物跡と棚列(北西から) b. S D-70溝跡と流木(西から)
図版17 前掛け遺跡3 a. 遺跡遠景(北東から) b. 遺跡遠景(南東から)
図版18 調査1 a. 表土剥ぎと遺構確認(南西から) b. 遺構完掘と全体清掃(南から)
図版19 調査2 a. 表土剥ぎと遺構確認(南西から) b. 遺構の発掘作業(南から)
c. S D-70の発掘作業(西から)
図版20 調査3 a. 調査区南部(北西から) b. 遺構検出状況(全景)(南東から)
c. 遺構検出状況(北部)(南西から) d. 遺構検出状況(北部)(南西から)
e. 遺構検出状況(北部)(北西から) f. 遺構検出状況(北部)(北西から)
g. 遺構検出状況(北部)(南西から) h. 遺構検出状況(中央部)(北西から)
図版21 層序1 a. S D-01溝東側断面(西から)
b. S X-53および調査区北半基本層序(南西から)
図版22 層序2 a. S D-70溝と土層断面(南西から)
b. B-6グリッド東側溝断面(S D-72a・b溝)(西から)
c. B-4グリッド水田跡土層断面(西から)
図版23 遺構1 a. 調査区全景(南から) b. 調査区北半部と遺構群(北西から)

- 図版24 遺構 2 a. 調査区の北半部と遺構群（南西から） b. S B-79建物跡と柵列（北西から）
- 図版25 遺構 3 a. 調査区南半部と S D-70溝跡（北西から）
b. S D-70溝跡と北半部の遺構群（南西から）
- 図版26 遺構 4 a. S D-70溝跡と土層断面（西から） b. S D-70溝跡と流木（北から）
- 図版27 遺構 5 a. S D-70溝跡と流木（南西から）
b. S D-70溝跡の工具痕を残す流木（南西から）
- 図版28 遺構 6 a. S B-79建物跡（北西から） b. S B-79建物跡（南西から）
- 図版29 遺構 7 a. S D-01溝跡（西から） b. S D-01溝跡（南西から）
c. S D-01溝跡と建物跡（北東から）
- 図版30 遺構 8 a. 調査区北半部のピット・土坑群（北西から）
b. A-5グリッドのピット・土坑群（西から）
- 図版31 遺構 9 a. S X-53落ち込み（西から） b. S X-53落ち込み（北西から）
c. S X-62・63落ち込み（西から）
- 図版32 遺構 10 a. SK p-11柱穴（東から） b. SK p-34柱穴（南から）
c. SK p-34柱穴（南から）
- 図版33 遺構 11 a. SK p-29 b柱穴（南から） b. SK p-65柱穴（東から）
c. SK p-65柱穴（東から）
- 図版34 遺物 1 a. S D-01溝跡出土土器（1） 約1：2
b. S D-01溝跡出土土器（2） 約1：2
- 図版35 遺物 2 a. S D-01溝跡出土土器（3）：表 約1：2
b. S D-01溝跡出土土器（4）：裏 約1：2
- 図版36 遺物 3 a. S D-70溝跡出土土器（1） 約1：2
b. S D-70溝跡出土土器（2） 約1：2
- 図版37 遺物 4 a. S D-70溝跡出土土器（3）：表 約1：2
b. S D-70溝跡出土土器（4）：裏 約1：2
- 図版38 遺物 5 a. S X-53出土土器（1） 約1：2
b. S X-53出土土器（2） 約1：2
- 図版39 遺物 6 a. その他の遺構出土土器 約1：2
b. 包含層等出土土器（1） 約1：2
- 図版40 遺物 7 a. 包含層等出土土器（2）：表 約1：2
b. 包含層等出土土器（3）：裏 約1：2
- 図版41 遺物 8 完形品・墨書・石製品・木製盤
- 図版42 遺物 9 胎土分類個体別微細写真 約1：1
- 図版43 遺物 10 木柱根（1）
- 図版44 遺物 11 木柱根（2）
- 図版45 遺物 12 a. 自然遺物（種子） 約1：2 b. 焼燬
- 図版46 調査スタッフ a. 前掛り遺跡の調査区全景（南から）
b. 発掘調査オールスタッフ（S D-70溝跡）

I 調査に至る経緯

前掛り遺跡は、鶴川中流域の柏崎市大字新道字前掛り3447番地ほかを中心広がる遺跡である。標高は約6mほどで、鶴川右岸の自然堤防上に立地している。鶴川は所々に蛇行した旧河道の痕跡を残しているが、それに沿って自然堤防が発達している。

鶴川中流域においては、柏崎市街地に近い北部を中心とした開発に伴い、遺跡調査は多くの成果を上げている。特に古代の製鉄関連遺跡、中世の屋敷跡や墳墓などが目立つ〔品田1995〕。これらの調査では、主として段丘、沢、丘陵といった地形に立地する遺跡が多い。鶴川の自然堤防上に立地する遺跡の調査例は少なく、本遺跡は古代の鶴川中流域に存在した三島郷の開発や土器の様相を物語る資料となる。

もともと本遺跡の所在が明らかになったのは、平成元年6月、柏崎市立南中学校のグランド造成に伴う試掘調査によってである〔柏崎市教委1989〕。時期的には9世紀後半～10世紀の須恵器・土師器および15世紀前後の青磁・白磁・珠洲焼・中世土師器が出土している。さらに、15世紀以前に遡る板材が発見されたことは注目に値する。この板材の中には長さ約6m、幅約60cm、厚さ約20cmを計るものがあり、約10cm四方のホゾ状の穴が両端に穿たれているのが特徴である。しかし精製された板材とは考えられず、その用途は明らかではない。調査の結果、遺構は発見されず、遺跡の縁辺部と考えられ、遺跡は試掘調査地点の東側に広がると予想された。

本遺跡の所在する鶴川中流域の右岸の沖積地、すなわち高田地区の下方・上方・新道地内は、水田を中心とした耕地が広がる稲作地帯である。今回、この地区に新潟県柏崎農地事務所を事業主体として、県営農免農道整備事業が実施されることになった。柏崎農地事務所は柏崎市教育委員会に対し、平成6年2月21日付け柏農地第2054号により総延長約515mを対象とした確認調査を依頼した。この依頼を受けて同年1月7日・8日の延2日間にわたって確認調査が実施された。その結果、明確に遺構とみなせるものは検出されなかつたが、古代後期の土師器・須恵器を包含する落ち込みが確認された〔柏崎市教委1995a〕。そこで柏崎農地事務所からは平成7年1月17日付け柏農地第2246号の2により文化財保護法第57条の3の規定に基づく土木工事等の通知が出された。柏崎市教育委員会では確認調査の結果に基づいて新潟県教育委員会に進達したところ、落ち込みのあったトレンチを中心とした延長約50～60mについて、発掘調査を実施する旨の通知がされるに至った。なお当事業による用地買取はさらに北側へと進み、平成7年1月にこの新たな用地についても調査の依頼があった。この依頼による現地踏査の結果、本遺跡から約1.5km西北西の茅原遺跡が周知化され、本遺跡の発掘調査に先立つ平成8年9月下旬にその確認調査を実施した。多数の土師器片が検出されたが、この法線が通過しているのは、茅原遺跡の縁辺部のみであったと考えられる〔柏崎市教委1997〕。

平成7年9月26日付け柏農第1965号により柏崎農地事務所から発掘調査が依頼され、平成8年9月初頭に柏崎農地事務所と協議を進める。そして同年9月9日付け教社第407号により、文化財保護法第98条の2の規定に基づいて、新潟県教育長及び文化庁長官に対して発掘調査の実施を通知した。この段階では9月中旬の調査開始を予定していたが、調査区の一部である水田の種刈がなかなか終わらず、実際に調査に着手できたのは10月1日になってからである。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境

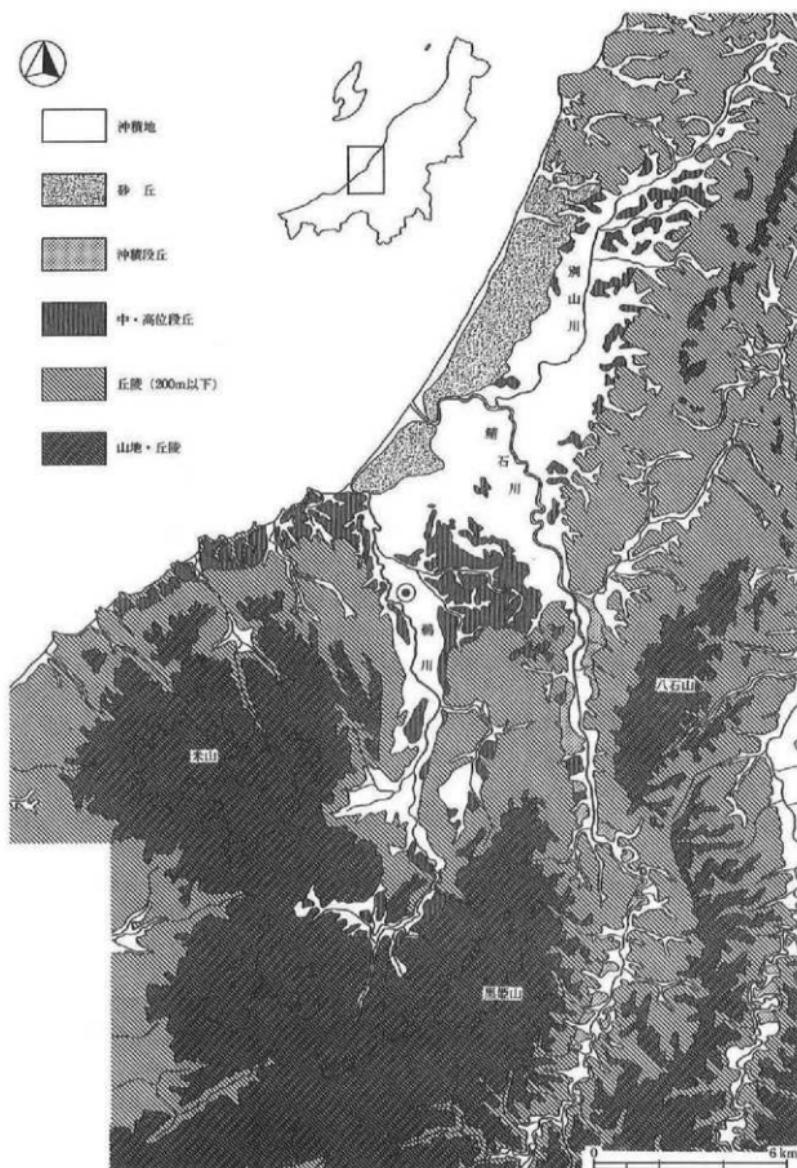
柏崎平野概観 柏崎市は、新潟県のほぼ中央に位置する人口9万人ほどの小都市で、行政的な地域区分では中越に属している。一般に中越地方と呼ばれる地域は、信濃川上流域や魚野川流域一帯を占める魚沼郡域の南部と、長岡市などが所在する信濃川中流域から柏崎平野にかけての北部に大別することが可能で、柏崎平野は北部でも西半部に位置している。

柏崎平野は、鶴石川と鶴川を主要河川として形成された臨海沖積平野である。この二河川は、個々に独立した水系をもつが、全国でも有数の大河である信濃川水系や関川水系により形成された広大な平野とは、丘陵・山塊による分水嶺で隔され、一つの独立した平野を形成する。柏崎平野を取り巻く丘陵・山塊とは、東頸城丘陵の一部である。柏崎平野一帯の丘陵地形は、北流する鶴川・鶴石川によって西部・中央部・東部に三分され、それぞれは米山・黒姫山・八石山の刈羽三山を頂点とする。東部は、北東方向の背斜軸に沿って、西山丘陵・曾地丘陵・八石山丘陵が北から規則的に並び、向斜軸に沿って別山川・長島川といった鶴石川の支流が南西に流れ出る。中央部は、黒姫山を頂点に北へ緩やかに高度を下げ、沖積地に接する一帯には広い中位段丘を形成するとともに、その北側には沖積地が広がっている。西部は、米山を頂点とした傾斜の強い山塊であり、その広がりは海岸にまで達する。米山海岸と称される沿岸部には、低位・中位・高位の段丘が顕著で断崖を形成し、沖積地は少なく、砂浜もほとんど見られない。沖積平野の北西正面は日本海に洗われ、海岸線に沿って荒浜・柏崎砂丘が横たわっているが、現在では柏崎市の市街地がこれを覆っている。平野部をなす沖積地は、砂丘後背地として湿地性が強く、鶴川・鶴石川の蛇行により、各所に幾筋もの自然堤防が形成されている。

今回、調査対象となった前掛遺跡は、地形区分で言えば柏崎平野の中央部に位置し、二大河川の一つ鶴川中流域の右岸に広がる沖積地内に立地していた。

鶴川中流域と前掛遺跡 前掛遺跡が立地する鶴川中流域の地形は、東西幅約1.5km、南北約7kmの広い沖積地を形成しているが、南北両端とも丘陵や尾根が沖積地の幅を狭め、上流域と下流域を地形的に分離する。これらの沖積地は、主に鶴川の氾濫・蛇行により形成されるが、さらに鶴川の支流上条芋川の流路も大きく変動しており、そのために旧河道痕や自然堤防の形成が著しい。沖積地の標高は、南部でおよそ20m余り、北部では5mと低くなり、前掛遺跡周辺では6~7mほどの標高となっている。旧河道痕は、主に東西の丘陵や段丘沿いに流路をとり、中央部が微高地状をなすが、旧鶴川はこれらを分断する形でも蛇行している。現在の鶴川は蛇行しながら西側の丘陵沿いを北流し、上条芋川、浦の川、輕井川などの支流が合流する。

鶴川中流域の沖積地を見ると、左岸域と右岸域ではかなり異なった状況が看取でき、単純な右岸域に対し、左岸域では複雑な地形となっている。左岸域を見ると、新道裏手の風牧山を代表とするような段丘もしくは更新世の微高地が分布する。その風牧山の西側には、一筋の沖積地が形成され、丘陵と風牧山とを分離するが、この沖積地はおそらくかなり古い鶴川、あるいはこれに替わる河川の河道痕ではないかと考え



第1図 柏崎平野の地形分類と前掛り遭跡の位置

えられる。左岸域に段丘の分布が多いのは、丘陵部に接して北流した鶴川の存在を考えさせる。これに対して、右岸域は低平な沖積地の広がりを特徴とする。集落は、新道集落が広がる一部を除けば沖積地内には分布しておらず、すべて東側丘陵沿いに接して展開しており、左岸域とは大きく様相が異なっている。右岸域の沖積地は、現在水田としての整備が進み、市内でも有数な稻作地帯である。沖積地の地形は、圃場整備のため全て平坦化されて、旧地形をとどめていない。

前掛り遺跡の立地については、実際の地形が明確でないが、鶴川や上条芋川などによって形成された古い自然堤防上に占地していた可能性が高い。しかし、現地形では周囲との標高差がほとんどなく、常に水害や増水による湛水などの危険にさらされていたことは確かなようである。それは、居住を示す遺構が平安時代に限定され、上層を植物の腐植層が覆うとともに流木等の埋もれ木が多く、湿地状態がかなり長く続いていることからもうかがわれよう。

2 前掛り遺跡をめぐる歴史的な環境

1) 柏崎平野の古代・中世概観

前掛り遺跡は、今回の調査区域では古代——特に平安時代を主体としていたが、平成元年の試掘調査や本調査前の確認調査等では、若干の中世遺物が出土している。そこで本節では、前掛り遺跡理解への一助として、本遺跡の主要時期である古代（奈良・平安時代）から中世（鎌倉・南北朝・室町・戦国時代）までの本地域の沿革について、若干まとめておきたい。

古　代　奈良時代の柏崎市・刈羽郡域は、柏崎市西部の旧頸城郡部や魚沼郡域であった小国町などを除く大半が、長岡市域などと同じ古志郡域に属していた。当時の古志郡は、三島郡和島村の八幡林遺跡の調査成果から島崎川流域でも八幡林遺跡付近に都衙中枢部が想定できるため〔和島村教委1994〕、三島郡域とは低いながら分水嶺を間に挟み、地理的にはやや隔たりを感じさせる関係にあった。このような地理的な側面のみとは言い難いが、柏崎平野一帯は平安時代を迎えた9世紀初頭頃に、三島郡として分置独立することになる〔米沢1980〕。

三島郡には、郷として「三島」「高家」「多岐」の三郷があったことが『倭名抄』に記され、また『延喜式』には北陸道の駅として「三島駅」と「多太駅」があったとされている。これら二史料に記された記載順や中世の莊園分布などを参考とすれば、鶴川流域：三島郷、鰐石川中流域・長島川流域：高家郷、別山川流域：多岐郷といった郷域が想定できる。この想定を前提にできれば、前掛り遺跡が所在する鶴川中流域は、三島郷域に属することになる。ただし、「三島」の名残りについては、市内三島町に所在する三島神社などわずかな手がかりしかなく、具体的な根拠に乏しいことも事実であり、当該地における古代史の実態は、今後の遺跡調査にかかっているのが実情である。

なお、郡名となった「三島」の由来については、越中国射水郡に同名の郷があることから、両者の深い関わりが想定されているが〔平川1993〕、大宝2年(702)まで阿賀野川以南の頸城・魚沼・古志・蒲原の四郡が越中国であったことからすれば、想像に難くない。また、越中国には有力な豪族として「射水臣」が国内に広く分布していたと考えられているが、八幡林遺跡からは越後国内在住と目される「射水臣」の名が記された木簡も出土している〔和島村教委1993・平川前掲〕。「三島郡三島郷」の名称が、射水郡内の郷名と同じとすれば、両者には更なる深い関わりが想定され、当該地が越後国内に在住する「射水臣」の故地であることを示唆している可能性は否定できないであろう。

中世『吾妻鏡』文治2年(1186)3月12日条の「三箇国庄々未進注文」には、柏崎平野に比定される荘園として「宇河莊」「佐橋莊」「比角莊」の三莊園が記されている。これらのうち、「宇河莊」の「宇河」とは「鶴川」とされていることから、鶴川筋が主な荘域であったと考えられる。したがって、前掛り遺跡は、中世では鶴川莊内にあったと考えることができる。また鶴川莊内は、「安田條」や「上條」、そして上條の対語として「下條」の存在が想定できることから、少なくとも3条に分かれていたことが知られる。「安田條」は、現在の安田地区から田尻・半田一帯に比定できそうであるが〔品田1996〕、比角莊と鶴川莊との境界が判然とせず、「上條」と「下條」の境界も明らかでない。したがって、前掛り遺跡が所在する新道地区を、いずれの条内にあったかを確定することは、現段階では難しいとせざるを得ない。いずれにしても、当該地における中世史も、残された古文書や記録などの史料が乏しいことから、考古学的な遺跡調査により、少しづつ明らかにしていかざるを得ないようである。

2) 鶴川中流域の古代・中世遺跡

柏崎市内における古代や中世遺跡の調査事例を見ると、鶴川中流域は、市内でも概して件数の多い地域である。初期の事例としては、昭和54年に実施された北陸自動車道の建設に伴う西田・鶴巻田遺跡群(6)の調査が掲げられる。ここでは、平安時代の製鉄関連遺物が多量に出土するとともに、鎌倉時代の井戸等や土器類が多く出土した〔新潟県教委1988〕。また、平成元年には、農道の改良工事に伴う南下の千古塚遺跡(21)が調査され、鎌倉時代から室町時代中期頃の中世墓地が確認されている〔柏崎市教委1990a〕。

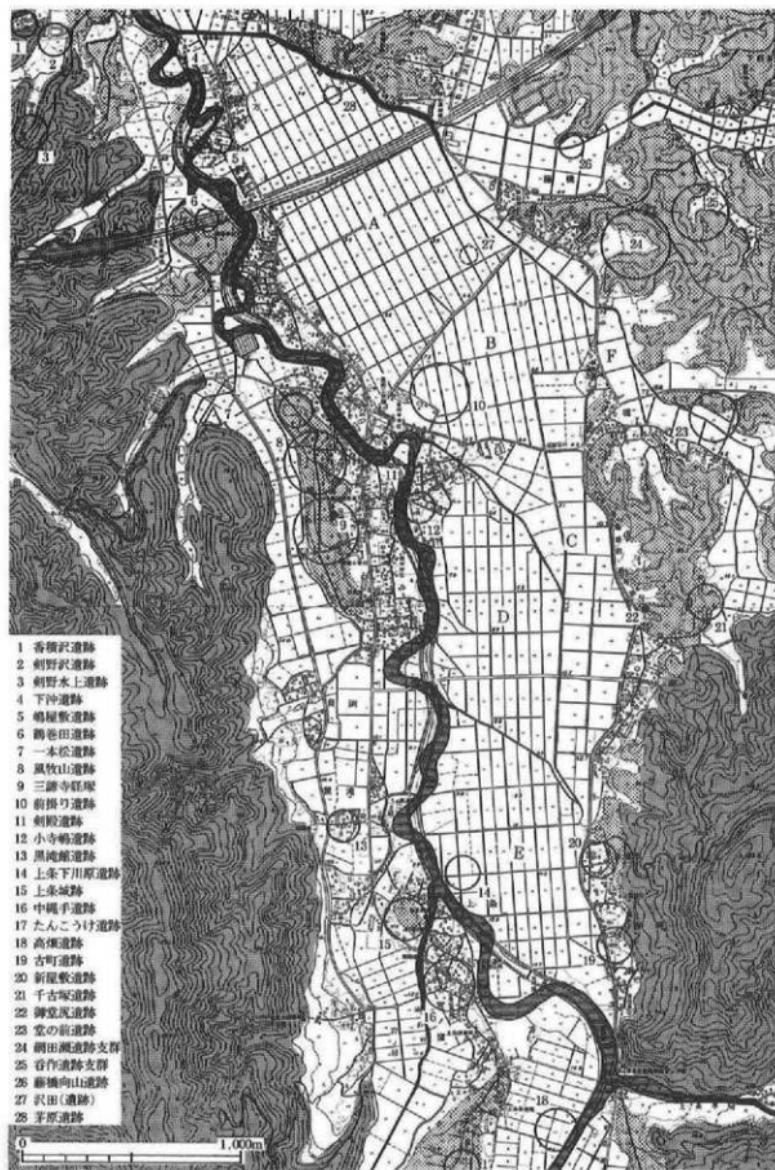
最近では、新潟工科大学建設に伴う藤橋東遺跡群や宅地造成事業に伴う横山東遺跡群などの大規模調査がある。藤橋東遺跡群(24・25)では、奈良・平安時代の鉄生産関連施設を発見し、柏崎平野南部地域に広がる大規模な製鉄遺跡群の存在が浮き彫りにされるとともに、中世でも屋敷跡と推定される建物址や井戸およびこれに関連すると考えられる墓地が調査されている〔柏崎市教委1995b・品田1993〕。また横山東遺跡群でも、鉄生産や窯業など、古代の手工業等に関連する遺構が発見されている〔柏崎市教委1994〕。

これらの調査事例は、鶴川中流域でもその北半に集中するため、鶴川中流域全城という観点からすれば不充分である。しかし、調査されたそれぞれの遺跡の時代や性格から看取される立地には、いくつかの特徴を認めることができる〔品田1995〕。今回調査を実施した前掛り遺跡も、主に古代を主体に中世にわたる遺跡として把握されている。これらのことから、本遺跡が所在する鶴川中流域というまとまりを持つ地域に焦点を当て、古代から中世に至る各遺跡の性格と立地との関連などを視点に述べ、歴史的環境の概観としたい。

遺跡の立地と概観 鶴川中流域における古代・中世の遺跡分布は、第3図に模式的に示した。今まで把握されている遺跡数は、下流域に属する剣野一帯の一部を含めるとすれば、28遺跡(群)となる。

段丘上に立地する遺跡には、尾根筋を含めると5カ所の遺跡が知られる。この内、千古塚遺跡(21)と御堂尻遺跡(22)は、ともに隣接しながら墳墓で構成される遺跡であることから、一連の遺跡群として把握できる。新道集落の裏山となる風牧山一帯に広がる風牧山遺跡(8)は、すでにかけさ柿の栽培団地として大半が削平されてしまっていることから、遺跡の具体像は明らかでなく、特に古代の土器については出土位置等が明確でない。ただ、中世は、墓碑等の石塔頭があり〔田村1954〕、また三諦寺経塚の存在等から、墓地的な遺跡あるいは聖域的な観念で捉えられる遺跡とすることができよう〔中野1988ほか〕。上条城(14)については、越後守護家の系統をなす上条上杉氏関連の館跡とされている。

丘陵の斜面部を中心に遺構等が構築される遺跡としては、4カ所ほどの遺跡群が掲げられる。これらは、



第2図 猿川中流域の地形と道路の分布

すべて製鉄遺跡群として把握できるものであり、未調査等によって実態の明らかでない剣野水上遺跡（3）と鶴巻田遺跡（6）を除けば、網田瀬遺跡群（24）や呑作遺跡群（25）が古代（奈良・平安時代）であった。なお、網田瀬遺跡群のうち、網田瀬E遺跡では、中世の小規模な墓地が確認されている。

鶴川の形成した広い沖積地に面した丘陵裾部に立地する遺跡は、5カ所が認められる。鶴川右岸の古町遺跡（19）や新屋敷遺跡（20）が典型的な立地の事例である。両遺跡は、前面に鶴川や上条芋川の旧河道である低地が横たわることから必然的に選ばれた立地と考えられる。この他では、黒滝館遺跡（13）やたんこうけ遺跡（17）があるが、前者は小規模な扇状地に、後者は沖積段丘上の立地である。また、沖積地でも中小規模な沢内に所在し、丘陵裾から平坦な沖積地への広がりを見せる遺跡は、他と一部重複する遺跡もあるが、およそ7カ所ほどを数えることができる。これらの内、下流域に属する香積寺沢遺跡（1）と剣野沢遺跡（2）が沢内に所在する遺跡としては典型的な例である。これに対し、堂の前遺跡（23）や藤橋向山遺跡（24）は、やや中規模な沢の片側斜面に立地するが、このような事例は網田瀬や呑作の各遺跡群でも確認することができる。

自然堤防上の遺跡は10カ所が数えられ、前掛り遺跡も該当する。茅原遺跡（28）や沢田遺跡（27）は経井川の左岸に立地するが、この2遺跡を除く大半は現鶴川の河道に沿う分布を見せており、現鶴川の流路がかなり以前から安定していたことを窺わせる。なお、ここに掲載した各遺跡は、古代・中世の遺跡であるが、高畠遺跡では绳文時代後期とも複合し、また中綱手遺跡では古墳時代前期との複合遺跡であった。

遺跡の性格と立地　さて、鶴川中流域に分布する28カ所の遺跡（性格が複合するため母数は33）について概観したが、これらの遺跡の性格等を見ていくと、集落と考えられる遺跡が22件（約66.7%）を数え、館跡も居住に関わるものとすれば遺跡総数のおよそ70%を集落が占めることになる。このような高い数値は、遺跡が過去における人々の生活の跡であり、居住区域を主としていることからすれば、当然のことかも知れない。集落以外の遺跡としては、製鉄関連が4遺跡（群）で12.1%、墳墓・墓地も4遺跡とほぼ同じ比率で発見されている。また、それぞれの遺跡の立地を見ると、集落と考えられる遺跡は、自然堤防上や沢内、あるいは丘陵沿いなど、立地条件に若干の差異が認められるが、基本的には沖積地を離れないところが選ばれている。これに対し、丘陵や段丘上あるいは斜面でもやや高台に占地しているのが、製鉄関連遺跡や墓地・墳墓の遺跡ということになる。集落遺跡は未調査遺跡が多く、古代と中世の両時期の遺物が採集される場合が一般的なことから、両者を明確に区分できない。しかし、これまでに調査された製鉄関連遺跡は全て古代であり、また墳墓・墓地遺跡は全て中世であった。このように見えてくると、集落の立地が、古代と中世で判然としない最大の理由とは、集落が沖積地を中心として展開し、水田を中心とした稲作が経済基盤として主体であったと考えられる。そして、古代と中世で大きく異なるのが、台地などの高台、もしくはその斜面を利用する遺跡の存在であり、古代では手工業関連としての鉄生産や窯業を、中世では墳墓・墓地や経塚などの宗教的な遺跡の形成である。前掛り遺跡が所在する鶴川中流域とは、遺跡の立地と性格の差異が、古代と中世における土地利用という現象面を極めて明瞭に示す地区とができるのではないだろうか。

前掛り遺跡は、丘陵などとは隔された鶴川右岸の沖積地内に立地する。これに対し、中世の屋敷跡と目される網田瀬A遺跡（24）は、小さな沢内に営まれていた。古代の集落として確認された前掛り遺跡とは、立地や景観にかなりの相違がある。現在、調査された遺跡が少ないとから、これ以上の対比はできないが、古代と中世では、集落の立地や展開にも当然の差異が予想される。山野の開拓、丘陵内の土地利用、そして経済的な基盤をなす水田経営など、当時の自然環境との関わりとともに、更に検討が必要である。

III 調査

1 調査の方法と調査区（グリッドの設定）

本発掘調査の範囲は、平成6年の確認調査の結果に基づいて設定した。確認調査では、10~30mほどの間隔でトレンチを発掘したが、遺構の可能性の高い落ち込みが1基検出されたのみであった〔柏崎市教委1995a〕。そこでそのトレンチを中心として、その両隣のトレンチまでを調査区の延長とすることができるので、延長は約60mとなる。また調査区の幅については、当該事業地の幅がほぼ該当するが、水路部分を除く約8mを対象とした。

調査用グリッドは、事業において100m毎に打たれた指標をもとに設定した（図版2）。調査区は、No15+50.0m以南、No16+50.0m以北に包含される。この間の100mを10m毎に10分割し、その呼称には北から1・2・3…の算用数字を用いる。また事業地のセンター軸を中心として東西に10mずつ区分し、西からA・Bとした。これによって10m四方の大グリッドが設定できる。そしてこの大グリッドを2m四方の小グリッドにより25分割した。小グリッドの呼称は、北西を①、北東を⑤、南西を⑩、南東を⑨となるようした。以上より調査区は、北西端がA-3①・北東端がB-3⑤・南西端がA-9⑩・南東端がB-9⑨となった。なお遺構外から検出された遺物はこの小グリッドを用いて出土地点を表すこととする。

調査は、まず重機による表土剥ぎから始める。調査区の両脇は水田であり、重機を乗り入れることができないため、重機は南から遺構確認面まで掘り下げ、北側へと後進していくことにした。6グリッド以南はほとんど植物腐植土で覆われていたので、調査としては基本層序の確認に止めた。6グリッド以北では重機を追いかけるようにジョレンをかけ、遺構の確認をした。調査期間中は雨天の日が多く、調査区外からしみ出る水もあって、調査区内には大量の雨水が溜まった。そこでSD-01およびSD-70にポンプを設置して排水した。遺構の発掘は北側から始め、最後にSD-70を完掘して終了となる。

2 発掘調査の経過

現場作業は平成8年10月1日から30日の調査終了まで、延19日間にわたって実施した。調査面積は約400m²、調査員・調査補助員延71人、作業員延89人であった。

調査区の種刈が終わったのを確認し、ようやく調査着手日を10月1日とすることができた。1日は、社会教育課長の挨拶、注意事項等の諸連絡の後、直ちに調査区南端より表土剥ぎを始めた（a）。深さ約1mほど掘削したが、7~9グリッドには植物腐植土が広がっており、遺構は確認できない。この部分については、翌2日にB-7・B-8・B-9の各グリッドで基本層序を確認するに止めた。3日は4グリッドまで表土剥ぎを進める。7グリッド以北では、植物腐植層の下に遺物包含層がみられ、その下から遺構を探るためにジョレン掛けを始めた。ようやく土師器を中心とした遺物を多く検出することができるようになったが、午後からの雷雨で作業は中止となる。表土剥ぎは土捨てに手間取ったが、4日に終わった。5~6グリッドではピットや溝が多く見られるものの、住居跡などの想定はできない。3~5グリッドの



写真1 前振り遺跡調査の流れ

遺構確認面は青灰色粘土である。ここで掘立柱建物及び溝が確認された（b）。この住居跡の付近からは土師器・須恵器が多く出土し、新道地区最古の家ではないかとの話題で現場はもちきりだった。

7日からは実際に遺構の発掘作業に入る。調査期間中に最も頭を悩ませたのは排水作業である。排水ポンプが1台で足りるようと考えをめぐらせて排水溝を設けた。大雨・夕立の後は調査区が水没し、翌日は調査区がプールのようになったが、全員によるバケツリレーにより、なんとか大量の水も引かせることができた（c）。7・9・11日でSD-01を完掘したので、これからはSD-01を排水ポンプの設置場所として排水作業を進められるようになった。11・14日はピット等の発掘に移る。砂の混じる青灰色粘土を地山上と判断して半截したが、激しい湧水のため調査は難航する。完掘するまでに木柱が発見されるものもあり、住居以外にも何らかの建物があったようである。またSX-53からは多くの遺物が出土した。中には墨書きされた須恵器片があったが、ちょうど文字の部分で割れていたために判読不能で、細かな解説が必要となった。

15日、調査区北半部に集中していた遺構の発掘が終了しかけており、最後に残っている、植物腐植土で埋まったSD-70を掘ることにした（d）。浅い溝と思われたが、遺構内の腐植層はかなり厚く、中からは太い木が見られ、なかなか底面を検出することができない。17日、調査区東壁に沿ってサブトレンチを入れたところ、このSD-70は幅が7~8mにも及ぶ大きな川で、洪水の後に大木や腐植土が流路に溜まっていたものようである。18・21日もSD-70の調査は続く。数本の大きな流木が東端から西端まで見られた。土器がわずかにしか発見されなかつた南側斜面とは対照的に、遺構のある側の北側斜面には遺物が多くあり、作業は活気づいた。ようやく22日に掘り上がり、調査区内の遺構は全て完掘したことになる。SD-70の流木には、工具痕があるものもあり、溜まった流木の除去を試みたのではないかと推測された。

23・24日は天候に恵まれ、調査区全体の清掃と写真撮影をした。清掃は、横一列に合板を敷き、それに乗ってミニジョレンで少しづつ遺構確認面を出し、合板をすらしながら徐々に進めていった（e）。これによつてしばらく雨に打たれて汚れていた調査区が見違えるようにきれいになつた。柱穴を白線で結び、間取を描いてみたところ、住居跡は歪みのない方形で、他の柱穴列も住居跡とほとんど同じ方向性を持つことがわかつた。24日以降は測量が作業の中心となる。28日、SD-70の流木をサンブルとして持ち帰るために輪切りにする。木はなかなか硬く、チェンソーでも難航した。この間25・28日には多くの方々の来訪があり、現地説明会に替えることができた。29・30日に測量・後始末を終え、直ちに次の発掘調査の準備に取り掛かった。

IV 遺跡と遺構

1 遺跡の概要

今回の発掘調査で対象となった範囲は、遺跡の東部にあたり、約400m²という小さい範囲である。必然的に遺跡の中心部は調査区外に求められ、遺構も調査区の2/3ほどの範囲内に分布していたので、遺跡の一部を垣間見る程度となつた。しかし古代では掘立柱建物や柵、溝が設けられていたことがわかり、河川と思われる大きな溝跡も検出することができた。溝や落ち込みなどから出土した土器器・須恵器からは、9世紀中葉という年代が考えられ、不明であった三島郷の土器様相についての検討が可能となつた。さらに建物が廃絶された後には、水田が営まれていたことが、土層の観察によって知ることができる。

その後は、調査区のほぼ全域に植物腐植層が堆積していることから、湿地としてしばらく安定していた様子をうかがうことができる。中世末以降に再開発の痕跡がみられるが、今回の調査では、特に顕著な遺構・遺物の発見には至らなかった。以下では古代を中心に述べていきたい。

2 層序と遺構の分布

1) 層序

本遺跡の層序については、調査区東壁を分層することによって確認した（図版3・21・22）。ただし遺構が検出されなかつた8~9グリッド付近については、B-7②・B-8②・B-9②の3小グリッドで基本層序を確認するに止めた（第3図）。基本層序は大きく8層に区分される。

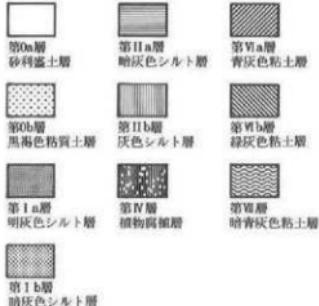
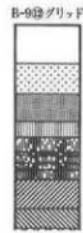
第0層は既存農道造成のための盛土層である。第0a層は砂利盛土層、第0b層は黒褐色粘質土層である。第0b層は調査区南部にしかみられないが、砂利を敷くにあたって、やや低くなっている部分を平らにならすために盛ったものと思われる。

第I層はシルト層であるが、その色調によってa~dの4層に細分できる。すなわち第Ia層は明灰色、第Ib層は暗灰色、第Ic層は灰色、第Id層は明灰色を呈している。第Ia層はSX-75・76を覆っているが、SX-75の覆土は第Ia層に近い。また第Ia層は自然堆積ではなく、SX-75を埋めるとともに、その付近をならすため人为的に盛られた層と考えられる。SX-75やSX-75・76によって切られている第Ib層からは近世の遺物が出土している。これらの遺物は小片であるために詳細な年代は不明であり、第Ic・d層の年代を知る手がかりはないが、次に述べる第IIa層は中世末の層であることから、ここでは第I層は近世に形成された層と考えたい。

第II層は2層に細分されるが、調査区東壁のほぼ全域で確認できるのは第IIa層とした暗灰色シルト層である。一部、B-8②・B-9②での基本層序においては第IIa層がみられず、灰色シルト層の第IIb層がみられる。第IIa層からは、わずかだが越前焼や唐津焼の小片を検出することができ、この層は中世末に形成されたと考えられる。部分的にみられる第III層は、第II層と第IV層の漸移層である。黒褐色シルト層であるが、ソフトで、植物腐植物を多く含んでいる。

7.0m

6.0m



第3図 前掛り遺跡7～9グリッド土層柱状模式図（1:30）

第IV層は植物腐植層であるが、さらに3層に細分される。第IVa層はほとんど黒色を呈しているが、SD-70に堆積した第IVa層内では、上から暗褐色腐植層、白色粘土層、黒色腐植層という層序が確認できる。白色粘土層は、植物腐植層が堆積した後に当該地が洪水等で水没した時の沈殿物が堆積してきた層と思われる。SD-70は厚い植物腐植層でも完全に埋没しなかったので、周囲よりも低く、沈殿物が堆積しやすかったと考えられる。この白色粘土層はSD-70の南側でもみられ、土層柱状模式図を作成した3地点においても2～5cmほど堆積していた。第IVb層は茶褐色を呈し、第IVc層は褐色の腐植物を含むものの、暗灰色粘土が主体である。

第V層はおもにSD-70の北側斜面以北にみられる。灰色～暗灰色を呈しており、3層に細分できる。第Va層は暗灰色粘土層である。粘性が強く、やや酸化して淡黄色を呈する部分もある。古代の遺物包含層で、多くの土師器・須恵器を含んでいる。しかし4グリッドでは第IVa層を掘り込んで水田（SX-78）を耕作しており、この部分では遺物の出土が希薄であった。第Vb層は灰色シルト層、第Vc層は暗灰色シルト層である。ともにSD-70に流れ込んでいる。

第VI層は2層に細分される。第VIa層は青灰色粘土層、第VIb層は緑灰色粘土層である。第VIa層はその上面を遺構確認面とみなした。第VIa層を掘り込んでできた遺構の覆土である第Va層よりもやわらかい。第Vi層とした暗青灰色粘土層は固くしまっている。第3図をみると、現表土とは反対に南へとわずかに傾斜していたことがわかる。

今回の調査では、遺構確認面のほか、調査区東壁の土層観察からも遺構が検出された。本遺跡における人間の生活や産業が営まれた時期は、層位的にみると大きく2つある。すなわち本遺跡は、第IV層とした植物腐植層によって1度全体が覆われているので、これを画期として大きく2時期に分けられる。出土した遺物から考えると、腐植層の下層にみられる遺構は主に古代の所産であり、上層は中世末～近世の所産といえる。

2) 遺構の分布

確認面で検出された遺構は、6～7グリッドにかかるSD-70を南限として、すべて3～7グリッドに

位置している。S D-70より南側では、植物高植土に覆われており、遺構は検出されなかった。

調査区の北端には、東西に走るS D-01がある。そのすぐ南側には、2間×2~3間の掘立柱建物跡1棟(S B-79)がみられる。S B-79は小規模な建物であり、本遺跡の中心となる母屋等の建物は調査区外にあると考えられる。さらにその南側にはS B-79を囲うように柵跡2基(S A-80・81)が並んでいる。そして柵の外側には土坑3基のほか、多くのビット、落ち込みが確認された。

遺構には切り合い関係があまりみられず、出土遺物からはほぼ9世紀中葉の年代が考えられるため、本遺跡の確認面にみられる遺構の大半は、この時期に営まれていたと思われる。またS D-01・70はともに土器・須恵器の出土量が豊富で、溝の性格や河川の役割についても考慮する必要がある。

その後、確認面上の遺構は第V層とした遺物包含層などによって埋没するが、4グリッド付近ではその第V層を掘り込んで水田が耕作されることが土層観察によって知ることができる。

3 建物跡・柵跡

建物跡を想定しながら、ビットを積極的に組み合わせてみたが、住居の間取をもつものはS B-79のみであった。ここでは、S B-79以外にもL字または直線をなすビットの配置が3例みられた。うちS A-80・81はS B-79と位置的にも関連すると思われるが、S B-79の梁間を基軸とすると、S A-80は10°、S A-81は17°東へずれている。この角度の差を方向の一一致の許容範囲とみなせるのかという疑問については今後の課題としたいが、近接しているという位置関係、およびこれらがほぼ同時期に存在していたと思われることから、ここではこれらの遺構の関係について積極的な解釈をしていきたい。

S B-79掘立柱建物跡(図版5・16・24・28) A~B-4グリッドに位置する。柱穴のうちSK p-11には木柱が遺っていた。梁間2間×桁行3間の掘立柱建物であるが、南側の桁行のみは2間となっている。梁間は約3.8m、桁行は約3.5m、平面積は約13.3m²である。桁行の方向を主軸とした場合、N-67°-Wを指向している(梁間はN-23°-Eを指向)。1間の幅は、梁間が1.7~2.1m、桁行が1.0~1.3mであるが、西側・南側ではSK p-13・15bがSK p-14に接近しており、間隔を異にしている。それに伴い、バランスをとるために棟持柱となるSK p-12の位置もやや南によっているので、全体的にはやや歪んで見える。間口はSK p-13・SK p-14間と考えられる。この建物を構成する柱穴の規模は、長軸の長さに幅があるものの35~45cmほどが多く、短軸は30cm前後におさまる。また深度はSK p-06が35cm、SK p-14が20cmであることを除けば、45~55cmほどである。

本遺構は2間×2~3間という小規模な建物である。本遺跡の中心部は調査区外にあると考えられ、そこには母屋等、本遺構よりも大型の建物があったと予想できる。

S A-80柵跡(図版5・16・24) A~B-4グリッドに位置する。SK p-35・22・64・25により、L字形を呈する。長辺は北東-南西方向に2間で約4.8m、短辺は北西-南東方向に1間で約1.2mである。長辺はN-33°-Eを指向している。ビットの規模はSK p-22が長軸41cm、短軸31cm、深度45cmであることを除けば、ほかは長軸・短軸が25~28cm、深度30~35cmといった小規模なものである。本遺構はS B-79のすぐ南側にあり、S B-79の梁間より東へ10°傾いている。位置関係を考えれば、S B-79の南側を囲んでいた柵跡と思われる。

S A-81柵跡(図版5・16・24) B-4・A~B-5グリッドに位置し、SK p-65・29b・34により構成される。北東-南西方向に長さが約4.3m、3基のビットはほぼ等間隔に配置され、N-40°-E

を指向している。またいずれのビットからも木柱が確認された。ビットの平面規模はSKP-34が27cm×26cmであるほかは長軸が約40cmである。また深度についてはSKP-29b・34がそれぞれ44cm・48cmであるのに対し、SKP-65は66cmと深い。

当初は、SKP-22・64・66とともに2間×1間の掘立柱建物を想定していたが、66はビットではなく、単なる落ち込みであったことから、建物跡という想定を否定し、ビット3基による柵跡とみなした。SA-80よりは7°、SB-79よりは17°ほど東へずれているが、SA-80と同様にSB-79に伴う柵跡と考えられる。また本遺構で特徴的なことは、SKP-65の深度が他の2基よりも深く、検出された柱根も他よりも太く、長いことである。このように本遺構には、規模の大きなビットが1基のみみられるが、調査区外のB-4グリッド付近に、規模の面で本遺構と左右対称のビットの配置をした柵を想定すれば、本遺構には門柱といった性格を持っていたことが考えられる。

SA-82杭列跡（図版6） A-5グリッドに位置し、SKP-58・60により構成される。SB-79に伴うSA-80・81は柵跡とみなしたが、位置関係から考えると、本遺構はSB-79との関連を想定することはできない。どちらのビットにも杭は違っていたが、他のビットから検出された木柱とは加工のされ方が異なり、古代の木柱とはみなし難い。単なる杭列跡とみなすことにしたが、時期については近代～現代である可能性が高い。

4 溝 跡

遺構確認面では2基の溝跡がみられた。両者は集落に対して何らかの機能を持っていたと思われるが、調査区が小さいため確認は得られず、以下では可能性の指摘に止めるのみとなった。またこれらよりも新しい時期の溝も調査区東壁より確認されている。

SD-01溝跡（図版6・21・29） 調査区北端のA～B-3グリッドに位置する。幅は2.0～2.4m、深度は0.4mほどの溝である。主軸はN-75°-Eを指向している。肩部の立ち上がりは急で、人工的に掘り込まれたと思われるが、B-3グリッドの南側斜面は傾斜がなだらかに南へと伸びている。このような形態から考えると、この溝の流路には変化があった可能性がある。すなわち本遺構は北東へ流れていたが、B-3グリッド付近から次第に西側へと向きを変えたと思われる。覆土、特に下層には砂が多く含まれているのは、水が流れていた痕跡である。なお本遺構からは土師器・須恵器のほか、木製盤が検出された。これらの遺物はおもに上層から出土している。

確認調査の結果をもとにすると、本遺構の北側にも遺跡の範囲が及んでいるとは考えられないことから〔柏崎市教委1995年〕、本遺構は集落の境界に設けられた溝である可能性が高い。しかし近接する建物であるSB-79との指向する方向の違いは52°である。このような大きな差があることには何らかの理由があるのかは不明である。また調査区の西側においても方向が変わらなければ、本遺構は後述するSD-70と合流するが、集落排水を流していたとも考えられる。

SD-70溝跡（図版6・7・16・22・25～27） A～B-6～7グリッドにわたってみられる、東西方向の河川跡である。幅は7.2～8.0m、深度約75cmを計り、N-80°-Wを指向している。流れに沿うようにして大量の樹皮を残した流木がみられた。2mに満たないものもあるが、ほとんどが調査区外に及ぶほど大きなものが多く、直径も30～40cmと大きい。特に下端の南側に横たわる流木は、調査区内でみられる長さだけでも5mほどあり、最大径は約60cmである。

北西部（A-6グリッド付近）ではテラス状になっている。SD-70内の他の地点と比べて、テラス上の流木は少ない上に、向きが異なっている。またほかに流木のない西側に面した部分に道具で切りつけた痕跡がみられた。これは流木を本遺構の外へ除去する作業の途中の状態を表していると思われる。

覆土をみると植物腐植層が2層確認できる。もともと本遺構の流水量はわずかで、水性植物が繁茂していた。洪水のために粘土が堆積するが、その後再び植物が繁茂する。さらに洪水に遭うが、その時堆積した粘性の強い青灰色粘土はB-6⑦グリッドまで及んでいる。そして第IV層とした植物腐植層によって本遺構は完全に埋没する。

本遺構より南側からは遺構は検出されなかったため、集落の南境に位置した河川と思われる。出土遺物としては土器・須恵器がある。ほとんどが北側斜面からの出土であり、完形品も多いに対し、南側からは数点の破片が得られたのみである。このような南北の差は、建物などの遺構がSD-70より北側に分布していることによるが、河川からの土器の出土は、集落において祭祀等に伴う行為がなされたことを考えさせる。

SD-72a・b溝跡（図版3・22） B-6グリッドの調査区東壁において確認された遺構である。第Va層・第VI層を掘り込んで作られた溝と思われる。覆土は全体的に植物腐植土を含んでおり、特に上層は第IV層に対比できる。層位的には後述するSX-78水田跡と同時期と思われる。遺構の性格については、水田に伴う水路である可能性がある。しかし土層観察のみでは位置関係などを把握するには至らず、今後の課題としたい。

SD-73溝跡（図版3） SD-72a・bと同様に、B-6グリッドの調査区東壁における土層観察によって確認された。第VI層を掘り込んで作られており、SD-72bに、さらに中世末～近世に至ってSX-74によって切られている。そのため形態については不明であるが、覆土は全体的に砂分をやや多く含んでいることから、水路などといった溝跡を想定した。

SD-77溝跡（図版3） B-5の調査区東壁において、やはり土層観察によって確認された遺構である。覆土には砂が多く含まれており、本遺構では水が流れていたと思われる。第IIa層を掘り込んで作られていることから、近世の所産であり、水田の灌漑用水であったと考えられる。

5 土坑とピット群

1) 土坑

ここでは、平面形の直径がピットよりも相対的に大きいものを土坑として扱った。今回の調査では、SK-02・38・46・47の4基の土坑が確認されている。調査区西壁にかかるSK-38の平面は1辺が147cmほどの隅丸方形をなすと思われるが、深度17cmほどで浅い。他の3基は平面が梢円形または不整形で、規模が70cm×50cmほどであるものの、深度が10～15cm程度の深い土坑である。SK-47以外のいずれの土坑からも遺物が出土しており、時期はやはり9世紀中葉と思われるが、各土坑の性格については不明であり、SK-46・47は同一で、単なる包含層の落ち込みである可能性もある。

2) ピット群

今回の調査では、単なる落ち込みである可能性があるものもあるが、30基以上のピットが検出された。そのうち何らかの建物跡を構成すると考えられるピットは20基であり、それについて前節で触れたが、

それ以外のピットを有機的に組み合わせることはできなかった。

ピットの形態は椭円形のものが多いが、径や深度については、その数値に幅がある。しかし遺構別にみれば、前述のようなある程度のまとまりが看取できる。覆土は概ね黒灰色や灰褐色を呈する粘土が多い。地点別にみると、4グリッドでは黒灰色～明黒灰色粘土、4グリッド南端～5グリッド北半では灰褐色粘土が主となる傾向がある。これを調査区東壁の土層断面と対比させて考えると、4グリッドにあるピットの覆土は第V層、5グリッドのピットの覆土はSD-70の上層やSX-53の覆土と同じである。またSB-79を構成するピット以外には、木炭粒はあまり含まれてはいない。

6 その他の遺構と落ち込み

ここでは、建物跡、溝跡、土坑、ピット以外の遺構と落ち込みを便宜的に一括した。性格不明な遺構もあるが、調査区東壁の土層観察で確認できた遺構もある。また落ち込みについては16基検出することができたが、ここでは比較的遺物の出土量の多かったSX-53についてのみを述べることにする。

SX-78水田跡（図版3） B-4グリッドにおいて調査区東壁の土層断面によって確認できた遺構である。第V層・第VI層（地山層）を耕作して形成された水田で、耕作土は砂質のやや強い暗灰色シルト層である。土層により水田上面をみると、植物腐植土によって侵食されている部分もあるが、南側では標高約5.8m付近ではほぼ水平な面を遺している。下面是凹凸が激しい。水田の規模を把握することはできないが、北側へと広がっていたと考えられる。水田に伴う畦畔を確認することはできなかった。また水田が営まれた時期については、覆土からの出土遺物がなかったため不明であるが、本遺構はSB-79など、9世紀中葉の遺構が埋没した後に形成されているから、10世紀前後の年代幅で考えておきたい。

SX-74性格不明遺構（図版3） B-5～6グリッドの調査区東壁において確認された。土層断面における本遺構の幅は約3.3mで、深度は40～50cmほどである。第IIa層を掘り込んでおり、埋没後は第Ic層に覆われていることから、近世でも早い時期の所産であろうか。

SX-75性格不明遺構（図版3） B-4グリッドの調査区東壁において確認された。土層断面における本遺構の幅は約2.2m、深度約10cmほどであるが、さらに掘り込まれて窪んでいる中央部の深度は約30cmほどである。覆土は第Ia層に近いことから、人為的に埋められて廃絶されたと思われる。覆土に含まれた遺物や層序から考えて、近世の所産である。

SX-76性格不明遺構（図版3） B-5グリッドの調査区東壁において確認された。本遺構は第Ib層やSD-77を掘り込んで作られている。覆土はSD-77の覆土が混合した状態の土であり、擾乱の可能性もある。

SX-53落ち込み（図版3・31） A～B-5およびB-6グリッドにわたるが、調査区東壁にかかっているため、全貌は明らかではない。底面には起伏があり、中州状を呈する部分もある。深さはおおむね10～14cmほどである。覆土は青灰色粘土であるが、上層は粘性が強く、下層はソフトで腐植物を多く含んでいる。これは前述したSD-70の覆土のうち、北側斜面にみられる第I層、第2b層に相当している。覆土からは墨書き土器をはじめ、多くの土師器・須恵器が出土したが、遺構とは考えられず、落ち込みと判断した。ただし単なる落ち込みであるため、同様に多くの土器が検出されているSD-01・70とは異なる土器様相をうかがうことができる。すなわちSX-53から出土した土器は、日常的に使用された後、廃棄されたものが多いと思われる。

第1表 前掛り遺跡遺構一覧表

番号	グリッド	種別	平面形	長軸×短軸	深度	覆土／木炭粒	遺物	備考
01	A～B～3	溝跡	不整形	—	—	圓盤6 灰色粘土	土須 土	
02	B～3	土坑	円形	73×53	10	—	—	柱根あり
03	A～B～4	ピット	楕円形	32×31	13	—	—	S B～79
04	A～4	ピット	楕円形	46×28	51	黒灰色粘土 一部壁際に明黒灰色粘土	—	
05	—	—	—	—	—	—	—	欠番
06	A～4	ピット	円形	41×32	35	黒灰色粘土 一部壁際に明黒灰色粘土	— 土	S B～79
07	A～B～4	ピット	楕円形	29×27	52	明黒灰色粘土	—	S B～79
08	B～4	ピット	楕円形	33×29	55	明黒灰色粘土	◎	S B～79
09	B～4	ピット	楕円形	—×26	24	明黒灰色粘土	◎	08と同一か
10	A～B～4	ピット	楕円形	40×32	45	黒灰色粘土	△	S B～79
11	A～4	ピット	楕円形	35×34	52	上層：黒灰色粘土 下層：暗青灰色粘土	△ △	S B～79 柱根あり
12	A～4	ピット	不整形	42×32	49	黒灰色粘土	◎	S B～79
13	A～4	ピット	楕円形	40×30	25	黒灰色粘土 一部壁際に砂質で黒灰色粘土の混じる緑青灰色粘土	△	S B～79
14	A～4	ピット	円形	44×—	20	上層：緑灰色粘土 砂質で暗灰色粘土が混じる	△	S B～79
						下層：緑灰色粘土 やや明るい	△	
15a	A～4	ピット	不整形	34×25	37	暗緑灰色粘土	△	15bより新
15b	A～4	ピット	不整形	37×28	50	緑灰色粘土 暗灰色粘土が混じる	—	S B～79 15aより古
16	A～4	ピット	楕円形	26×24	32	緑灰色粘土 暗灰色粘土が混じる	◎	底部が枕穴状に尖る
17	A～4	ピット	楕円形	17×16	14	暗緑灰色粘土	•	
18	A～4	ピット	楕円形	39×27	48	明黒灰色粘土	◎	S B～79
19	—	—	—	—	—	—	—	欠番
20	—	—	—	—	—	—	—	欠番
21	A～B～4	ピット	不整形	37×32	25	緑灰色粘土 若干の明灰色粘土が混じる	•	
22	A～4	ピット	楕円形	41×31	45	上層：緑灰色粘土 若干の明灰色粘土が混じる	•	S A～80
						下層：明緑灰色粘土 若干の明灰色粘土が混じる	•	
23	A～4	ピット	隅丸方形	32×30	32	暗緑灰色粘土	△	S A～80
24	A～4	ピット	楕円形	22×20	41	明灰色粘土	○	欠番
25	A～4	ピット	楕円形	28×28	30	暗緑灰色粘土	—	欠番
26	—	—	—	—	—	—	—	欠番
27	—	—	—	—	—	—	—	欠番
28	—	—	—	—	—	—	—	欠番
29a	—	—	—	—	—	—	—	欠番
29b	A～B～5	ピット	楕円形	42×26	44	—	土	S A～81 柱根あり
30	B～5	ピット	楕円形	—×23	30	灰色粘土	— 土	
31	A～B～5	落ち込み	円形	28×27	6	灰褐色粘土	○	31に類似
32	A～5	落ち込み	楕円形	42×31	13	灰褐色粘土	○	上層のみ遺構か
33	A～5	ピット	不整形	42×32	38	上層：灰褐色粘土 下層：明灰色粘土	— 土須	
34	A～5	ピット	円形	27×26	48	灰色粘土	— 土	S A～81 柱根あり
35	B～4	ピット	隅丸方形	28×25	35	明灰褐色粘土（～緑灰色粘土） 灰色粘土が混じる	— 土	S A～80
36	A～5	落ち込み	楕円形	55×43	7	明灰色粘土	— 土	
37	A～5	落ち込み	不整形	—×28	7	明灰色粘土 植物腐食層が混じる	— 土	調査 38より古
38	A～5	土坑	—	147×—	17	上層：灰褐色粘土 下層：明灰色粘土	— 土須	37+38a+42より新

※ 長軸・短軸・深度 単位はcm
 ㊀ 木炭粒 ○：多い ○：やや多い △：少ない *：ほとんど無し -：無し
 ㊟ 遺物 土：土師器 須：須恵器 近：近世陶磁器

番号	グリッド	種別	平面形	長軸×短軸	深度	覆土／木炭粒	遺物	備考
39a	A-5	落ち込み	不整形	-×55	5	明灰色粘土 黒色粘土ブロックが多く混じる	-	38・40より新
39b	A-5	ピット	椭円形	34×25	19	明灰褐色粘土 黒色粘土ブロックが多く混じる	-	38より新
40	A-5	落ち込み	円形	24×-	-		-	41より古
41	A-5	落ち込み	円形	26×22	38		-	40より新
42	A-5	溝跡	不整形	-×-	-		-	38より新
43	—							欠番
44	—							欠番
45	—							欠番
46	A-5	土坑	椭円形	63×48	10	灰褐色粘土	-	土 落ち込みか 46と同一か
47	A-5	土坑		26×-	15	灰褐色粘土	-	
48	A-5	落ち込み	円形	52×45	4		-	
49	A-5	落ち込み	円形	39×33	11	灰褐色粘土 植物腐植土が混じる	-	土
50	A-5	小ピット	円形	22×30	10	灰褐色粘土 植物腐植土が混じる	○	土
51	A-5	落ち込み	楕丸方形	57×52	9	灰褐色粘土 植物腐植土が混じる	-	土
52	A-5	小ピット	円形	21×20	13	灰褐色粘土	○	
53	A～B-5	土坑	不定形	-×-	-	園版3	-	土須 68より古
	B-6							
54	A-5	落ち込み		-×56	7	灰褐色粘土 植物腐植土が混じる	-	土
55	B-5	落ち込み		-×59	14	灰褐色粘土 植物腐植土が混じる	-	
56	—							欠番
57	—							欠番
58	A-5	ピット	不整形	32×26	36		-	S A-82 柱根あり
59	A-5	ピット	椭円形	27×20	19	灰褐色粘土 植物腐植土が混じる	-	
60	A-5	ピット	椭円形	37×22	38		-	S A-82
61	—							欠番
62	A-5～6	落ち込み	不整形	-×-	-		-	土須
63	A-5	落ち込み	不整形	-×-	-		-	
64	A-4～5	ピット	椭円形	29×19	34	灰褐色粘土	-	S A-80 柱根あり
65	B-4	ピット	椭円形	40×33	66	灰色粘土	-	S A-81 柱根あり
66	A-4	落ち込み	椭円形	37×27	5	灰褐色粘土	-	
67	—							欠番
68	B-5	落ち込み	円形	28×26	19		-	土 63より新
69	A-6	落ち込み	椭円形	—	—		-	
70	A～B-6	溝跡		—	—	園版6	-	土須
	A～B-7							
71	—							欠番
72a	B-6	溝跡		—	—	園版3		土層断面でのみ確認
72b	B-6	溝跡		—	—	園版3		土層断面でのみ確認
73	B-6	溝跡		—	—	園版3		土層断面でのみ確認
74	B-5～6			—	—	園版3		土層断面でのみ確認
75	B-4			—	—	園版3		土層断面でのみ確認
76	B-5			—	—	園版3		土層断面でのみ確認
77	B-5			—	—	園版3		土層断面でのみ確認
78	B-4	水田跡		—	—	園版3		土層断面でのみ確認
79	A～B-4	掘立建物跡	柱：11本	381×348	-	S K p-04-06-07-08-10-11-12-13-14-15b-18	園版5	
80	A～B-4	埋跡	柱：4本	480×120	-	S K p-22-25-35-64	園版5	
81	B-4	埋跡	柱：3本	426×-	-	S K p-25b-34-65	園版5	
	A～B-5							
82	A-5	杭判跡	柱：2本	141×-	-	S K p-58-60	園版6	

V 出土遺物

前掛り遺跡から出土した遺物の種別としては、土器類を主体に木製品や石製品および礫や自然遺物がある。時代的には、中世およびそれ以降の遺物が若干出土しているが、平安時代が主体であった。本章では、本遺跡の主体であった平安時代と、中世およびそれ以降に区分して概観したい。

1 平安時代の遺物

平安時代の遺物としては、土器類と木製品のほか礫や自然遺物がその種別として挙げられる。土器類は、須恵器・土師器のほか、わずかではあるが黒色土器および製塙土器が伴っている。また、木製品には、木製の盤1点と建物の柱根が出土したが、前者は土器類と同じく食膳具を構成するものであることから、土器類とともに述べ、柱根とは項を別にして説明を加えることとした。また、礫および自然遺物については、分析等を行っていないことから、その概要を各々述べるにとどめたい。

1) 土器類・木器類

a 概観と器種分類

平安時代の土器類は、須恵器・土師器を主体に、内面を黒色処理し「内黒」と呼称される黒色土器、そして製塙土器の破片がある。全体の出土量は、コンテナにおよそ5箱ほどであるが、その8割を土師器が占め、須恵器はおよそ2割程度であった。その他の種別としては、黒色土器が全体で1点、製塙土器も2個体分の破片であるが、破片数は若干程度の出土量である。また、木製品である木器の出土も少なく、今回の調査区全体でも1個体分であった。

土器類は、包含層出土も比較的多いが、その大半が小破片である。これに対して、本遺跡の主要遺構であるSD-70溝やSD-01溝および性格が明らかでないSX-53からは、概してまとまって出土している。したがって、報告に際しての図化作業は、主にこれら3遺構を中心に進めたが、出土量そのものが少なかったことから、包含層等出土の上器類についてもできる限り図化に努めた。ただし、細片のため図化が困難な土師器鍋・甕類や須恵器杯類等も多い。これらの多くは、後述する主要遺構における器種構成等の比率算定において計数しており、これにて報告に代えたい。

本遺跡で出土した土器類は、時期的にあまり年代差あるいは時期幅がないものと考えられる。具体的な時期等については第V章にて検討するが、おむね平安時代前期、9世紀中葉を前後する年代観が想定できる。平安時代の集落は、この前後を画期として増加するが、本遺跡も新時代を迎えた時に展開した集落である可能性が高く、出土遺物の時期幅が限定されることからすれば、本地域における当時の姿を示す遺跡として、大きな意味を持っている。さらに、時期幅がある程度限定されているとすれば、いまだ充分な年代的尺度が完成していない本地域にとって、当該期の土器編年を考えいく上でも、貴重な資料を提供するものとして評価できるであろう。

以下、須恵器・土師器・黒色土器・製塙土器・木器の種別に分けて、それぞれの器種分類や調整などを概観したい。

須惠器			
杯盤	無台杯 A 1	無台杯 B 1	短頸瓶
有台杯 B I	無台杯 A 2		
有台杯 B II	無台杯 B 2		長頸瓶
有台杯 B III			
黑色土器			
椀	木器	大甌	
	盤		
土師器			
椀 a	椀 b	小甌 A	具甌
椀 c			
椀 d		小甌 B	
		鍋	

第4図 前掛り遺跡古代土器・木器の器種分類図（1：5）

須恵器 用途あるいは機能から大きく大別すると、食膳具と貯蔵具がある。食膳具には、杯蓋・有台杯・無台杯の3器種、また貯蔵具には短頸壺・長頸瓶・大甕の3器種があり、これら6器種が本遺跡から出土した土器類の器種となる。貯蔵具の出土量は、破片数では概して多くなるが、個体数に換算すると極めて少なく、短頸壺と長頸瓶はともに1個体、大甕も2個体に過ぎない。これに対し、食膳具をみると、形態差や法量によって細分が可能である。杯蓋については、図化できたものが1個体であるが、出土量そのものが3個体と少なく、それぞれの形態差も大きいため、形態の細分はあえて行っていない。

無台杯については、大半が破片資料であることから法量による細分が難しい。形態的な差異からは、大きく2器種に大別が可能であり、さらにそれぞれの細別を試みた。まず無台杯Aは、口縁部が直線もしくはほぼ直線的に外傾する形態で、伝統的な杯の形態を呈するものである。細分された無台杯A₁は、底部から体部への移行が屈曲的で、口縁部がやや外反傾向を呈する。個体数は極めて少なく、確認されたものは1個体である。無台杯A₂は、底部から体部への屈曲部にやや丸みを持ち、口縁部がやや内弯傾向にある。個体数は概して多く、無台杯類の主要器種の一つとなっている。無台杯Bは、口縁部の内弯傾向が無台杯Aよりもやや強くなり、形態上は「楕円傾向杯」とでも言える形態を呈する。無台杯B₁は、これらの中でも無台杯A₁の形態に近い。無台杯B₂は、楕円傾向無台杯の典型的な形態とみることができる。この無台杯Bの形態については、口径と器高、底径と器高、口径と底径の相関関係をみると、須恵器無台杯Aと土師器無台碗の中間に位置することが明らかであり（第5図）、土師器無台碗との間わりの中で強い影響を受けていることがうかがえる。

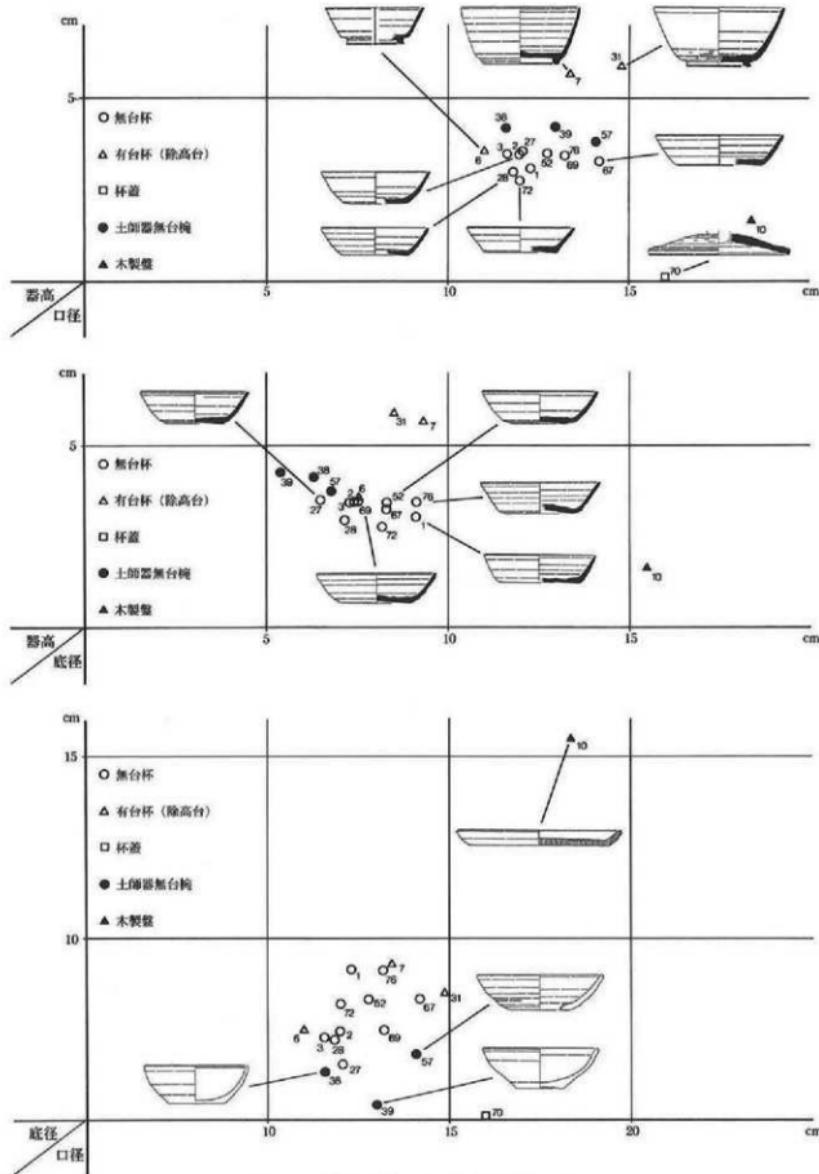
底部の切り離し技法については、大半がヘラ切りであるが、糸切りがなされる個体も定量の出土があり、本地域における存在は普遍的である。細別された各器種における量比では、それぞれに糸切り技法が含まれるが、相対的には無台杯Bに多い傾向がある。なお、糸切りは、全て回転糸切りである。

有台杯は、律令的な土器様式において最も一般的な杯類の器種であり、最盛期にはかなりの器種に分化する。それらの中でもA・Bとして識別される2器種が普遍的な存在である。有台杯Aとは、身が浅いタイプであり、有台杯Bはそれよりも身がやや深くなるタイプである。前者の有台杯Aは、前掛り遺跡から検出されておらず、食膳具の組成上においては欠落もしくは極めて少ないことが判り、本遺跡における食膳具の構成からすれば一つの特徴として指摘できる。有台杯Aに代わり主体となった有台杯Bも、調査区全体から見た出土量はそれほど多くない。そのため、細かな器種の細別は難しいことから、とりあえず法量における細分として、口径を参考に、大（III）、中（II）、小（I）として提示しておきたい。有台杯B₁は細片として検出された1点のみ、またB₂やB₃も数個体程度の出土であり、無台杯ほど普遍的な存在とはなっていない。なお、底部の切り離し技法の観察では、全てヘラ切りであり、糸切り技法がなされる個体は未確認である。

土師器 機能・用途から見た種別としては、食膳具と煮炊具がある。食膳具は、無台碗の1種のみで、高台の付く碗はない。煮炊具としては、長甕・小甕・鍋の3器種がある。

無台碗については、焼成や胎土および形態から細分類が可能であるが、器形全体をうかがえる資料が少ないと、全ての形態を網羅しているとの確証がないことから、法量における細別はせず、今回は便宜的な形態区分としてa・b・c・dの4類に類別を試みておきたい。なお、無台碗は全てロクロ皮形がなされ、底部切り離しも全て回転糸切り技法である。

まず、無台碗aは、概して底径が大きく、体部も緩やかに内弯しつつ外傾しており、口縁部がやや大きく広がる形態を呈する。器肉は相対的に厚く、焼成そのものも柔軟な感じを与える。調整についてはやや



第5図 前掛り遺跡古代土器（食器）法量分布図

粗雑さがあり、内面におけるロクロナデ痕もある程度観察が可能である。出土した個体数そのものは少ない。無台挽bは、やや小さな底部からやや内弯を強くして立上り、形態そのものに丸みを帯びるものである。器面外面におけるロクロ成形痕は顕著である。無台挽cは、比較的小さな底部から外傾を強くして立上り、体部中位において軽く屈曲するようにして内側に折れ、口縁部において強く横ナデが施されるものである。無台挽b・cの内面は、概して平滑に調整されており、ロクロ成形の痕跡はほとんど観察できない。無台挽dは、小破片のため器形は定かでない。ただし、器肉は薄く、口縁部付近は直線的に外傾しており、胎土中における砂粒の含有が少ないと、ほかのタイプとは異なっている。

煮炊具である鍋・壺類については、口縁部や破片数からすれば、本遺跡出土土器類の過半数を超える出土量を誇る。しかし、大半が破片であり、ある程度の器形までうかがえるものは極めて少なかった。このため、全ての形態を網羅することは到底不可能であることから、細分等は保留した。ただし、小壺については、口縁部が受口状を呈するものと、直線的に外傾する2つのタイプがあり、他遺跡の事例からみても普遍的な存在であることから、この2者をA・Bに大別したい。口縁部が受口状を呈する小壺Aは、胴部中位から底部までの形態が明らかでないが、口縁部が直線的に外傾する小壺Bからすれば底部が平底で系切りによる切り離しがなされていたと考えられる。ただし、小壺Aは、小壺Bより胴部の張りが弱いようである。長壺の形態は、それぞれの個体によって口縁部の形態にさまざまなバラエティーがあり、同一形態を見つけるはうが難しい状況にある。このような長壺の特徴は、土師器生産の一侧面を反映している可能性を持つ。しかし、本遺跡の資料から解明することは困難であり、今回はとりあえず長壺という器種にて一括しておきたい。鍋についても、長壺と同様の問題があり、また類似した背景を持つものと推察されるが、器形をうかがえる個体数が少ないと、鍋という器種にて一括し、今後の検討課題としておきたい。なお、底部の形態は、長壺・鍋とともに丸底をなすものと考えられる。

黒色土器 今回の調査では、細片1点が出土したのみで、器形等の詳細は明らかではない。ただし、器種は、おそらく無台挽と考えられる。体部は内弯つつ立上り、口縁端部に近い側面をやや強く横ナデして、やや外反する形態を呈していた。内面を平滑にして黒色処理した、いわゆる内黒土器である。

製塙土器 すべて小破片となって出土したため、器形については明らかでない。内面については剥離が著しく、調整等の観察はほとんど不可能であるが、外面についてはハケ調整等が施されている。なお、製塙土器に一般的な外面の輪積痕は、破片が細かいことを考慮する必要はあるが、当該資料からは確認できない。したがって、煎蒸に用いられた製塙土器ではない可能性も考えられる。

木 器 器として出土した事例は、SD-01溝内から出土した盤1点である。外観的観察からすれば、漆等は確認できないことから、白木のままの盤であったと考えられる。底面は大きく直線的で平板であり、短く立ち上がる口縁部は、直線的ながら緩やかな内弯の傾向を看取できる。

b 出土土器類等各説

前掛り遺跡において、今回出土した土器類等は、主に遺構内から出土したものが大半を占めるが、このほかに遺物包含層からの出土品（土層断面・遺構確認面・その他）も少なくない。本項では、主要遺構を中心に説明する。

i) SD-01溝出土土器類・木器（図面図版9・10、写真図版34・35）

当該溝跡から出土した土器類等は、須恵器・土師器を主に、製塙土器と木製盤がある。覆土は、下層底面付近において砂分を多く含み、上層と下層に大きく区分できる。遺物の取り上げも上層と下層に分別し

たが、3・9などを除く大半が上層部からの出土であった。したがって、本溝跡出土遺物は、溝の埋没過程において、それぞれがさまざまな意図により、日常的に廃棄されたものと考えられ、一括廃棄という観点から捉えられる状況とは言い難い。しかし、下層出土が量的に少なく、土器様相に差異があるとは言い難い。また、本溝内への廃棄行為そのものには、溝という性格が作用していたと考えられるが、この点について後述したい。

なお、製塩土器を除く出土土器類等全体の構成比率は、土師器が全体の78.7%、須恵器が19.1%、木製盤が2.1%となり、土師器の比率が圧倒的に多い。また、食膳具で見る比率は、土師器無台碗が57.1%で過半数を超え、須恵器は38.1%、このうち無台杯が28.5%を占めていた。

須 恵 器（1～7・14～16・26）

食膳具では、無台杯・有台杯があり、貯蔵具としては大甕が1点出土している。

無 台 杯（1～5） 図示できたものは5点に過ぎず、破片資料が多いため器形全体をうかがえるものは少ない。無台杯Aに属するものは、1のほか3と5が相当し、ともに無台杯B₂と考えられる。また、無台杯Bには2（B₂）のほか、4（B₁）が含まれる可能性が高い。

1は、全体に粗雑な成形がなされるもので、内外面には直径2～5mmほどの黒いじみでたような斑点が散らばっている。胎土は、佐渡小泊窯の製品に類似して精選されているが、少量で大粒の軟質な礫が混入しており、若干の疑問も残されている。口径12.3cm、底径9.1cm、器高3.1cmを計る。2は、比較的丁寧に成形され、器形は椀形に近い無台杯B₂の典型的な事例である。底面のヘラ切り離しは概して平滑で丁寧であり、東海系の系譜を引く可能性が高¹¹。口径12.0cm、底径7.4cm、器高3.5cmを計る。なお、内外面の一部がかなり摩滅し滑らかになっており、なんらかの小道具として転用もしくは再利用されたものと考えられる。3は、底面を欠く口縁部のみの破片であるが、粘りが強そうな胎土の特徴と、底部付近の作りから、底部の切り離しは糸切りの可能性が高い。口径は11.6cm、底径は7.3cm、器高は3.5cmを計る。4と5は、底部に至らない口縁部の小破片であり、器形をうかがえない。4の口径はおよそ12.0cm、5は13.0cmを計る。

無台杯の生産地については、1・5が佐渡小泊窯系と考えられるが、2～4はそれ以外であり、在地製品が含まれている可能性が高い。

有 台 杯（6・7） ともに有台杯Bに属し、やや身が深い。法量による細分から、6は有台杯B₁、7は有台杯B₂となる。6は、底部と口縁部が接合しない小破片からの復元図である。器肉は薄く、内外面の表面が暗灰色であるが内部は茶褐色となり、還元が行き届いていない。高台断面の大きさは、法量とは関わりがなく、杯部の大きさからすればかなりしっかりしたものを取り付けられている。復元された法量は、口径11.0cm、杯部底径7.5cm、高台径6.4cm、器高は杯部で3.6cm、高台までを含めて4.0cmを計る。7は、底部の全て、口縁部から体部は約1/2ほどを残す破片である。高台は、6と逆に内側に向いて外接する。また、高台内面には墨痕が頗著あり、摩滅はほとんど看取できないが、硯として転用されたものである。法量は、口径13.4cm、杯部底径9.3cm、高台径8.4cm、器高は杯部で5.7cm、高台までを含めると6.2cmを計る。この2点は、全て佐渡小泊窯系の製品である。

大 甕（14～16・26） この4点は全て同一個体である。胴部の破片しかなく、口縁部や底部の形態は不明である。これらの破片は、SD-01溝でも西側からほぼ集中的に出土しており、調査区西壁外には破片が埋もれないと判断される。外面は平行文のタタキ痕、内面は青海波文のアテ具痕が頗著である。

土 師 器 (8~9・11~13)

本溝内では80%近い出土量を誇るが、摩滅したり細片が多いこともあって、図示できたものは少ない。食器としては無台椀があり、煮炊具には長甕と鍋がある。

無台 椒 (8・9) 細片が多く、器形の全体をうかがえる個体は出土していない。ただし、破片から見た個体数は、12個である。8・9はともに底部破片であり、ロクロ成形後、底部は糸切りにより切り離されている。底径は、8が6.0cm、9は5.8cmを計る。

長 甕 (11・12) 図示したものは2点であるが、破片から算定された個体数は21個体に上る。11は、頸部が「く」の字を呈し、胴部の張りは弱い。口縁部は、ほぼ直線的に外傾し、端部が内側に折れ込むよう肥厚するが、その度合いは弱く、屈曲部内面を強く磨き込むようにして形作っている。胎土中には雑多な砂粒が多く含まれる。内外面ともに吹きこぼれ等による付着物は認められない。口径は22.0cmを計る。12は、口縁端部の外面に粘土を付加して肥厚させ、やや内寄する口縁部形態を呈する。頸部は「く」の字を呈し、肩部がやや丸く張り出している。口縁部内外面は横ナデ、頸部以下の体部内面には横位のハケ調整痕が残る。外面は、肩部までロクロナデが顕著であるが、それ以下には縦位のヘラ削りが施される。胎土には雑多な砂粒が含まれるが、量的には少なく、また細かい。口縁部から頸部にかけては煤の付着がある。口縁部の径は、およそ23.6cmである。

鍋 (13) 頸部付近から口縁部までの小破片から測図した。頸部は「く」の字を呈し、胴部はやや丸みがあり、口縁部は直線的に強く外傾する。外面はロクロ成形痕、内面はカキ目状を呈するハケ調整痕が残されている。内面の頸部以下には焦げ状の炭化物が付着する。口径は約32.0cmを計る。

なお、本溝内から出土した鍋は1点のみであったが、底部などの破片は、識別が難しい長甕類に含められている可能性がある。

製塙土器 (17~25)

全て本溝内からの出土であり、ほかの遺構や地点からの出土は確認されていない。およそ20点ほどが出土したが、全て小破片であり、器形をうかがうことはできないが、あまり大型とはならないバケツ形の鉢形を呈するものと考えられる。焼成は、二次焼成等によりかなりよく焼けており、内面の剥離も著しく調整痕等は観察できない。外面の残りは概して良く、縦位の細かなハケ調整痕が看取される。ただし、製塙土器に顕著な輪積痕はまったく認められない。胎土中には雑多な砂粒がかなり多く含まれている。

木 製 盆 (10)

覆土上層の下部から下層の上面にかけての層位から出土したもので、取り上げ段階でかなり細片化したが、1個体に復元できる。内外面に漆の痕跡はなく、白木のままの製品と考えられる。底部外面は平坦であり、木取り段階のままと考えられるが、内面はやや中央付近で厚みを増す。底部から立ち上がる胴部から口縁部は、ロクロ挽きで成形されるが、底面の上面と下面是ロクロを使用せず、ノミやチヨウナなどの工具により成形されたものである。口径18.4cm、底径15.5cm、器高は1.7cmを計る。

ii) S D -70溝出土土器 (図面図版10~12、写真図版36・37)

このSD-70溝は、「溝」という概念よりかなり規模が大きく、用水路や川などが連想される。調査中における遺物の取り上げは、第2層の上面を境に上層と下層に区分したが、大半が下層からの出土であり、その多くは北側斜面から検出された。上層として捉えられたもののうち、図示したものは須恵器無台杯の2点(28・29)がある。出土土器類は、土師器と須恵器で占められ、これら以外の種別は確認されていない。それぞれの量比は、土師器79.9%に対し、須恵器20.1%であり、全体からすればSD-01溝とはほぼ同

じ比率である。しかし、器種別にみると、土師器煮炊具が S D - 01溝や後述する S X - 53よりかなり少なく、33.3%を占めるに過ぎない。また、食膳具全体に占める土師器無台碗の比率は73.9%にも上り、比率としてはかなり高い値を示している。特に、下層出土遺物に限定した場合、須恵器無台杯が少なくなることからすれば、食膳具に占める土師器無台碗の比率は81.0%に達することになる。これらの構成比率は、日常的な「ケ」の状況というよりも、観念的には川という性格を帯びる S D - 70溝における特異性と考えざるを得ないであろう。

須 恵 器 (27~31・44~50)

食膳具である無台杯を主体に有台杯が少量併し、貯蔵具では長頸瓶と大甕が各々1点出土した。

無 台 杯 (27~30) 今回出土が確認された点数は5点、そのうち4点を図示した。器形については、全体をうかがえないものもあるが、無台杯A₁ (29)、無台杯B₁ (28)、無台杯B₂ (27)とバラエティーに富む。

27は、胎土や焼成の具合が佐渡小泊窯系の須恵器に近似するが、底部が細い糸により切り離された糸切り底の無台杯である。口径は12.1cm、底径6.5cm、器高3.6cmを計る。破片は、上層・下層の両者から出土しているが、覆土上端部に近い位置からの出土であり、どちらに属するかは断定できない。また、器面の内外面は、概して滑らかであり、なんらかの用途に転用された可能性がある。28は、内面における水曳きの痕跡が顕著で、口縁部外面には幅8mmほどが帯状に暗灰色となり、重ね焼きの痕跡もとどめる。佐渡小泊窯系の製品である。口径11.8cm、底径7.2cm、器高3.0cmを計る。29は、口縁部のみの小破片であり、器形全体はつまびらかでない。色調は白灰色を呈して焼成もやや甘い。復元された口径はおよそ12.6cmである。30は、底面へラ切りの底部破片である。焼成が不良で、胎土中における砂粒には雑多なものが多く含まれることから、土師器と見間違やすい個体である。底径はおよそ7.4cmである。

有 台 杯 (31) 有台杯B IIIとした1点のみ出土している。焼成がやや甘く、還元化も不充分であり、全体に白っぽい色調を呈する。胎土は比較的良く精選されるが、海綿骨針の含有が顕著である。底部からの立上りをなす腰の部分には2帯のヘラ削り状の調整が施されている。口径14.8cm、底径は杯部で8.5cm、高台径が7.3cmを計り、器高も杯部が5.9cm、高台を含めると6.4cmとなる。

長 頸 瓶 (50) 底部と頸部以上を欠損する。胴部最大径は、中位よりやや上部にある。外面は概して丁寧にロクロナデされる。内面の胴部下位には横位のハケ調整痕が顕著である。

大 甕 (44~49) 全て同一個体の破片である。口縁部は、「く」の字を呈してやや直立するように立上り、口縁部上位にてやや外反を強くする。口縁端部を肥厚させ、面取りが施される。胎土中にはやや大粒で雑多な砂粒がやや多く含まれる。胴部の形状は、破片資料が接合しないためはっきりしないが、肩部は強く張り出しが判る(47)。外面は、細かな格子目のタタキ具により成形され、さらに一定間隔を開けてカキ目状にハケ目が施される。内面は底部付近が平行文、胴部から頸部までが青海波によるアテ具痕が顕著である。口径は26.0cmを計る。なお、44の口縁部破片は、S D - 70溝覆土第2a層から出土したものである。

土 師 器 (32~43)

食膳具の無台碗を主体に、長甕と小甕の煮炊具が伴っている。鍋については、口縁部の破片が見当たらず、その存在は確認できていない。

無 台 碗 (32~39) 出土総数は17個体と算定されたが、図示できたものは8個体に過ぎない。ただし、S D - 01溝ではほとんど図化に至らなかったことを考えると、図化率47%という数値は、大きな破片もし

くは完存率の高さを示している。

器形分類では、無台椀b（32・34・36～38）、無台椀c（35・39）、無台椀d（33）があり、無台椀bを主としながらもバラエティーに富む。底部の欠損品も多いが、全て糸切り底と考えられるもので占められている。

無台椀bは出土量が多く、法量的には大小もしくは大中小に区分できる。38は、本類の中では唯一小形に属する。焼成は不良で、胎土中に含まれる雑多な砂粒が器面に数多く露出する。口径11.6cm、底径6.3cm、器高4.2cmを計る。32は、口縁部を欠く底部破片である。底径は6.8cmと概して大きなことから、大形品の可能性が高い。胎土中に砂粒はほとんど含まれておらず、若干ながら海綿骨針を含む点などは、須恵器の食膳具とほとんど変わらない粘土が使用されていたことがうかがわれる。34・36・37は、中形品の可能性が高い。焼成は比較的良好なほうで、胎土中の砂粒には雑多なものが多く含まれるが、概して精選されている。3点とも、口縁部の破片であり、器形の全ては明らかでないが、復元された口径は、34と36が13.0cm、37が13.4cmであった。

無台椀cは2点が出土したが、これが今回出土した全てである。焼成はともにやや良好である。39は、口径13.0cm、底径5.4cm、器高4.2cmを計る。また、35は口縁部の小破片であるが、復元された口径はおよそ14.0cmであった。

無台椀dとした33は、本遺跡唯一の存在であり、普遍的な器種とすることができるかは、もう少し検討する余地が残されている。口縁部の小破片から復元された口径は、およそ12.4cmである。胎土にはほとんど砂粒が含まれず、良く精選されている。

長甕（42・43） 口縁部の破片もなく、器形等は明らかでない。出土点数は15点ほどが数えられる。しかし、全て細片であり、個体数は多くても溝内に意図的に廃棄されたとするよりも、偶然的な流れ込みに近いものと考えられる。胴部過半の成形は、外面を平行文のタタキ具を使用して叩き、内面は青海波文のアテ具（42）、もしくは無文のものが使用されている（43）。底部は丸底である（43）。

小甕（40・41） 小甕A（40）と小甕B（41）の両者が出土している。40は、受口状を呈した口縁部の破片である。胎土には微細な砂粒が少量含まれ、わずかではあるが海綿骨針も観察できる。概して薄い作りである。口径は13.8cmを計る。41は、ほぼ完形となった資料である。焼成は極めて良好である。口縁部は「く」の字を呈した頸部からほぼ直線的に外傾し、胴部はやや丸みを帯びる。底部に近い位置に沈線が一条施されるが、若干器形を異にしつつも同様な個体はB-4⑥グリッドで出土している（82）。口径13.0cm、底径6.2cm、器高1.5cmを計る。

iii) S X-53落ち込み出土土器類（図面図版12、写真図版38）

B-5グリッド南半部を中心にA-5グリッドに若干かかる範囲に広がる不定形で浅い落ち込みが、S X-53である。その性格は、一般的な遺構というより、生活面における浅い窪みというニュアンスが強い。土器類の出土量は、土師器煮炊具を主体としてかなりの個体数がある。しかし、そのほとんどが細片化され、図化することが困難な資料であった。土師器と須恵器における総体の量比は、土師器81.4%に対し、須恵器18.6%であり、前述した2遺構と大きな差は認められない。しかし、当該資料で最も特徴的なことは、須恵器の比率に大きな差がない反面、土師器における煮炊具の占める割合が、71.1%と極めて高く、土師器無台椀である食膳具は10.3%を占めるに過ぎない。このため、食膳具における土師器無台椀の比率も、過半数を割る37.0%と、他の遺構とは大きく異なる結果となっている。この比率とは、溝遺構であるほかの2遺構とは異なり、性格を大きく違えていることを示唆している。

須恵器 (51~55・59・62~63)

食膳具は、全て無台杯で構成され、有台杯は確認されていない。貯蔵具としては、短頭壺と大甕がそれぞれ1個体出土している。

無台杯 (51~55) 器形の全体をうかがえる個体は少ないが、あえて器形を分類すれば、無台杯B₁(54・55)と無台杯B₂(51・52)が多く、53については無台杯A₂もしくは無台杯B₁となる。

51は、「丸」と推定される墨書き記されている。底径はおよそ6.0cmである。52は、全体の器形をうかがえる唯一の資料である。口径12.8cm、底径8.3cm、器高3.5cmを計る。この2点は、底部糸切り底であるが、粘りの強そうな素地及び胎土中に含まれる砂粒の構成、そして底部において糸切りがなされる面が、底径より一回り小さい点などで共通する。胎土の状況からみて在地で生産された可能性が高い。53は、内面が強く押さえつけられて、凹凸の著しいロクロ成形痕をとどめる。佐渡小泊窯系製品の可能性を持つが、胎土の観察からは、在地窯産の可能性も否定できない。復元された口径は、歪みのため正確に計れないが、およそ11.8~12.6cmと推定できる。54・55はともに底部がヘラ切りの無台杯で、口縁部を欠失する。底径は、54で7.4cm、55は7.5cmを計る。両者ともに外表面が平滑で滑らかであり、なんらかの道具として転用された可能性が高い。なお、この2点は佐渡小泊窯系の製品とは考えられず、在地もしくは越後国内で調達された可能性が高い。

短頭壺 (59) 大小5片ほどの破片で出土したが、全て接合できず、図上にて復元した資料である。胎土中には複雑な砂粒を含むことから、在地で生産された可能性が高い。口径10.2cmはおよそである。なお、破片の一部は、S X-53の北辺を超えて出土した。

大甕 (62・63) 頭部の下及び胴部の破片が数点出土した。外面は平行文のタタキ具痕、内面は青海波文のアテ具痕が顕著である。同一個体の破片は、S X-33(64)やS K p-25ピット(65)およびB-4~5グリッドやS D-01溝から出土している。これらの散布範囲は、いずれも住居の可能性を持つSB-79掘立柱建物の周囲に広がっており、S X-53出土土器類が居住等に深い関わりを持っていることを裏付けている。

土師器 (56~58・60~61)

器種としては、食膳具の無台椀若干のほか、長甕・小甕・鍋といった煮炊具が多く出土している。ただし、細分化した破片資料が主体であり、図化できたものは少ない。

無台椀 (57) 図示した1点は、無台椀aである。胎土中には砂粒のほか、焼土のような赤褐色粒あるいは海綿骨針を含む。須恵器的な技法の導入が不充分で、土師器らしさを多く留めており、伝統的な器種と考えられる。口径は14.1cm、底径6.8cm、器高は3.8cmを計る。

長甕 (60) 出土総個体数は49点と、圧倒的な出土量を誇るが、そのほとんどを胴部破片が占め、図化できたものは1点だけである。焼成は極めて良好で、全体に厚手である。口縁部外面に横ナデが施されるが、それ以外は横位のハケ調整痕が顕著となっている。口径はおよそ23.0cmである。

小甕 (56・58) 出土した総数は16個体を数えるが、器形の全体をうかがえる事例はない。56は、底径6.0cmの底部破片であり、内面にはロクロ成形痕の著しい凹凸を残している。58は、焼成不良な受口状を呈した小甕Aである。推定された口径はおよそ14.4cmである。

鍋 (61) 61は口縁部小破片からの復元実測である。口縁端部が内側に折れ込むように肥厚する。出土総数は4個体まで数えられた。しかし、頸部付近から口縁部の調整は主にロクロによる横ナデ痕であるが、胴部の調整は明らかでない。長甕類との区別ができない場合が想定される。

iv) その他の遺構等出土土器類（図面図版13、写真図版39）

ピット・土坑等の遺構内からも遺物が出土しているが、出土量は少なく、一括性等のまとまりもない。ここでは、遺構別に取り上げたい。

S X-33落ち込み(64) 須恵器大甕片1点が出土した。S X-53やS D-01溝等から出土したものと同一個体である。

S K p-25ピット(65) 須恵器大甕片1点が出土したが、S X-33やS X-53やS D-01溝等から出土したものと同一個体である。

S K p-17ピット(66) 須恵器有台杯B IIの小破片が1点出土した。雑多な砂粒が多く含まれていることから、在地などにおける製品の可能性が高い。推定される口径はおよそ12.0cmである。

S X-62落ち込み(67) 須恵器無台杯A₁が1点のみ出土した。口径14.2cm、底径8.3cm、器高3.3cmを計る。胎土中には岩状の特徴的な砂粒が多く含まれていることから、在地窯産の可能性が高い。なお、内外面が若干ながら平滑に摩減しており、なんらかの用途に転用された可能性を持っている。

S K p-38ピット(70) 須恵器杯蓋1点が出土した。ツマミ部分が欠損する。全体に厚手の作りで、口縁端部の折り返しは小さい。調整では天井から3／5ほどまでヘラ削りが施される。口径は16.0cmを計る。胎土中には、微細な砂粒が多く含まれている。在地窯産の可能性が高い。

土層断面№7出土土器(68~69) S X-53に隣接した調査区壁から出土した。出土位置は、遺構確認面より20cmほど下であったことから、なんらかの遺構に伴うものと考えられる。この他に長甕などの破片が若干量出土している。図化したものは2点、このうち1点が今回の調査で唯一出土した黒色土器であった。ただし、口縁部付近の小破片である。器形は、全体に丸みを帯び、口縁端部付近の側面にやや強い横ナデが施され、短く外反する形態を呈する。内面は、丁寧に磨かれ、内黒もしっかりしている。推定される口径は、およそ13.8cmである。69は佐渡小泊窯系の須恵器無台杯B₁の製品である。焼成は不良で、やや摩滅する。口径は13.2cm、底径8.3cm、器高3.5cmを計る。

v) 包含層等出土土器（図面図版13、写真図版39）

包含層出土として把握された土器類は、そのほとんどがA~B-4~5グリッドで検出されている。この範囲は建物跡など遺構群の密集地であり、当時の日常的な生活に用いられたものが、無意図的に廃棄されたものと考えられる。以下、種別にしたがって説明を加えたい。

須 恵 器 (71~78・85~87)

無 台 杯 (72~77) 器形をうかがえる資料としては、無台杯A₁(72)、無台杯A₂(76)があるが、74・75は無台杯A₁、73は無台杯B₂の可能性がある。底部の切り離しは、73・76が糸切り底、72・74・75・77はヘラ切り底である。また、77は佐渡小泊窯系の製品であり、これ以外は在地窯産などである。72は、口径12.0cm、底径8.2cmを計り、器高は2.8cmとかなり低い。76の法量は、口径13.2cm、底径9.1cm、器高3.5cmである。底部破片である3点の底径については、73が11.6cm、74と75は7.1cmであった。なお、76と77の底部外面には墨書きがあり、77については「右」の可能性がある。

有 台 杯 (71・78) 71は有台杯B₁と考えられるが、底部を欠失しており断定できない。推定口径は11.6cmである。78は、有台杯B₃の小破片である。推定口径は15.4cmである。この2点は佐渡小泊窯系と考えられる。

大 甕 (85~87) S D-01溝などから出土している一連の大甕である。85はB-5@グリッド、86はB-4@グリッド、87はB-4⑥グリッドからの出土である。

土器類(79~84)

図化した資料に食膳具は含まれないが、細片化した無台碗が若干量存在する。煮炊具には、長甕・小甕・鍋の3器種がある。

長甕(80~84) ほとんどが小破片であり、図化できるものは少ない。80は口縁部の断面である。口縁端部で、内側へ折れ込むように肥厚する。口縁部の形態は鍋類とも共通する点であり、今後は両者をあわせて検討していく時のポイントと考えられる。今回は資料が少ないとから、保留しておきたい。81は胴部上位の破片で、内外面とも横位のハケ調整が施される。83・84は胴部下位の破片であるが、外面にタタキ具の痕跡を明瞭に留めるが、内面はハケ調整などにより平滑となるよう調整されている。

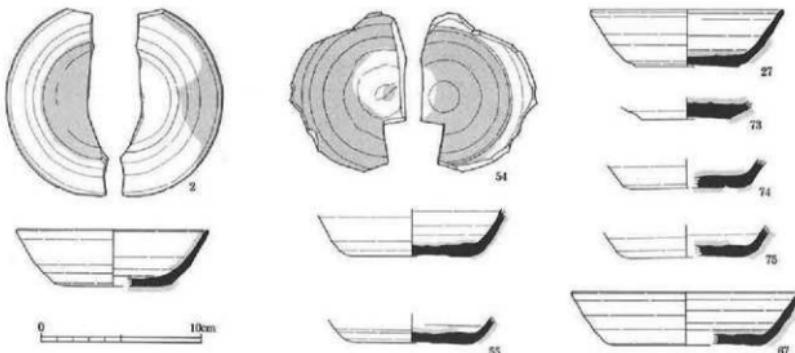
小甕(82) 底部破片であるが、立上りはSD-70溝例より強い。その他の調整や底部付近の沈線などは共通する。底径は5.6cmを計る。

鍋(79) 口縁部の小破片である。砂粒をほとんど含まず、焼成も甘い資料である。調整は、内外面とも横ナデ調整である。

c 墨書須恵器と転用須恵器

墨書須恵器(51・76・77) 調査区内から出土した墨書は合計3点である。全て破片であり、文字の全ては残されておらず、正確に判読できる事例はない。51は「丸」の右側部分のみ、77は「右」と読める可能性が高いが、断定は難しい。なお、76はまったく不明である²。

転用須恵器(2・54~55・27・67・73~75) 性格や用途は不明であるが、須恵器無台杯に限り、滑らかに摩滅した事例が見受けられた。その特徴は、外面は体部から口縁部にかけて、内面は主に底面に顯著である。内外面とも摩滅の程度はほぼ同じである。このことは、外面と内面とも同じ材質あるいは性質のものが触れて摩滅に至ったことを意味する。つまり素手でもって使用したとすれば、それと同じ材質は人間の皮膚ということになる。今回の調査区は、極一般的な日常生活を営む場の一部に相当すること、隣接して川状の溝が存在することといったありふれた状況証拠しかないが、沐浴等における小道具、つまり垢摺などに転用された可能性を指摘したい。ただし、単なる肉眼による観察や、考古学的方法論で



第6図 前掛り遺跡の転用須恵器(無台杯)

は限界があることから、今後において充分な検討が必要な事項であることをあわせて指摘しておきたい。
なお、このほかに、硯に転用された有台杯（7）がある。

2) 柱 根（図面図版14、写真図版43・44）

前掛り遺跡から出土した柱根は、合計6本である。このうちSKP-58ピットから出土した1点（写真図版43-a）は、材質がスギと考えられる針葉樹であり、現代のはさぎ用の柱と断定した。この1点以外は全て広葉樹であり、樹種鑑定は経ていないが、クリ材の可能性が高い。柱材端部の形態は大きく3つに区分が可能である。ここでは便宜的に、A類：両面カットにより尖らせるもの（91・94）、B類：片面のみカットし、一面は輪線と垂直方向で安定させるもの（92・93）、C類：輪線と垂直な面で端部を削出するもの（95）としたい。ただし、同じ棚列であるSA-80の3本が全て異なった形を呈しており、柱端部の形態については、同じ構造物で揃えるようなことはなされなかった可能性が高い。

柱材は、91が単独ピット（SKP-3）から出土しており、調査区外における棚列もしくは建物跡の存在を想定させる。柱の直径は24cmと大きい。92はSB-78掘立柱建物跡の内部から検出されたピット（SKP-11）から出土した。直径は14cmを計るが、建物に付随するすれば床などを支える束柱であった可能性が高い。93-95は、SA-80棚列の柱である。93・94は、残存する長さ及び直径も14cmとほぼ同じである。しかし、北端に相当するSKP-65ピットから検出された95は、直径が17cmと一回り大きく、そして地下に埋設されていた長さも倍以上である。このことから、SA-80棚列の端に位置し、門柱など重要な部分を構成していた可能性がうかがえる。

3) 磺と自然遺物

a 磺（写真図版45）

調査区内からは、橙色に焼けた安山岩が概して多く出土した。そのほとんどは、焼かれた後、水中などに投げ込まれたのか、大小に碎けたものが多い。なぜ過熱し、また割れるような行為に至ったのかはまったく判らない。日常生活に伴うものか、あるいはSD-70溝における土師器無台椀の廃棄行為と関わる祭祀的な意味合いを含むものなのか、今後の検討課題としたい。

b 自然遺物（写真図版45）

主にSD-70溝内から出土した。種別としては、大量の木材である。樹種は明らかでないが、針葉樹は含まれておらず、全て広葉樹である。種子等には、クルミ・トチノミ・ツバキなどが見受けられる。

木材のほとんどは、人為的な痕跡を見出し難いことから、大規模な洪水等により、川や溝などの低いところへ流れ込んできた可能性が高い。流木の流入経路は、北側のSD-01溝ではまったく出土していないことから、南側の鶴川上流方面と考えられ、この流木によりSD-70溝は、水の流れる流路を塞がれた可能性が高い。このためか、材木の一部に破碎のための工具痕を留めるものがあり、その周囲には材木がないなど、材木等の除去を試みた可能性がある（挿写真2、写真図版27）。

2 中世以降の遺物

1) 中世陶器（図面図版13、写真図版40）

中世遺構の遺物は、概して少ない。陶器類として出土が確認されたものは、珠洲と越前それぞれ1点のみである。88は、珠洲の大甕の胴部破片である。外面は、概して粗く深みの浅いタタキ具の痕跡を留める。時期的には珠洲編年のV期～VI期、おおむね15世紀頃と目される〔吉岡1994〕。89は、越前の掘鉢である。口縁部を欠損するため時期等を明確にできないが、越前の編年觀からすればおおよそV期、16世紀頃と考えられる〔辯峰・田中編1994〕。

2) 石製品（図面図版13、写真図版41）

ここで取り上げるものは、砥石1点である。形状は小形で、過半を欠損している。使用面は4面であり、端部に刃部が切り込んだ痕跡を留める。石質は不明であるが、粒子が細かなことから仕上げようと考えられる。A-4②グリッド第III層出土。ただし、古代のものである可能性は否定できない。

3) 他の遺物

この他に、近世以降のものとして、肥前系の陶磁器等が出土している。器種としては、碗類を主に香炉や、大形品も含まれている。ただし、量的にはそれほど多くなく、小破片が多いことから、今回はその全てを割愛する。

註

- 1) 上越市教育委員会並沢正史氏のご教示による。
- 2) 新潟大学小林昌二氏のご教示による。なお、9世紀の中頃から、人名に伴う「磨」は「丸」と記される事例が多くなることであり、51の墨書きが「丸」とすれば、人名に関わる墨書きの可能性があるという。



補写真2 SD-70溝跡：流木除去箇所の状況と工具痕のある流木

VI 総括

1 前掛り遺跡の古代集落

1) はじめに

鶴川中流域の沖積地には古代・中世の遺跡が分布しているが（第2図）、これまでに発掘調査が実施された遺跡はなく、今回の前掛り遺跡の調査が初めての事例となった。遺跡の立地や分布状況からみて、当該地では古代・中世から稻作を経済基盤としていたと考えられる〔品田1995〕。しかし当該地における古代の集落や水田の出現・展開については依然として不明である。

今回の調査で検出できた主な遺構は、掘立柱建物、柵列、溝であり、調査区壁からは水田跡が確認された。集落全体において、これらの遺構がどのように配置され、機能していたのかを明らかにしようと試みたいが、調査区は遺跡のわずか一部分にすぎないのであり、遺跡を復元するにあたっては、検討材料の不足は否めない。

出土遺物の検討から、本遺跡はまず9世紀中葉という短い期間に營まれたと考えられる。9～10世紀になると東日本でも条里型地割が施行されるなど、開発が進展していった様子をうかがうことができる〔坂井1996〕。今回の調査対象範囲は延長が約60mであったことから、1町あるいは半町を単位とする条里型地割をもとにしたような遺構の配置を読み取ることは不可能であった。また第IV章でも触れたように、SD-01の方向は直線ではなく、調査区の東側で路流に変化が認められること、建物や柵列との方向が一致であることなど、集落内の構成を解明するには困難が多い。

本節では、柏崎平野南部、鶴川中流域に存在した古代集落について検討することを目的としたいが、前述のように調査事例は少なく、比較検討する資料に乏しい。そのため越後の他の古代集落の事例を参考とし、前掛り遺跡の集落について考察してみたい¹⁾。

2) 前掛り遺跡の立地と遺構

前掛り遺跡で検出された遺構は、掘立柱建物が1棟のみであるなど、集落の中からみれば断片的なものである。ここでは前掛り遺跡の立地について述べ、溝の性格・機能、さらに水田について考察する。

遺跡の立地 現在の鶴川中流域に広がる平野は、平坦で、南から北へとわずかに傾斜している。前掛り遺跡においても、付近と同じように平坦な地形に立地してしており、周囲とは地形的に画されることはない。ただし、河道が移動するなど、地形環境は変貌しているのであり、遺跡の立地を検討するためにも古代の地形を復元する必要がある。

確認調査では今回の調査区の約200m北のトレンチにおいて基本層序を確認したが〔柏崎市教委1995〕、遺構確認面とした青灰色粘土層上面の標高は約4.8mであり、今回の調査区における確認面は、標高が約5.8mである。したがって特に起伏がなければ、旧地形も同様に南から北へ傾斜していた。しかし現地形に比べて、古代では傾斜が急である。また8～9グリッド間の旧地形では逆に北から南へ傾斜していたことに注目したい（第3図）。SD-70とその南側には、洪水によって沈殿したと思われる粘土の堆積があ

るのはこのことによる。

第2図をみると、遺跡の南東側では、鶴川の旧河道が遺跡に向かって突き出るように湾曲していたことがわかる。また新屋敷・南下付近から北西へ流れる旧河道が、前掛り遺跡の南側付近を通過し、鶴川の湾曲部へ合流していたことがわかる。遺跡付近の旧地形は、単なる平坦地ではなく、これらの旧河川の自然堤防によって、周囲よりも若干隆起しているのである。前掛り遺跡には明瞭な段差はなく、人々は鶴川の氾濫などには危険を感じていたはずであるが、わずかでも周囲より高い土地に集落を求めていたと考えられる。

溝の機能 調査区の北端を東西に走るSD-01は断面の形態から、人工的な溝と考えられる。第IV章では集落の境界を示す区画溝の可能性を指摘した。確かに調査区の北側に対しては集落の境界に該当すると思われるが、調査区の東側・西側では集落内部を貫流していたことも否定できない。覆土には砂が混じることから流水路であったと思われるが、今回の調査ではSD-01と同時期に存在した水田を発見することはできなかった。そのため、SD-01を灌漑用水など、農業に関する水路であるとの判断は避けることにした。

そこでこれら以外の機能について考えてみたい。SD-01の約30m南にあるSD-70は集落の南側を流れる小河川である。底面の標高を比べると、SD-01はSD-70よりも数cm高く、流路はやや南側を指向することから、SD-01はSD-70に調査区の西側で合流するように築かれた可能性が高い。このことから、SD-01には付近の湧水や集落からの排水を流し込み、やがてはSD-70や鶴川に流れるようにしたと考えられる。両者から出土した土器をみると、SD-70は完形品に近いものが多いのに対し、SD-01には廃棄されたような小片がほとんどであることも裏づけとなろう。

水田耕作 前掛り遺跡において、古代に水田耕作をしていた痕跡を遺構確認面でみることはできなかつた。しかし調査区東壁の観察をすると、9世紀中葉の遺構が第V層によって覆われ、完全に埋没すると、第V層が耕作されて水田（SX-78）が営まれるようになったことがわかる。この水田の年代を決定づける資料はなく、第IV章ではひとまず10世紀前後という年代を想定した。

SD-70の覆土をみると、第V層が堆積した段階でもSD-70は幅2m、深度60~70cmほどの河川あるいは水路として、この付近に水を供給する灌漑機能を有していたと思われる。またSD-72a・bとそれに先行するSD-73は層位的にはSX-78と同時に存在した溝である。いずれも流水の痕跡があり、SX-78に伴う水路といった性格が考えられる。SX-78とSD-72a・b、SD-73との間には調査区壁で約12~13mの間隔がある。土層のみのからの所見であるため、水田と水路との位置関係などについては不明とせざるをえない。

畠畔は確認されてはいないので、水田区画について言及することはできない。しかし一般的には、古墳後期~古代は微起伏が減少して地形は平坦化する〔高橋1996〕。当該地においては、もともと平野部は細長く、鶴川の運ぶ土砂によって起伏がみられなくなるのも早かったと思われる。平坦な地では水田の区画が小さくなる必要はなく、大きな区画が可能である。このような地形環境から生産性の増大がはかられたと思われるが、ここではその指摘に止める。SX-78は洪水などの影響で放棄され、付近の低い土地とともに湿地となる。再開発は中世末~近世になってからである。

3) 頬城平野の古代集落遺跡

ここでは、前掛り遺跡と同様におもに自然堤防上に立地する、越後の古代集落遺跡を挙げる。柏崎平野

とは米山の山塊で画されている頸城平野では、北陸自動車道や上新バイパス等の造成に伴って、平野西部にあたる上越市内に所在する遺跡が調査されている。先行研究に依拠しながら〔おもに春日1995〕、今池遺跡と一之口遺跡について概略する。

今池遺跡〔新潟県教委1984〕 今池遺跡は、上越市大字今池に所在し、関川右岸の自然堤防上に立地している。下新町遺跡・子安遺跡とともに今池遺跡群と総称されているが、この3遺跡は、年代・立地において共通する点が多い。今池遺跡群の間を櫛池川が北西へと貫流し、関川へと合流する。この櫛池川は、所々に窪地など、旧河道の痕跡を残しているが、現在とは異なってかなり激しく蛇行していたと思われる。本遺跡の南側～西側には関川段丘面の縁辺部があるが、その段丘崖までが遺跡の範囲と考えられる。北側および東側は櫛池川の流路によって範囲が規定されるが、流路変更の時期等については不明である。

今池遺跡の年代は、8世紀初頭～9世紀初頭（前半期）と9世紀前半～10世紀初頭（後半期）の2時期に大別される。前半期では官衙に関連する性格づけがされているが、後半期では当該期の一般的な集落とされる。ここでは前掛り遺跡と同時期である後半期のみに限定して述べる。

後半期になると平面積50m²を超えるような大型の掘立柱建物は減少し、2～3間×4間、20～40m²前後の小規模なものが多くなる。また畝状小溝が存在することから、畑としての土地利用を考えられる。さらに幅3～4m、深度1.8mという大溝が検出されており、報告では農業用水の水路という可能性が指摘されている。

集落内における掘立柱建物の配置をみると、数棟の小規模な建物群が調査区内に南北400m近い範囲で散在している。推定される前掛り遺跡の範囲と比べても、本遺跡は規模の大きな集落であり、溝などの設備に至っても大型である。ただし溝の走る方向は、建物の指す方向と一致しておらず、この点は前掛り遺跡のS D-01とS B-79にも共通している。今池遺跡の大溝が灌漑用の水路であれば、未調査の部分に水田の広がりが考えられるが、建物群や畝状造構との配置の上での関係は不明である。

一之口遺跡〔新潟県教委1986、新潟県教委・新潟県埋蔵文化財調査事業団1994〕 上越市大字木田字一之口ほかに所在し、頸城平野西部を南へ流れる関川の左岸に位置する。遺跡の南側には、関川の支流である正善寺川が東へと流れている。本遺跡は関川の氾濫原より1段高い高田面の自然堤防上にある。南側には段丘崖が残るが、ここから北側・東側へと緩やかに傾斜している。

遺跡は古墳前期・6～7世紀・8～11世紀に営まれている。ここでは今池遺跡と同様に前掛り遺跡に近い時期の状況を述べたい。掘立柱建物は、2間×3間で、平面積20～30m²の小規模なものが多く、比較的大きな建物として40m²前後のものがわずかに確認される。1～3棟の建物の群が東西約500mの調査区内にまばらに確認できる。しかし掘立柱建物のほか、井戸・土坑・畝状小溝・溝といった遺構の分布を見ると、最低4つの遺構の単位があり、半町ごとに区画された条里型地割をもとにこれらの遺構が配置された可能性もある〔坂井1989〕。掘立柱建物の配置からみれば、基本的に今池遺跡に近い集落のあり方をしていたと思われるが、今池遺跡よりも建物の密度が低く、わずかにみられる比較的大型の建物も今池遺跡のものより小さいことが違いといえる。また大型の溝があり、農業用水と考えられる。ほかに遺跡を溝が縦横に走り、複数の溝が交差、あるいは分岐している。

4) 集落と開発

頸城平野における前述の2遺跡をみると、9世紀中葉の前掛り遺跡は一般的な集落であったことが考えられる。ここでは9世紀中葉の集落の復元を試み、当該期の開発について触れたい。

集落復元試案 前掛り遺跡は、前述の2遺跡のように段丘崖等ではなく、範囲は明確ではない。確認調査の結果も含めれば、集落の北端はSD-01、南端はSD-70とできる。先にSD-01とSD-70は調査区の西側で合流する可能性があることを述べた。両者が角度を変えずに調査区外へ伸びているとすれば、合流するのは調査区から西へ約30m付近である。調査区東側におけるSD-01のカーブや集落の広さを考えると、調査区の東西では、SD-01が境界を示していたとは考えにくい。今段階では遺跡の範囲は不明確なもの、調査区内では遺物の分布が東側に多いことを考慮すれば（図版8）、9世紀中葉の集落の中心部は調査区の東側にあったとも考えられる。

次に建物について考察したい。SB-79掘立柱建物は2間×2~3間という小規模な掘立柱建物であるが、この時期の今池遺跡や一之口遺跡で多くみられる建物と同じ形態・規模である。前掛り遺跡でもこれら2遺跡のように、1~数棟の小規模な掘立柱建物群が散在していたと考えられる。ただし今池遺跡や一之口遺跡では、すべてこのような小規模な建物で集落が構成されていたのではなく、これらよりは傑出した比較的大型の建物がわずかにある。この建物の居住者としては、戸主といった集落のリーダーの人物が考えられる。前掛り遺跡においてもこれと同様の状況が想定できる。ただし大型建物の大きさの程度は、集落によって異なると思われる、集落内におけるリーダーの人物の権力も各集落で異なると思われる。前掛り遺跡の場合は、集落全体の規模を考えれば、今池遺跡等よりも小さいと思われる。

鶴川流域の開発 古代の前掛り遺跡を含む鶴川流域には、三嶋郷が設置されたという説が有力である。今の段階では、前掛り遺跡と同時期に三嶋郷へ編成された集落遺跡を特定することはできない。前掛り遺跡にあった集落は、他の集落とともに「村」を構成し、50戸毎に三嶋郷へ編成されたと考えられる¹⁾。三嶋郷内の集落は当該地に点在するように分布し、集落、さらにそれに伴って水田等の開発がなされたと思われる。

ただし当該地が現在のように広範な水田地帯として利用されたのは、中世末期～近世前期の急激な開発によるものである。農業技術などを考慮すれば、古代の開発には限界があり、実際の開発量はわずかなものであったと考えられる。しかし三嶋郷の中心地と推定できる三嶋郷²⁾では、三嶋郷内でも特に積極的な開発が進められたと思われる。前掛り遺跡も小さい集落ながら、三嶋郷の開発には大きな役割を担っていたと考えたい。

5) おわりに

前掛り遺跡では、前代には人間の住んでいなかった土地を開発して集落となっている。9世紀は国司・郡司や税制等、地方行政において変容がみられる時期といわれる〔吉田・大隅・佐々木1995〕。その背景には、9世紀中葉に成立した前掛り遺跡のような新興集落の影響があったと思われるが、これ以上の追求は資料の増加を待ちたい。

註

- 1) 旧土地構成図等をもとにした検討も、ある程度の遺跡の復元には可能だが、今後の課題としたい。
- 2) 集落・村・郷の関係については鬼頭清明氏の論考〔鬼頭1989〕を参考とした。
- 3) 箕輪遺跡の発掘調査によってその可能性はますます高くなったといってよい〔新潟県埋蔵文化財調査事業団1996〕。

2 前掛り遺跡における古代土器の様相

1) はじめに

柏崎平野における平安時代の集落遺跡は、これまでに調査された件数だけみれば、比較的多くの事例を掲げることができる。主な調査事例としては、平野北東部では吉井遺跡群内の諸遺跡〔柏崎市教委1985・1987・1990b〕や刈羽村枯木A遺跡〔刈羽村教委1995〕、西山町尾野内遺跡〔新潟県教委1982〕があり、西南部では藤橋東遺跡群香呑C遺跡〔柏崎市教委1995b〕、そして現在大規模な調査が実施されている箕輪遺跡〔新潟県埋文事業団1996〕などが挙げられる。しかし、調査の規模は箕輪遺跡を除けば概して小さい。また、既報告事例をみると、大半の遺跡が平安時代だけではなく、奈良時代以前や中世以降の遺構が重複しており、当該期に限定した遺構配置までを復元することはなかなかできないのが実情である。このような調査の現状からすれば、今回報告する前掛り遺跡の事例は、調査面積が狭いなどの難点があつても、遺構の重複がほとんど認められないこと、また土層の堆積状況からも短期間で廃絶された可能性が高く、当時の姿を比較的単純に知り得る事例として評価することができよう。さらに、このような遺跡あるいは遺構の検出状況とは、この場所に持ち込まれ、そして使用された生活用具にも、年代的な幅がある程度限定されていることを意味することになる。

ところで、柏崎平野とした地域内における考古学的な時間軸、つまり古代土器の編年は、これまでに若干の試みはなされてきたが、しかしまだ整っているとは言い難い状況にある。その事由の最大要因とは、時期的にある程度限定されるまとまった資料——例えば遺構内一括出土土器群——が極めて乏しいという現状にある。前述のごとく、今回得られた前掛り遺跡の資料とは、ある程度時間的な幅が限定されている可能性が高い。たとえ、その幅が遺構内一括ほど狭くはないにしても、良好な一括資料が得られるまでは、ある時期の様相を物語る資料として活用することが許されるであろう。また、遺構内一括出土より、一定の時間幅を伴うとすれば、この「前掛り」と呼ばれることとなった地に、一時にせよ生活した人々が、当時ここで使用した品々の一般的な姿をある程度示しているという評価も成り立ってくる。したがって、本遺跡の遺物、特にその大半を占める土器類等の様相を探る作業とは、当該地の時間軸である古代土器編年の整備や、その時代における人々の生活をかいまみることへ繋がるという考えに至るのである。

本遺跡から出土した土器群とは、出土量そのものは決して多くないが、一定のまとまりを持つ資料としては、当該地域では数少ない事例である。以下、本遺跡の土器様相について、いくつかの検討を試み、今後の遺跡調査における比較資料のひとつとしたい。

2) 前掛り遺跡出土古代土器の編年的位置付け

古代土器の器種構成とその特徴 前掛り遺跡から出土した古代土器は、土師器を主体に須恵器が一定量を占め、わずかながら黒色土器を伴い、食膳具には木製品が組成するという構成であった（第4図）。土師器は、食膳具と煮炊具で構成されるが、食膳具は無台椀の1器種、煮炊具には長甕と小甕及び鍋の3器種がある。須恵器は、大きく食膳具と貯蔵具があり、食膳具には杯蓋・無台杯・有台杯の3器種、貯蔵具も無頸甕と長頸甕、そして大甕の3器種であった。また、黒色土器は、細片のため器種を特定できないが、おそらく無台椀と考えられ、木製品は盤の1器種であった。

土師器食膳具には、高台を有するものではなく、無台椀のみで構成されていたが、形態からすれば4タイ

ブに分類が可能であった。無台椀の主体は無台椀bであり、これに無台椀cが伴うことで大半を占めることとなり、無台椀a・dの数量は少なく、特に無台椀dについては普遍化できるかは明確でない。煮炊具については、小壺は口縁部形態からA・Bに区分したが、長甕と鍋については口縁部形態のバラエティーが余りにも豊富であり、小破片が多いことから細別に至っていない。

須恵器食膳具については、無台杯が大半を占め、有台杯が一定量伴うが、杯蓋は遺跡全体で3点と希な存在となっていた。無台杯の形態は、従来の杯形態を呈する無台杯Aと、「椀形傾向杯」とした無台杯Bに大別したが、両者の比率はほぼ同じか、無台杯Aが若干優勢となる。有台杯は、有台杯Aとした無台杯に高台が付くような身のやや浅いタイプはまったく確認できず、全て有台杯Bであった。有台杯Bについては、その法量から大(III)・中(II)・小(I)に細分したが、有台杯B Iは細片となった1個体のみであり、また有台杯B II・B IIIも数個体程度と少なかった。貯蔵具は、短頸壺と長頸瓶がそれぞれ1個体、大甕も2個体分が発見されただけで、出土個体数そのものは極めて少ない存在であった。

黒色土器は、内黒と称される無台椀が1個体、木製盤も1個体であり、両者とも極めて希な存在であったことをうかがわせる。

以上が、前掛り遺跡出土土器類等の概要である。当該土器群の特徴としては、須恵器では有台杯Aの存在が皆無もしくは極めて希であり、食膳具を構成する器種としてはすでにその立場を失っていることが明らかとなっていることである。また、有台杯Bについても、少ないながら一定量を保つB II・B IIIの存在は明確であるが、有台杯B Iの影は極めて薄く、またその形態はいまだ杯形態を維持していても、口縁の外傾を強くするなど椀形傾向を看取できる。また杯蓋については、有台杯の減少に伴い出土量が少なくなっていることが掲げられよう。無台杯については、須恵器食膳具の主流となって出土量や形態のバラエティーも豊富であるが、特に「椀形傾向杯」とした無台杯Bの安定した出土量は注目される。第V章でも述べたとおり、須恵器無台杯Bの法量分布は、須恵器無台杯Aと土師器無台椀のはば中間に位置している。このことは、無台杯という範型内における最大限の形態変化、つまり「椀形傾向杯」として生産された可能性を指摘しておきたい¹¹。

北陸・越後編年との対比 北陸地方における古代土器編年は、加賀地方の編年を基軸としてかなり研究が押し進められ【田嶋1988】、現在はその細部を深めたり、あるいは検討するといった作業が北陸古代土器研究会によって続けられている。そこで、前掛り遺跡出土土器群の編年的な位置付けについては、とりあえず北陸編年の中でその大枠を捉えてみたいと思う。ただし、北陸編年の基軸が南加賀にあるため、直接的な対比はできないことから、政治的な背景をある程度敏感に反映する須恵器生産、特に焼成された須恵器の器種構成から見ることとし、そのメルクマールとして、有台杯類にスポットを当てたい。

前掛り遺跡出土土器群の中で、有台杯の主体は身が深くなる有台杯Bであって、有台杯Aの存在は確認できず、近似形態をなす有台杯B Iも口縁の外傾を強くするタイプであった。南加賀地方において、有台杯類に大きな動きが見られるのは、北陸編年の第IV期から第VI期にかけての時期である。そこで最初に、南加賀における有台杯の動向を追ってみたい。まず、前掛り遺跡分類の有台杯Aは、第IV期とされる箱宮5号窯では確認できるが、つぎの第IV₂(古)期の二ツ梨10-B号窯に至ると、すでに前掛り遺跡分類の有台杯B Iに近似したものとなり、この傾向は第V₁期である戸津5号窯まで引き継がれる【石考研究ほか1988】。代わって身が浅い有台杯類の主体は、盤形態に近いものだけとなるが、しかし第V₂期とされる戸津29号窯ではこの類もほとんど生産されなくなり、有台杯は前掛り遺跡分類のB形態だけとなっている【石考研究ほか前掲】。このような南加賀における動向を、直接的に前掛り遺跡出土土器群と対比させるこ

とは、越後に存在しない器種が絡むことから難しい。しかし、有台杯類に限定すれば、有台杯Aがなくなつて有台杯Bが主体をなすことから、前掛り遺跡出土土器群の上限は第V₂（古）期から第V₂期の範囲とすることができる。

ところで、前掛り遺跡における須恵器食膳具の主体は、無台杯である。さきほどの南加賀における須恵器生産では、第V₁期とした戸津5号窯までは有台杯類が多く生産されており、無台杯類の存在が顕著となるのは、第V₂期とした戸津29号窯からである。また、この戸津29号窯では、有台杯Bの生産も多いことからすれば、前掛り遺跡の須恵器食膳具類の状況に近いことが判る。したがって、前掛り遺跡における須恵器食膳具の時期的な上限とは、第V₂期に求められるのではないだろうか。さらに、前掛り遺跡において須恵器食膳具の主体となった無台杯には、B形態とした「椀形傾向杯」が多いことが特徴的であった。南加賀においてこの傾向が看取されるのは第VI₁期とされる戸津31号窯の資料である。ただし、当該資料中には、前掛り遺跡では出土を確認できない定型化した有台皿があり、第VI₁期とされる戸津11号窯の杯蓋はすでに宝珠を失うものであることからすれば、前掛り遺跡出土土器群の下限は、第VI₁期以前と考えられる。南加賀地方と越後では地域的な隔たりが大きいが、前掛り遺跡出土土器群の時期的な併行関係を、とりあえず北陸編年の第V₂期から第VI₁期の幅の中で捉えることとしたい。

さて、越後における古代土器編年は、1984年の今池編年〔坂井1984〕の発表以来飛躍的に進展し、これまでにも多くの編年的な研究が進められ、目覚ましいものがある。また、最近では、和島村門新遺跡において、「延長6年」と記された漆紙文書とともに、大量の土器が出土し、絶対年代との対比も正確さを増すこととなった〔和島村教委1995〕。以下、越後における同時期とされる土器群との対比から、前掛り遺跡出土土器群の編年的な位置付けを検討してみたい。

第2表は、これまでの研究成果を集約し、北陸編年との対比とともに新たな知見を加えて提示された最新の土器編年である〔春日1996〕。この編年を見てただちに感じる点とは、前掛り遺跡出土土器群が位置すると想定される第V期から第VI期にかけての時期に、北陸編年と対比することが可能な一括資料が不足しており、越後国内においても単純な併行関係をたどることが難しい現状にあるということである。その状態は、越後において最も研究がなされている頸城郡内においてもあてはまる。さらに、第V期及び第VI期の基準資料とされた2つの資料とは、ともに溝内から出土している。溝資料には、一括的に廃棄されたものも多く、一時期を示す良好な資料には違ひがない。しかし、後述するように器種あるいは全体の組成比率等は、廃棄に至る行為と大きく関わっており、器種が選択された可能性が極めて大きく、その時期の一般的な土器様相を示すとは限らない。したがって、このような溝内出土に限定された資料を単純に前掛り遺跡出土土器群と対比することは、少なからず問題を含むことを承知しなければならない。これに対し、古志郡の基準資料として提示されている八幡林遺跡I地区の事例は、明確な遺構を伴っていなかったが、建物群に隣接する地点であった〔和島村教委1994〕。この事実からすれば、建物と関わりを持つ生活用品が廃棄されていた可能性があり、溝資料よりは日常性を具备していると考えられる。しかし、八幡林遺跡や今池遺跡は、ともに国衙・郡衙など役所関連の施設として出発し、その後さらに展開した遺跡である。このような歴史的な経緯を背景に持つ両遺跡と、その前段に何もなかった前掛り遺跡とでは、かなり異なる相違点を認めざるを得ないであろう。もう一つ、越後における古代土器編年の課題には、生産地、特に須恵器窯出土土器による編年の確立が、資料的な制約が大きくて、実現できないという実情がある。このような多くの課題を持つ越後の古代土器編年にあって、前掛り遺跡出土土器群を対比させることは難しうが、現時点における理解としてまとめてみたい。

地城	南 加 賀	頬 城 郡	三 嶋 郡	古 志 郡	佐 渡 国
時期	須 恵 器 室	消 費 道 跡 須 恵 器 室	消 費 道 跡	消 費 道 跡 須 恵 器 室	消 費 道 跡 須 恵 器 室
800 -	V ₂ 期	二ツ梨10-B窯	今池S K-102 +	+ 岩野原	+ +
	V ₁ 期	戸津5号窯テラス	今池S D-201 (大賀)	+ 八幡林I下層	+ 下口沢 大木戸
850 -	V ₂ 期	戸津29号窯	+ (龍寺)	前掛り遺跡 羽黒 (浜田)	大木戸 カメ畠1-3号
	V ₁ 期	戸津31号窯	今 窯	八幡林I上層	+ +
900 -	V ₂ 期	戸津11・54号窯	今池S D-3 -	八幡林C	+ 江ノ下
	V ₁ 期	戸津35号窯	一之口西S E-183	道 下	高 野 +
V ₀ 期	戸津48号窯	一之口西S E-153			

[春日1996・石考研究は1988を合成して一部改変・加筆]

第2表 前掛り遺跡出土古代土器の編年的位置付け (試案)

まず、頬城郡における資料との対比を試みると、今池S D-201溝から出土した一括土器群は、土師器無台碗が少なく、有台杯Aの比率が高いことから、少なくとも前掛り遺跡出土土器群より古い様相を持っている。また、SD-3溝資料をみると、土師器無台碗がかなり多く伴い、須恵器食膳具の主体も無台杯となる。ただし、有台杯類の出土も少くないが、概して破片資料が多くなっており、混入した個体が多いことが想定できる。両資料を対比した場合、互いの土器様相にはかなりのギャップが存在することから、その間に空白となる時期が設定されることは理解できる。これら2資料と前掛り遺跡の土器群を対比した場合、土師器無台碗の出土量からすればSD-3溝資料に近い状況を見ることができる。ただし、須恵器無台杯におけるB形態は、両資料に糸切り底の無台杯が多いこともあって、その状況からすれば双方と関わりを持つ時期が想定されてくる。

八幡林遺跡は、古志郡の郡衙関連の遺跡である可能性が高いが、古代三島郡が古志郡から分離独立した経緯からすれば、頬城郡よりは歴史的に近い関係にある。I地区下層(III層)出土土器群の様相を見ると、須恵器食膳具が多く、土師器のそれは極めて少なく、土師器煮炊具にはロクロ成形のものが少ない特徴がある。また、須恵器食膳具には、無台杯とともに有台杯Aが高い比率で安定している。これに対し、I地区上層(II層)出土土器群は、下層とは整地層を挟んで明確に分離された資料である。土器群の構成を見ると、須恵器食膳具は無台杯によってその大半が占められ、有台杯類では有台杯Bがわずかに認められる程度であり、土師器食膳具の出土量も多くなっている。また、須恵器食膳具の多くが佐渡小泊窯系と見受けられることも、大きな特徴といえよう。これら両資料を対比してみると、土器様相にかなりの差異が認められることから、両者の中間的な状況を示す時期が想定できるのではないだろうか。また、これらと前掛り遺跡出土土器群とを対比した場合、下層出土土器群は明らかに古く、また上層土器群における小泊窯系須恵器食膳具の形態は、前掛り遺跡のそれより新しいものである。したがって、前掛り遺跡出土

土器群の周期的な併行関係は、八幡林遺跡Ⅰ地区の下層と上層の間の一時期に比定できそうである³⁾。

以上の検討をまとめれば、前掛り遺跡出土土器群の編年的位置付けは、やはり北陸編年の第V₂期から第VI₁期の幅の中で理解することができる。この時期とは現在提示されている絶対年代からすれば、西暦850年を前後する9世紀中葉にひとまず比定することができる。ただし、前述のごとく、前掛り遺跡出土土器群が比定された時期とは、対比できる資料が充分とは言えない状況にある。その意味では言えば、当該資料の持つ意味の大きさがあるが、しかし、対比できる資料が少ないと危惧もある。今後の課題とは、新たな資料の抽出とともに、前掛り遺跡出土土器群の再検討の必要性であり、あらためて検討を深めていくこととしたい。

3) 在地における土器生産の変貌

須恵器と土師器 土師器とは、縄文土器や弥生土器を祖先とする日本列島における伝統的な土器である。これに対する須恵器は、古墳時代に大陸あるいは半島から移植された異系統の土器生産であり、技術体系そのものが土師器とは異なっている。また、須恵器生産は、国郡の関わる公営事業として、生産体制も組織化され、専属の工人が生産に従事しており、政治的な思惑によって左右されたり、あるいはさまざまな規制によって形式化される。しかし、土師器は、在地において生産されるものであり、専従工人の存在は想定されていない。つまり土師器の生産には、大きな制約や規制がありなく、当時の生活に密着しており、いろいろなニーズに素早く対応できる自由さを、ある意味では持っていたと考えられる。このような両者の生産体制等の差異は、作られる土器の器種や形態だけではなく、土器の素材となる粘土や製作技法等の全般にわたる大きな相違となって顕在化する。

しかし、須恵器と土師器は、互いに機能分担がなされているように、個々に独立して存続できるような性質のものではない。また、須恵器工人の日常は明らかにされていないが、たとえ工人集落が形成されていたとしても、時とともに別集落との交流は生じるであろう。さらに、律令体制の緩みが顕著となれば、須恵器専業だけでは不安定な状況となることが予想でき、須恵器生産に伴う技術の流出、あるいは日常生活における器種や器形等の利便性は、当然生産過程の中に徐々に組み込まれていくことになる。以上の中には想定部分も多いが、9世紀以降において、須恵器と土師器には互いに共通した特徴が見られるようになることは事実である。

前掛り遺跡の土器群を見ると、その全体の比率は確かに土師器8に対し、須恵器は2の割合である。しかし、土師器の大半とは、須恵器では作られない壊れやすい煮炊具であり、食膳具に限定すれば日常的な実態はある程度反映していると考えられるS X-53では、むしろ須恵器が卓越する。つまり、須恵器の使用そのものが衰えると言うより、土師器を使用する機会が多くなった状況と考えられ、前掛り遺跡の出土土器群とは、まさに大きく変化するその最中の様相を示している可能性が高いのである。そこで、本項ではそれぞれの土器の胎土を分類し、両者の関係を見極めることにより、在地における土器生産の変貌について、検討を試みることとしたい。

胎土の分類と底部切り離し技法 在地における土器生産を課題とした場合、在地を前提とした土師器ではなく、須恵器生産の動向を探る必要がある。しかし、柏崎平野の須恵器窯については、調査事例が極めて乏しいだけではなく、その所在すら充分に把握されていない。このような実態の中で、在地における動向は、佐渡小泊窯系須恵器の存在が、重要な決め手となってくる。そこで、須恵器の胎土についておおまかな分類を試み、小泊窯系の製品が含まれる度合いなどを見極めることから始めたい。

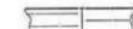
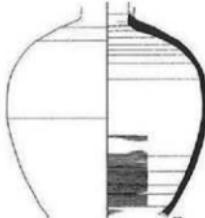
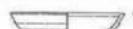
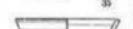
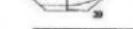
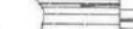
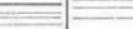
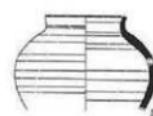
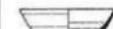
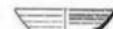
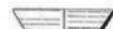
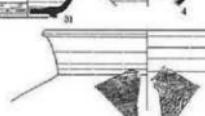
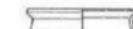
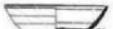
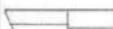
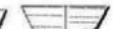
前掛り遺跡から出土した須恵器の胎土は、粘土中に含まれる砂粒等によって大きく4大別が可能であった。胎土A類とは、砂粒を概して多く含み、粒径は1mm以下を主体とするが、粒径が2mm前後からそれ以上の大きなものが目立ち、砂粒も雑多で種類が多い。74のように海綿骨針が認められるものを含む。また、特に砂粒の粒径が大きく量も多いA1類(74)と、砂粒の量が若干少ないA2類(30・50・66・72)の2種に細分できる。本類に分類される器種には、有台杯BII(66)・無台杯(30・72・74)・長頸瓶(50)がある。

胎土B類に含まれる砂粒は、黒色粒と白色粒の微細粒を主体に比較的多く含まれ、粒径が1mm前後からそれ以下でやや柔らかな暗黒灰色粒や2~3mmの白濁色粒が目立ち、砂粒の種類が概して多い。一部に海綿骨針を微量含むものがある。砂粒の量がやや多いB1類(59・70)と若干少ないB2類(2・4・29・31・44~49・53~55・67・75)に細別できる。器種としては、有台杯BII(31)・無台杯(2・4・29・53・54・55・67・75)・杯蓋(70)・大甕(44~49)・短頸壺(59)がある。

胎土C類に含まれる砂粒は、黒色の微細粒を主体とするが、粒径が1~3mmあるいはそれ以上の大さとなる白濁色粒と暗黒灰色粒が目立ち、特にやや軟質の暗黒灰色粒が特徴的で、砂粒の種類がやや多く、胎土B類に近似する。素地となる粘土そのものの粘性が強いためか、器面には粒状の小さな膨らみが多く見受けられる。本類に属する器種は無台杯(3・27・51・52・73・76)のみである。なお、本類とは、底面の切り離しが糸切りによってなされた一群を一括したものである。ただし、胎土そのものにもある程度の共通性は見られるが、全て同じ胎土とは言い難いことも事実である。本類については、胎土とは別に底部の形態、特に底部からの立上り方から細別すれば、以下のようない・ii・iiiの3類に区分でき、胎土についても同様な細分が可能である。まずi類とは、糸切り部分が底径より一回り小さく立上りが緩やかで不明瞭なもの(51・52・76)であり、ii類は糸切り部分の境界が明瞭な段をなすもの(27・73)となる。このii類も、糸切りに使用された糸が細いもの(27)と太いもの(73)があり、さらに細分される可能性が高い。iii類は、糸切り部分がわずかなため明確ではないが、糸切り部分の境界から立上りが始まるもの(3)である。ii類とiii類については、それぞれの個体により底部形態が異なり、胎土には近似する点も多いが若干の相違が認められることから、時期差・窯差・工人差などを考慮する必要がある。しかし、出土量が少ないと今後はこれらを留保し、i類をC類の本体として考えることしたい。

胎土D類は、概して良く精選された粘土が用いられ、砂粒として0.5mm未満の微細粒を多く含み、粒径が1mmを超えるものは希である。砂粒には白色粒と黒色粒があり、比率的には同じ程度で、海綿骨針が微量含まれるものがある。焼成の良好なもの(6・7・28・78)と不良なもの(69・71・77)がある。本類に属する器種は、有台杯BI(6)・有台杯BII(7・78)・無台杯(1・5・28・69・71・77)・大甕(14~16・26・62~65・85~87)がある。本類が小泊窯系須恵器の胎土となる。

以上、4分類した須恵器の胎土は、B類でも砂粒の含有が比較的少ないB2類と、C類およびD類は、焼成の具合によっては識別が難しいものがある。しかし、C類とした須恵器の器面には、独特の小さな膨らみがあり、底部の切り離し技法も糸切りであることなどから、小泊窯系須恵器ではないことが明かである。また、胎土B2類の場合、小泊窯系には含まれない白濁色粒が特徴的であること、調整や形態等の特徴も小泊窯系とは異質である。その結果、胎土D類以外を小泊窯系から除外することになるが、その場合、須恵器全体に占める小泊窯系の製品がかなり少ないと判明する。つまり、前掛り遺跡から出土した須恵器には、確かに小泊窯系の製品が含まれるが、しかし出土量が少なく、須恵器の主体は少なくとも越後国内であり、在地産が多く含まれていることになる。

須恵器		胎土		土師器	
	 74	A1 類	 38  39  80		
 50	 72  30  66	A2 類	 32  36  37  34  35  33  39  41  11  12  13  41		
 39	 76	B1 類	 68  9  32  40  12		
 2  33  29  31  4  67  44		B2 類	 33  40  78		
須恵器系切目	 52  6  27  51  32	C 類			
須恵器小口底系	 28  4  1  38  7  69	D 類			

第7図 前掛り遺跡古代土器胎土分類図

そこで、土師器における胎土を、須恵器の胎土に即して分類した結果が、第7図である。土師器の胎土の特徴とは、含まれる砂粒が概して多く、また雑多な種類の砂粒が含まれていることである。このため、胎土の分類からすれば、その大半がA類に属することになる。また、須恵器の胎土中にはあまり雑多な砂粒が含まれないことから、図中における須恵器の分布はB2類からC・D類に集中しており、須恵器と土師器の胎土が大まかには区分されていることがうかがわれる。しかし、ここで問題なのは、土師器にも須恵器的な胎土のものが存在し（B類）、さらに須恵器の中にも雑多な砂粒が多く含まれる胎土A1類が存在することである。つまり、この図が示している事実とは、土師器と須恵器の一部が互いに共通した胎土を持っているという点である。在地で生産されている土師器と、それと共に共通した胎土を持つ須恵器の存在は、前掛り遺跡が営まれた時代、本遺跡の周辺で須恵器の生産がなされていたことの証といえる。また、反対に土師器に須恵器的な胎土が存在するということは、須恵器の作り手が土師器の生産にも携わっている可能性を示唆する。須恵器と土師器の胎土に表れた現象とは、前掛り遺跡が営まれていた時代、9世紀中葉以前に、すでにこのような状態が生じており、土師器と須恵器の作り手が、互いに融合しあうような状況となっていたことをうかがわせるのである。

また、佐渡小泊窯系の須恵器とは、在地における土器の生産体制に大きな変化が生じた不安定な時期に、しかも在地において須恵器の生産が続けられている段階からすでに流入していたことを意味する。少量ながら、しかし安定した流通を維持する小泊窯系須恵器の存在は、在地において須恵器生産に関わる工人たちに与えた影響は大きかったのではないだろうか。今回の資料からは、その後の展開まで検討できないが、やがて在地での須恵器生産は終息し、小泊窯系須恵器が席巻するのである³⁾。

4) 遺構の性格と器種構成比率

前掛り遺跡から検出された遺構には、掘立柱建物や柵列があり、立地等を含め一般的な解釈をすれば、水田等を経済的な基盤とした集落が想定される。出土した遺物を見ても、特別意識する品物がないことからすれば、9世紀中葉におけるありふれた「ムラ」と考えられる。したがって、本遺跡は、当時の人々にとっては日常の居住地であり、出土した遺物も、極めて日常的と考えられることから、これらを検討すれば、当時の日常生活の一端に触れることができることになる。ただし、今回の調査範囲は極めて狭く、また出土遺物の量も決して多くない⁴⁾。ここでは、遺構内からある程度まとまって出土した遺物、特に土器類における器種構成や比率からその一端を探ることとしたい。

対象遺構と個体数の把握 前掛り遺跡から出土した遺物は、土器類を主体におよそ5箱ほどである。器種構成やその比率を算定するための資料として、今回は遺構等で把握できた遺物を中心とし、包含層等出土としたものは除外した。対象とした遺構は、SD-70溝とSD-01溝の2つの溝遺構およびSX-53とした性格不明の浅い落ち込みから出土した資料で、全出土量に占める割合はおよそ70%ほどである。土器類等の種別としては、土師器・須恵器・黒色土器および木製品である。

個体数把握の方法としては、いくつの個体識別法が提示されているが、今回は資料の絶対数がそれほど多くないことから、全ての破片を対象とし、胎土や調整などから同一個体の判定をし、個体数をカウントすることを原則とした。ただし、長甕など土師器類に多い摩滅した小破片については一部按分したが、全体からすれば、誤差の許容範囲内と考えている。遺跡全体として確認されている器種は、土師器が無台碗・長甕・小甕・鍋の4器種、黒色土器が無台碗の1器種、須恵器は無台杯・有台杯A・有台杯B・杯蓋・長頸瓶・短頸甕・大甕の7器種、そして木製品の盤1器種である。なお、SD-01溝から製塙土器2個体が

出土しているが、普遍的な存在ではないため検討対象から除外した。

土器類等の種別構成と比率 検討対象とした3遺構について、種別による構成比率を見ると(第8図)、3遺構とも土師器がおよそ80%、須恵器が20%ほどを占める。黒色土器は、遺構内から出土せず、今回の対象からは除かれるが、木製盤と同じく遺跡全体でも1個体であり、全体に占める比率が極めて小さなことは確かである。結果として得られた土器類等の種別構成とは、土師器と須恵器による8:2という割合であり、土師器がかなり優位となる比率となった。しかし、各遺構及び3遺構全体の割合は、すべてほぼ同じ比率であり、土師器と須恵器の割合はかなり安定していることがうかがえる。

用途別に見たそれぞれの構成比率は、各遺構によって差異が認められる。須恵器は、SD-70溝において食膳具の比率が13.6%と少ないが、SD-01溝やSX-53についてはおむね17%であり、それほど大きな差異とはなっておらず、比較的安定していることが判る。しかし、土師器については、食膳具と煮炊具の比率がそれぞれの遺構で大きく異なっている。特にSD-70溝における食膳具の比率が38.6%を占めていることに対し、SX-53では10.3%しかなく、煮炊具の割合が極めて高い。このような差異が生じた要因については、数少ないデーターによるためにわから判断できない。しかし、SX-53における煮炊具の高率は、煮込みなどの日常的な側面が大きく、SD-70溝において食膳具、特に土師器碗が4倍近くも多い事実には、特別な意味合いを考慮せざるを得ない。

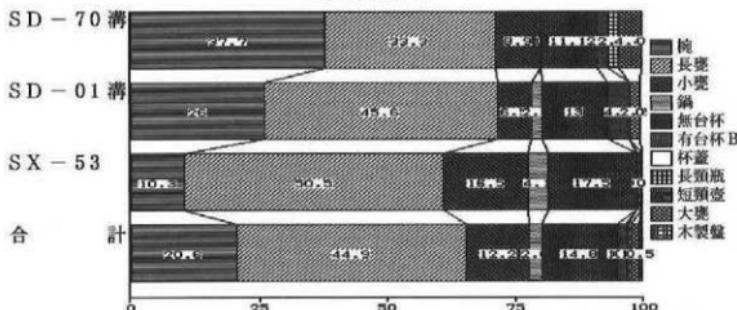
食膳具における構成比率 前掛り遺跡全体における食膳具は、土師器と須恵器、黒色土器そして木製品で構成される。器種構成の特徴としては、木製の盤が少ないので伴うこと、有台杯Aが全体でも1点のみであり、食膳具の器種としてはほとんど組成しないこと、杯蓋も遺跡全体で3点しか確認されていないなど、器種における絶対量の多寡が明瞭であることが掲げられる。しかし、木製品は、唯一1点の出土であり、全体に占める割合は小さい¹⁰。黒色土器は対象とした遺構内から出土していないため、今回示したグラフに表現されず、食膳具のはとんどが土師器と須恵器によって構成されることになる。ただし、土師器の器種は無台碗のみであり、また須恵器における有台杯Bは絶対量が少なく、杯蓋も遺構内からは出土していないため、大半が無台杯で占められることになる。このように見てくると、本遺跡における食膳具の

種別 遺構名	土師器					黒色土器					須恵器					本器	合計
	無台碗	長甕	堀	小甕	鍋	無台碗	無台杯	有台杯B	杯	蓋	長頸瓶	短頸壺	大甕	堀	盤		
SD-70溝	17	15	4				5	1			1			1			44
SD-01溝	12	21	3	1			6	2						1	1		47
SX-53	10	49	16	4			17						1				97
合計	39	85	23	5			28	3			1	1	2	1			188

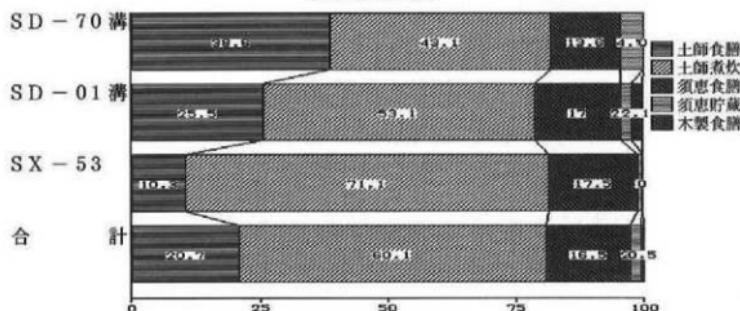
食膳具

第3表 前掛り遺跡主要遺構の土器組成表

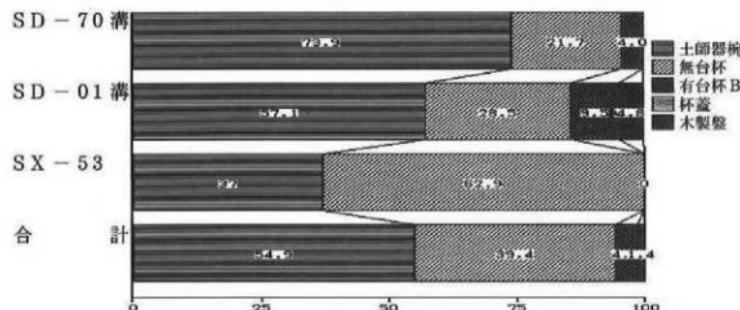
＜器種別組成＞



＜用途別組成＞



＜食膳具の組成＞



第8図 前掛り遺跡の土器類等の器種組成図

主要器種とは、土師器椀と須恵器無台杯で構成されていたということになる。

また、黒色土器、特に内黒と呼ばれる碗についても、遺跡全体で小破片が1点と極めて少ない。しかし、本遺跡とほぼ同時期とされる今池遺跡SD-3溝〔新潟県教委1984〕や八幡林I地区上層〔田中1995〕では、一定量の黒色土器を伴っており、本遺跡が示すデーターとの大きな相違点として認めざるを得ない。この差異には、時期差等も考慮する必要はあるが、現在対比可能な両遺跡がともに官衙的な施設として成立し、その後展開するという歴史的な背景があることに対し、本遺跡にはそれなく、水田等の開発に伴って成立した集落の可能性が高いこともその事由と考えられる。したがって、本遺跡例が示す種別における有無あるいは器種による構成比率は、集落の成立要因や、その区域の歴史的な経緯によって差異が生じた可能性も考えられるのではないかだろうか。

対象とした3遺構において、特に比率の差異が大きい器種は、土師器椀と須恵器無台杯の量比であり、この量比は土師器と須恵器の比率をほぼ直接的に示すこととなる。3遺構それぞれを見ると、SD-70溝における土師器椀の比率は、実に74%近くに達し、SD-01溝も過半数を超えた57%ほどとなる。このSD-01溝は、3遺構合計比率とほぼ同じであることから、本遺跡の平均的な構成と言えるかも知れない。しかし、SX-53の場合、土師器椀が37%しかなく、その比率がまったく逆転し、2/3近くを須恵器無台杯が占めていた。

土器組成の日常と非常日 ところで、食膳具に占める土師器・黒色土器・須恵器・施釉陶器といった構成比率は、時期的な推移によっても変遷し、場合によってはその時期の土器様相を示す。越後における9世紀中葉頃から10世紀における食膳具の構成比率は、黒色土器や施釉陶器等が介在しつつも、全体では土師器の占める割合が増加し、次第に須恵器が潤落し、やがて消滅していくという流れとなっている〔春日1991〕。このように変遷する食膳具の構成からすれば、3遺構の前後関係とは、SX-53からSD-01溝を経て、SD-70溝への流れとして想定することが可能となる。しかし、果たしてそうであろうか。

前述したように、前掛り遺跡全体における土師器と須恵器の構成比率は、3遺構とも8:2という割合で安定していたことをすでに確認している。つまり、この事実は、これら各遺構出土土器類等の全体からすれば、それはほど時間的な差異がないことを示唆する。ところが、食膳具に限定すると、時期的な変遷を思わせる量比の差異となって表れてくるのである。

ここで問題とされるのは、資料を抽出した溝2条と性格不明な落ち込み遺構それぞれの性格である。2条の溝とは、SD-01溝のように集落内の区画あるいは排水などと関わりそうな中規模程度の溝と、幅が8mにも達し、溝というより川に近いSD-70である。このような水が流れる溝や川には、不用物のほか意図的に土器等を廃棄する行為が有り得る。これに対するSX-53は、穴のような落ち込みというより、地面の浅い窪みに近く、包含層に伴う遺物、つまり無意識に廃棄され、散乱したままの遺物という性格が強く、原位置を保っているという保証はあまりない。しかし、溝2条の構成比率には、意図的に捨てられることによる器種や種別の選択的な片寄りのあったことなどを否定できない。これに対し、SX-53の資料に意図的な部分が少ないとすれば、当時の器種構成や組成比率、あるいはその損耗率や使用頻度をある程度反映していると理解できるのであり、一定の範囲におけるランダムサンプリングと認識すれば、少なくとも溝資料よりはその可能性が高い。このように見てみると、本遺跡における食膳具の普遍的な器種組成、つまり日常的な比率とは、SX-53の数値を前提に考えなければならないことになる。その場合における食膳具の比率とは、土師器約40%、須恵器約55%、その他がおよそ5%前後となるが、この数値が前掛り遺跡における当時の実態に近いものと判断したい。

以上の検討から、S X-53で得られたデーターを言わば日常的な数値とすれば、SD-70溝における土師器碗の比率は、やはり70%を超えてるという点から特別な意味合いを考慮する必要が生じる。それはSD-70溝全体の比率において、長甕や小甕など煮炊具の比率が小さいことからもうかがわれる。この場合、土師器碗が多く用いられる何らかの行事もしくは祭祀などが想定され、その使用後に溝や川などに一括的に廃棄されるという行為があったものと理解したい。また、同じ溝であるSD-01の場合、土師器無台碗の占める割合がSD-70より低く、3遺構全体の平均値に近い。このことは、川というニュアンスが強いSD-70と、集落内における区画溝あるいは排水路などの可能性が高いSD-01溝という、溝そのものに性格の差異を認めざるを得ない。その差異とは、溝に伴う浄化作用等の認識、あるいはその観念に大きな違いがあったことを意味しており、溝資料の特別な側面を認識しておく必要がある。そして、SD-70溝から得られたデーターとは、土師器無台碗が、特別に選択され、意図的に廃棄されるという特別な意味合いを持つ器であったことを示す一つの事例となるのである。

5) おわりに

以上、前掛り遺跡から今回出土した土器群について、編年的な位置付けど、土器の胎土、そして器種構成や組成比率という観点から、若干の検討を試みた。その結果、時期的には北陸編年における第V₂期から第VI₁期に至る間の一時期に併行させ、おむね9世紀中葉頃という実年代を当てることとした。また、須恵器と土師器に含まれた砂粒による胎土分類によれば、須恵器と土師器の胎土にはそれぞれの使い分けが認められたが、しかし須恵器的な胎土の土師器と、土師器の胎土のような須恵器の存在も確認することができた。そして、佐渡小泊窯系の須恵器は、それほど多く流通しておらず、在地の窯で生産されたと考えられる須恵器が主体を占めていた。

このような前掛り遺跡の土器群から確認された事実は、9世紀中葉における柏崎平野における当時の情勢を示しているとすることができる。しかし、この時期において、本地域全てが同じような土器様相を持ち、そして在地では須恵器生産が広く行われ、そしてその製品が多く流通していたと考えてしまうことは、早計かも知れない。

前掛り遺跡は、柏崎平野にあっては西南部に所在するが、9世紀中葉では三嶋郡三嶋郷に属していたと考えられる。その範囲は、中世の鶴河荘域を参考にすれば、鶴川中流域からその右岸の丘陵域、そして鶴石川下流の左岸域までの広がりが想定されている⁶。そして、三嶋郷の郷名がそのまま郡の名称となっていることから、郡衙相当施設も三嶋郷内にあった可能性が極めて高い。特に、かねてより郡衙が想定されていた箕輪遺跡は最近の調査によりその可能性をさらに高めている。また、三嶋郷域と想定されている区域における古代遺跡の特徴としては、一部に須恵器窯も発見されているが、鉄生産に関わる遺跡が広範囲に分布していることが最近の調査から指摘されており【品田1993・柏崎市教委1995】、手工業生産がかなり盛んな地域であった。このような地域の一画に位置する前掛り遺跡が、それらとはまったく無縁の存在とは考えられない。したがって、佐渡小泊窯系の須恵器の出土量が在地産に比して著しく低いことの背景には、同じ古代三嶋郡内にあっても、土器や鉄の生産地という特別な環境を考慮する必要がある。詳細な検討は全て今後の課題であるが、柏崎平野北東部に所在したと考えられる多岐郷とは、すでに異なった土器様相であった可能性が高い⁷。古代における小地域の検討は、今後の大きな課題となりそうである。

また、前掛り遺跡の集落については、極めて一般的な集落と考えられる。しかし、SD-70溝出土土器群における土師器無台碗の出土比率の高さは、意図的な廃棄行為を意味し、なんらかの行事や祭祀が想定

される。それらの行為の内容や性格等はいっさい明かではないが、9世紀中葉段階においてこのような集落でも、祭祀的な行事が執り行われていることは、それらが政治的な側面を多く有するものというより、日常生活にかなり密接な行事の可能性を強くする。これらの具体的な検証、あるいはその中身は、当時の一般的な古代社会を探る上で重要なポイントのように思われる。今後の課題としたい。

註

- 1) 需要者側が複形態を併んでいた場合、後述するように無用な制約を受けない土師器はただちに複形態に移行できても、須恵器には製作者個人の自由がなく、從来から押し寄せられた杯形態を生産していた可能性が考えられるのではないかだろうか。その制約は、9世紀中葉頃には織み始め、そして中央等のお役所主導型から在地主導型へ営業形態が徐々に転換し、形態もニーズに答えたものが生産されるようになっていったのではないか。それはまず、有台杯人の減産として表れ、次第に有台杯Aの生産中止および杯頃の傾向として決着する。ただし、須恵器生産は組織的な生産体制を必要とするから、在地勢力単独の独自営業は困難となり、次第に衰退し、逆に他に生産の主力を持ちえない佐渡小泊窯系に集約されたのではないか。このような動きは、越後・佐渡に限定されない全国的な動向であることから、須恵器生産に特徴がない、手工業生産から行政的な支援を打ち切るような施策が発令されたり、あるいは強制力が著しく低下するなどの政治的な背景を想定する必要がある。
- 2) 八幡林遺跡におけるI地区出土土器群とは、整地層を間層として層位的に把握された土器群である。したがって、遺構内から一括りに出土した土器群と比べれば、時期的な幅や混入遺物が含まれる機会を多く持っていることになる。この点は、前掛り遺跡出土の土器群と共通し、対比するそれぞれの資料にある程度の時期的な幅が想定されるため、今回は土器群全体からみた相対的な新古関係で見るに適することとしたい。
- 3) 前掛り遺跡における土師器と須恵器の駆逐からすれば、須恵器工人が土師器生産と無関係とは言い切れない状況を示している。このことは、9世紀中葉以前において、須恵器工人が土師器と須恵器の両方の生産に携わっていた可能性も考慮する必要がある。そして、在地における須恵器生産に不安定さが増大した時に、佐渡小泊窯系の須恵器が流通し始めている。現段階において、なぜ在地窯が衰滅したのかということを具体的に証明できないが、小泊窯系須恵器の流入を契機として、生産する主体を須恵器から土師器へと転換し、在地における須恵器生産が終息して以降、土師器の生産に切り替えるとともに、工人としてではなく、一般集落の一員など別の道を歩んでいたような経緯があったのかも知れない。
- 4) 前掛り遺跡における今回の調査区は、遺構等が確認された部分に限ればおよそ300m²である。この程度の調査範囲では、遺跡の性格を全て見極めることは到底無理であり、遺跡全体からみた当該調査区の位置付けも定まらないことは確かである。しかし、今回の調査で検出された建物跡の柱穴を見ても、それほど規模が大きくなく、本文でも述べているとおり出土した遺物も、日常的な意味合いが強いことから、とりあえず一般的な集落像で捉えておきたい。
- 5) 白木地と考えられる木製壁について、その出土数がたとえ1点であっても、その意味するところは大きい。しかし、今回は大多数を占める土器類を主要な対象するため検討を留保した。今後の課題としておきたい。
- 6) ただし、倭名抄に記された三鷹郡内の3つの郷「三鷹」「高家」「多岐」の所在地、あるいはその郷域などについては、ある程度の想定は可能であるが、しかしまだ定説も確証もないのが実情である。しかし、かねてより三鷹郡衙が所在する可能性を指摘されていた箕輪遺跡が、最近の調査により政治的にかなり上位のランクに位置付けられる遺物群が出土し始めている。三鷹郷の郷名が郷の名称ともなっており、周辺に所在する道路の状況からしても、可能性は一段と高まっているとすることができる。
- 7) 多岐郷域の道路としては、吉井遺跡群や刈羽村枯木A遺跡などが調査されている。今回のような観点からは検討がなされていないため、不明な点が多い。しかし、吉井遺跡群から出土した古代土器の様相は、前掛り遺跡とは異なっているように思えてならない。今後の検討課題としておきたい。

3 調査のまとめ

本章では、平成8年度に調査された調査区域から発見された事実をもとに、遺跡・遺構および遺物について若干の検討を加えた。本節では、報告書の最後にあたって、調査の成果についてまず要約し、遺跡の消長と当該地点における土地利用等の時期区分を行い、調査のまとめとしたい。

1) 平成8年度調査の要約

前掛り遺跡は、新潟県の中央部、中越地方北部でもその西半を占める柏崎市に所在する。遺跡の立地は、柏崎平野の二大河川の一つである鶴川が形成した自然堤防上である。現在の海岸線からはおよそ4.5kmほどの距離にある。また、標高はおよそ6.7mで、周囲は高低差のほとんどない沖積地であり、海とは関わりを持たない稻作を経済的基盤とした集落と考えられる。遺構確認面の標高はおよそ6mである。古代における行政区画は、三島郡に属し、鶴川筋にあったと推定される三島郷域の集落と考えられる。

調査は、県営農免農道整備事業<高田地区>に伴い、平成8年10月に実施した。調査範囲は、幅約6.5m、延長約60m、調査の面積はおよそ400m²である。遺跡の範囲については、全域の確認調査に至っていないため明確とはなっていないが、地形が平坦であることから、周囲一帯にかなり広範囲に広がっているものと推定される。したがって、今回の調査区域とは、遺跡全体からすれば極めて狭小であり、集落構造まで見据えることは、かなりの困難を伴うことになる。今後の課題も多いが、当該地域の地理的な環境からすれば、建物群が面的・全般的に広がるのではなく、小規模単位が湿地や溝等を挟みつつ、展開していた可能性が考えられるのではないだろうか。

遺跡の時代は、以前実施した確認調査の結果を合わせると、平安時代と戦国時代および近世である。ただし、地点によって主体となる時期に差異があり、今回の調査範囲は主に平安時代が主体であるが、南西側の現南中学校グラウンドでは、戦国期の遺物も少なくなかった。

検出された遺構は、掘立柱建物跡や柵列といった構造物のほか、溝跡及び土坑・ピット及び断面から観察された水田跡などである。建物跡（S B-79）は、2間×2間を原則とした面積がおよそ13.5m²程度の小規模な建物で、やや方位を逸れる柵列（S A-80・81）がめぐる。これらの柱穴以外にも、ピットは存在するが、近代・現代の杭列と考えられるものや浅い凹み状のものが大半を占めていた。溝跡には、集落域の排水を兼ねた水路（S D-01）のほか、河川に近い大溝（S D-70）も検出された。この大溝内からは、腐植層におおわれた大量の流木が出土し、その一部には除去作業に伴うと考えられる刃形痕を留めるものがある。S D-70大溝は、建物跡などが建てられた居住区域の南側に横たわっていたが、この位置が鶴川の上流側であることから、洪水等により流された木々が、溝内に流れ込み堆積したと考えられる。

基本層序を示す調査区壁から観察された水田跡は、その層位からすれば建物跡など居住を示す遺構が廃絶した後に造成されていた。この水田には、層序からすれば数本の溝（S D-72a・72b・73）が同時期に存在していた可能性があり、水路とともに開発された可能性が高い。

平安時代の遺物としては、土師器・須恵器・黒色土器および製塙土器といった土器類のほか、木製の盤及び建物跡や柵列の柱穴から出土した木柱根がある。土器類は主にS D-01・70溝から出土したが、包含層あるいはそれに類する落ち込み（S X-53）からも多く出土した。これら出土土器群は、その様相からすれば年代的な幅があまり認められず、年代観としては、北陸編年の第V₂期から第VI₁期、おおむね9世

紀中葉と考えられる。

本遺跡の性格としては、建物跡や柵列が存在することから、いわゆる「集落」の概念で把握される。また、出土した土器類等は、食膳具・煮炊具・貯蔵具という当時における日常生活の必需品であり、器種構成やその比率も一般的な傾向を示している。したがって、木製盤が1点とはいえ出土した事実はあるが、普段の生活を営む日常的な居住地であったと判断したい。なお、須恵器の中には、墨書き土器が3点含まれていた。そのうち2点については、「丸」・「右」の可能性がある。このほかに、現に転用されたものや、器面の内外面が摩耗して平滑となった須恵器無台杯があり、その使用方法等の検討が今後必要であろう。

中世の遺物は、今回の調査区内では概して少なかった。主なものとしては、珠洲や越前の攝鉢がある。時期的には15~16世紀と考えられる。出土層位は、おおむね水田跡を覆う腐植層であった。

2) 遺跡の消長と時期区分

今回の調査で把握された本遺跡の時代は、平安時代を主体に室町・戦国時代の造構・遺物が発見されたが、層序としてはさらに後年に引き繼がれ、現代の水田に至る。この間、幾度かの災害に見舞われたらしく、平穏な歴史ではなく、また時代によって当該地における土地利用にも変化が生じている。ここでは、平安時代から現代まで、土地利用を観点にして時期区分したい。

第Ⅰ期は、おおむね平安時代に該当する。当該期前半は、集落を形成した時期で、年代的には9世紀中葉である。しかし、単なる居住地ではなく、おそらく周囲を開墾し、水田を開発しつつ展開していたと考えられる。今回の調査では、小規模な建物跡や柵列を検出したのみで、集落全体の構成は明確ではなく、また同時期の水田造構についても把握されていない。なお、9世紀中葉以前において、水田の開発がすでになされていた可能性があるが、遺跡・造構としては確認されていない。

第Ⅰ期後半は、集落が廃絶、もしくは当該地点が居住域としての適正を失い、他所へ撤収して無住となつた時期である。時期的には9世紀中葉以降である。その直接的契機は、SD-70大溝内から出土した大量の流木から想定される大規模な水害である。SD-70大溝は、居住区の南側に位置し、上流から洪水が押し寄せてても、居住域は基本的に防御される。しかし、大量の流木は、SD-70大溝の河川として機能を著しく損なう。このため、洪水以前の水量を崩し切れず、結局居住域まで浸水したことが予想できる。流木除去の痕跡は、一部の流木に残された刃形にもうかがわれるが、結局断念し、居住域の移転に至ったものと考えられる。そして、その跡地は改めて水田として開発されるが、その時期については特定できない。

第Ⅱ期は、厚い腐植層が形成された時期である。この段階に至り、SD-70大溝もほぼ埋没する。時期については明かではないが、腐植層中から戦国期の遺物が出土しており、おおむね鎌倉期から室町期に至る中世と考えられる。

第Ⅲ期は、戦国期以降である。湿地化した当該地一帯が、改めて水田に開発されたと考えられる。その後、近世に至るまで、度々の水害等を受けつつ、水田が営まれ、戦後の圃場整備により現在のような景観に至ったものである。

以上のことをまとめると、本遺跡における当該地点とは、9世紀中葉に居住域として集落を形成したことに始まる(第Ⅰ期前半)。しかし、まもなく水害の被害を受けて集落は廃絶し、水田として再開発がなされるが、それも長くは維持されなかつたらしく(第Ⅰ期後半)、その後長い間湿地のまま荒らされていいたと考えられる(第Ⅱ期)。現在の景観の基礎は、第Ⅲ期以降における水田開発と、それを維持してきた人々の努力の賜物であったとすることができよう

〈引用参考文献〉

- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988『シンボジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(報告編・資料編)』
- 柏崎市教育委員会 1985『吉井遺跡群』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4集)
- 柏崎市教育委員会 1987『帝国石油新長岡ライン埋蔵文化財発掘調査報告書(試掘認証調査報告・吉井水上1遺跡・戸戸遺跡)』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第8集)
- 柏崎市教育委員会 1989「前掛り遺跡-新潟県柏崎市新道・前掛り遺跡試掘調査報告書-〈暫定版〉」(柏崎市埋蔵文化財調査の概要第11)
- 柏崎市教育委員会 1990a『千古塚』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第11集)
- 柏崎市教育委員会 1990b『吉井遺跡群II』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13集)
- 柏崎市教育委員会 1994『横山東遺跡群現地説明会資料』
- 柏崎市教育委員会 1995a『柏崎市の遺跡IV-柏崎市内底層代IV期発掘調査報告書-』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第20集)
- 柏崎市教育委員会 1995b『鶴橋東遺跡群-写真でつづる発掘調査の概要-』(柏崎市埋蔵文化財調査図録第1集)
- 柏崎市教育委員会 1997『柏崎市の遺跡V-柏崎市内底層代IV期発掘調査報告書-』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第27集)
- 春日真実 1991『古代佐渡小泊窯における須恵器生産と流通』『新潟考古学談話会会報』第8号 新潟考古学談話会
- 春日真実 1995『古代集落の展開-越後を事例として-』『研究紀要』新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1996『越後・佐渡の様相』『北陸の9世紀代の土器様相』(第77回北陸古代土器研究会例会資料)北陸古代土器研究会
- 刈羽村教育委員会 1995『桔木A遺跡』(刈羽村埋蔵文化財調査報告書第2集)
- 鬼頭清明 1989『那・村・集落』『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集 国立歴史民俗博物館
- 坂井秀弥 1984『今池遺跡における奈良・平安時代の土器』『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告I』(今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡) (新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集) 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989『古代集落としての山三賀II遺跡』『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀II遺跡』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集) 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1996『遺跡が語る開発と村の歴史-古代・中世を中心として-』『月刊文化財』No.396 特集 遺跡が語る開発と村の歴史 文化庁文化財保護部
- 品田高志 1993『柏崎平野の古代鉄生産雑感-鶴橋東遺跡群の発見とその意義-』『新潟考古学談話会会報』第12号 新潟考古学談話会
- 品田高志 1994『古代三鶴郡と古代土器の様相-柏崎平野における古代史理解に向けて-』『柏崎市立博物館報』No.8 柏崎市立博物館
- 品田高志 1995『鶴川中流域における古代・中世の遺跡』『柏崎市の遺跡IV』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第20集) 柏崎市教育委員会
- 品田高志 1996『田塚山の中世仏堂と墳墓』『田塚山遺跡群』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第21集) 柏崎市教育委員会
- 高橋 学 1996『古代の地形環境と土地開発・土地利用』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集 特集『古代の土地開発』 帝京大学山梨文化財研究所
- 田嶋明人 1988『古代土器編年軸の設定-加賀地域にみる7世紀から11世紀中頃にかけての土器群の推移-』『シンボジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(報告編)』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 田中 潤 1995『平安時代の土器食器について』『門新遺跡』(和島村埋蔵文化財調査報告書第4集) 和島村教育委員会
- 田村愛之助 1954『鎌倉末期の年号のある納経銘』『高志路』第151号 新潟県民俗学会
- 中野豈任 1988a『忘れられた雲場-中世心性の史的試み-』平凡社叢書123
- 中野豈任 1988b『安楽寺經塚出土「紙本妙法蓮華経」の奥義』『越佐研究』第45巻 新潟県人文研究会
- 猪崎彰一・田中照久編 1994『越前編年表』『越前古陶とその再現-九右衛門窯の記録-』 出光美術館
- 新潟県教育委員会 1982『尾野内遺跡』『埋蔵文化財発掘調査報告書(尾野内遺跡・芦ヶ崎跡)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第30集)
- 新潟県教育委員会 1984『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告I』(今池遺跡・下新町遺跡・子安道路) (新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集)
- 新潟県教育委員会 1986『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書IV(一之口遺跡西地区)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集)
- 新潟県教育委員会 1988『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(西田・鶴巻田遺跡群)』(新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第27)
- 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団 1994『北陸自動車道上越市春日・木田地区発掘調査報告書IV(一之口遺跡東地区)』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集)
- 新潟県埋蔵文化財調査事業団 1998『箕輪遺跡現地説明会資料』
- 平川 南 1993『平成4年度新潟県八幡林遺跡木簡』『八幡林遺跡』(和島村埋蔵文化財調査報告書第2集) 和島村教育委員会
- 北陸古代土器研究会 1996『北陸の9世紀代の土器様相』(第77回北陸古代土器研究会例会資料)
- 望月精司・福島正美 1988『南加賀吉窯跡群の概要』『シンボジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(資料編)』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 吉岡康鶴 1994『中世須恵器の研究』 吉岡弘文館
- 吉田 孝・大隅清洋・佐々木恵介 1995『9-10世紀の日本-平安京』『岩波講座日本通史』第5巻古代4 岩波書店
- 米沢 康 1980『大宝2年の越中国四郡割をめぐって』『信濃』第32卷第6号 信濃史学会
- 和島村教育委員会 1993『八幡林遺跡』(和島村埋蔵文化財調査報告書第2集)
- 和島村教育委員会 1994『八幡林遺跡』(和島村埋蔵文化財調査報告書第3集)
- 和島村教育委員会 1995『門新遺跡』(和島村埋蔵文化財調査報告書第4集)

報告書抄録

ふりがな	まえかがり							
書名	前掛り							
副書名	新潟県柏崎市・前掛け遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	品田高志・伊藤啓雄							
編集機関	柏崎市教育委員会 社会教育課 遺跡調査室							
発行者	柏崎市教育委員会							
所在地	番 945 新潟県柏崎市中央町5-50 T E L. 0257-21-2364							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °			
前掛け遺跡	新潟県柏崎市 新道	15205	613	37度 19分 76秒	138度 34分 27秒	19961001～ 19961030	400	農道整備事業に 伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
前掛け遺跡	集落跡	古代	掘立柱建物 櫛・溝	土器・須恵器 木製盤・柱根				

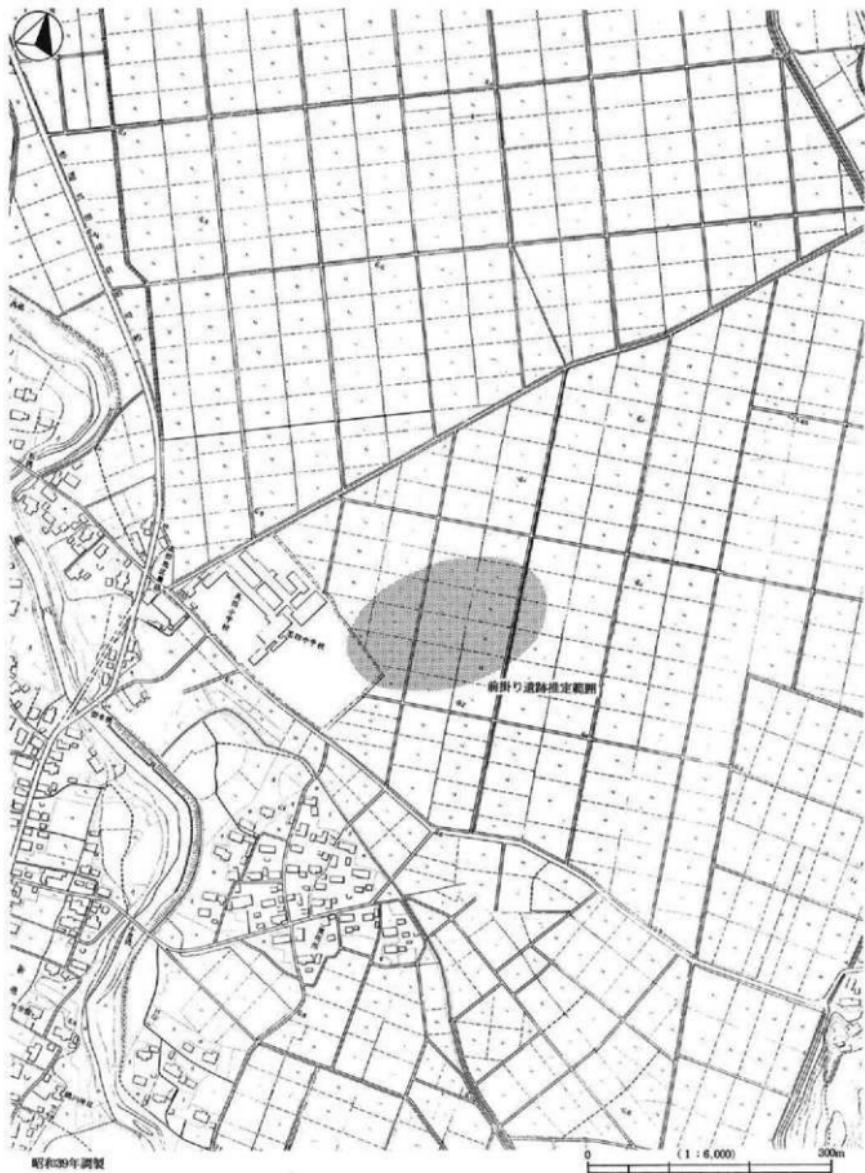
図 版

凡 例

1. ここには遺跡全体及び遺構・遺物に関わる実測図と写真をおさめた。図面図版と写真図版に区分されるが、図版番号は通し番号となっている。
2. 図面図版には、方位と縮尺を付した。方位はすべて真北である。
3. 写真図版に記した方位は、対象物に向かった方向を大まかに示したものである。



前掛り遺跡と周辺の地形

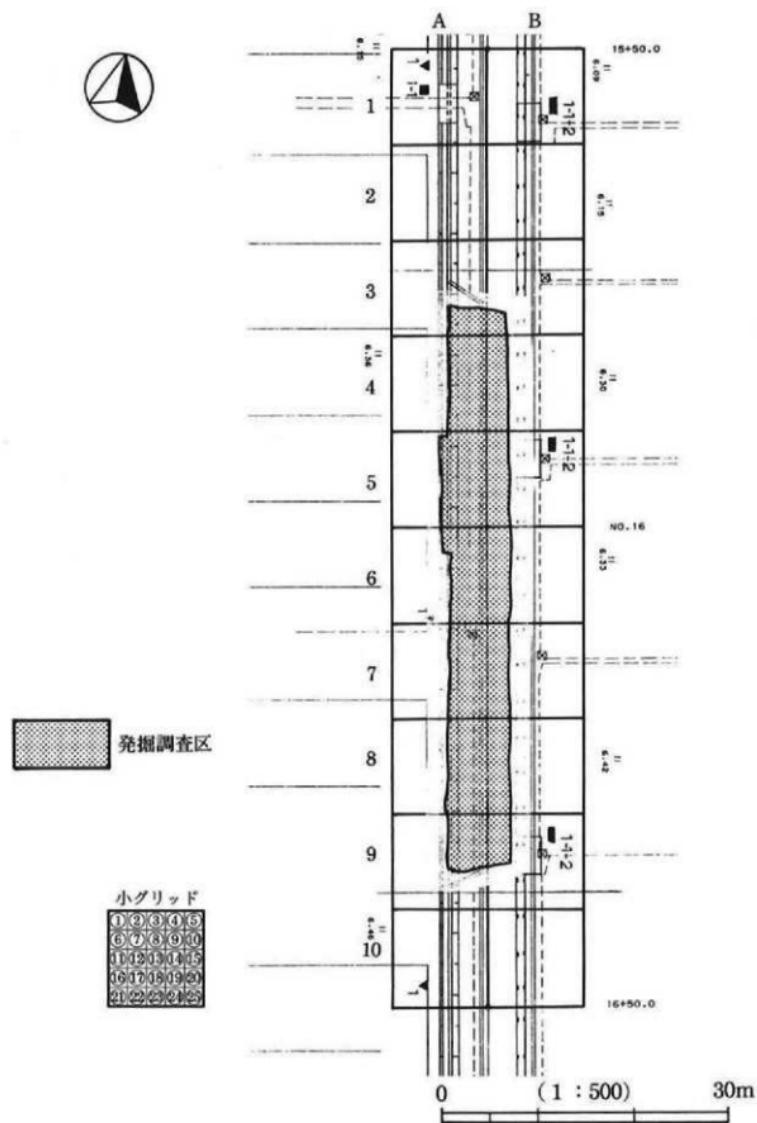


昭和39年調査

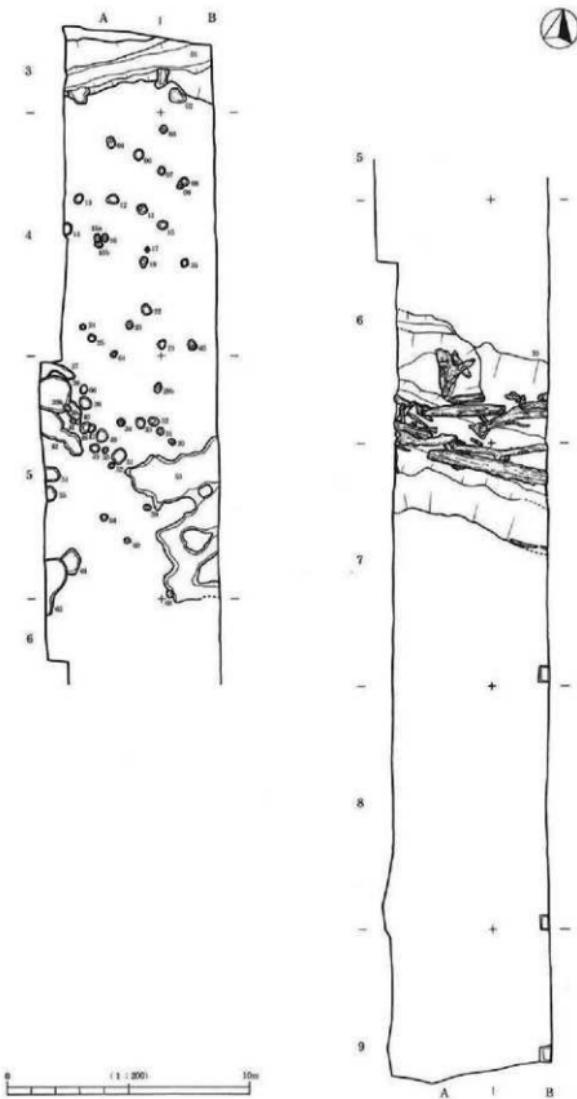
0 (1 : 6,000) 300m

図版2

前掛り遺跡発掘調査区とグリッドの配置

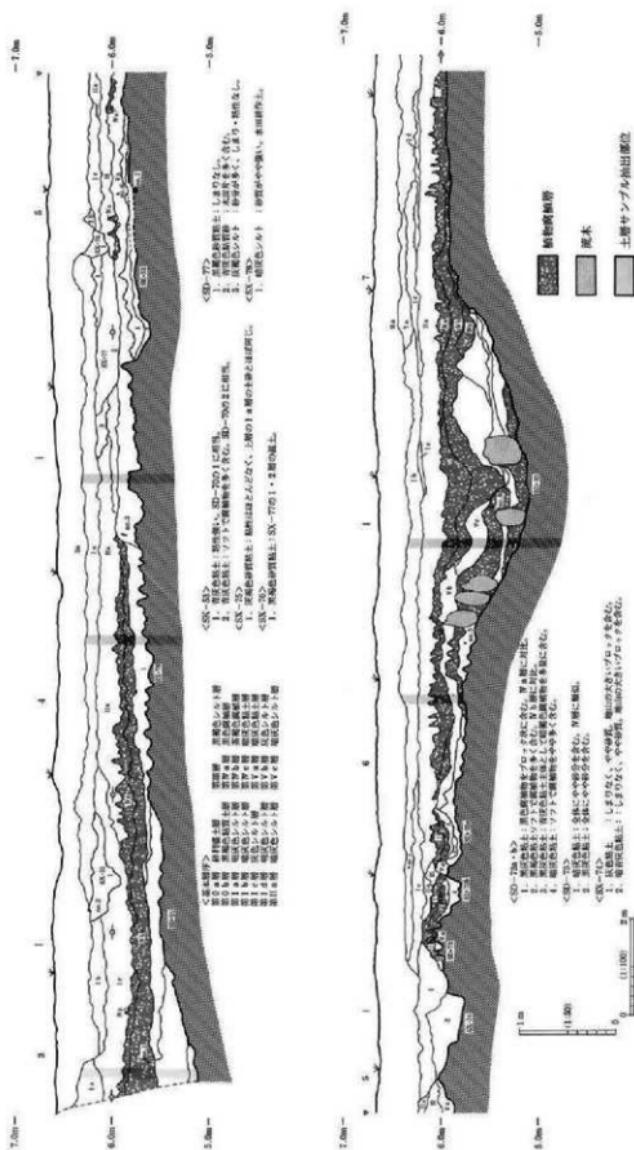


前掛り遺跡造構全体図

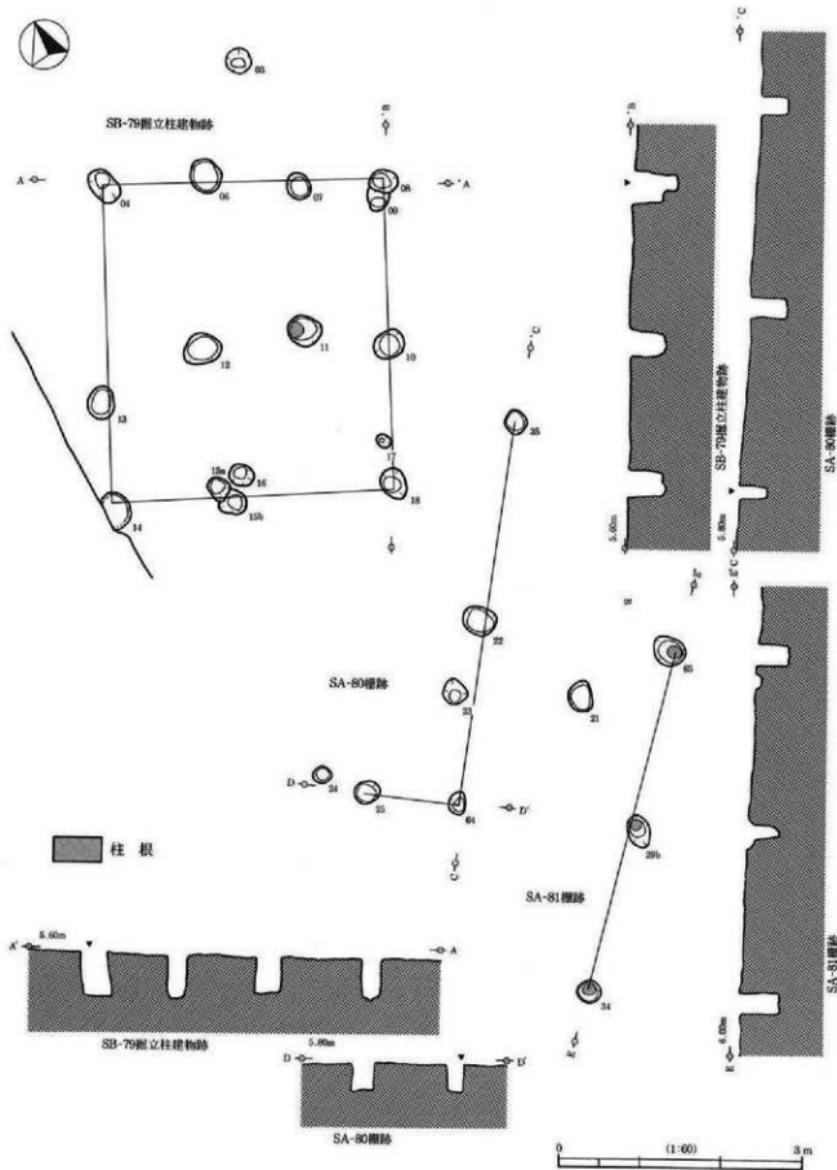


図版4

前掛り遺跡調査壁土層断面図



前掛り遺跡遺構個別図 1 (SB-79・SA-80・81)

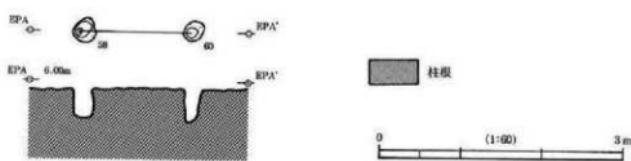


図版 6

前掛り遺跡遺構個別図 2 (SA-82, SD-01・70)

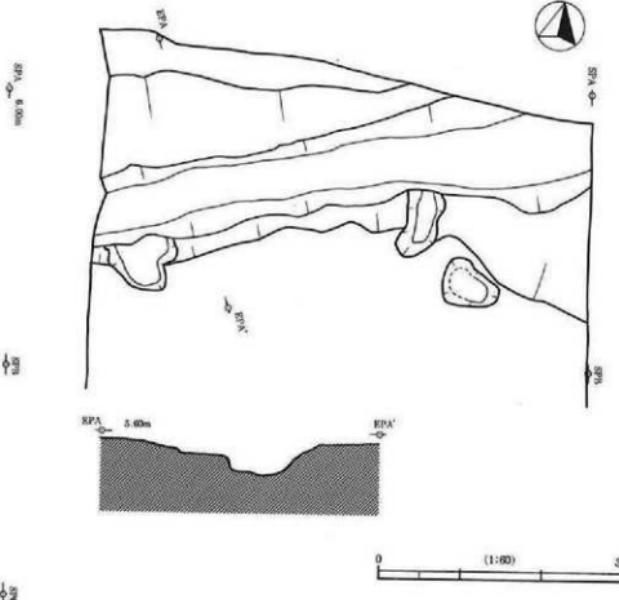


SA-82坑跡



SD-01病跡

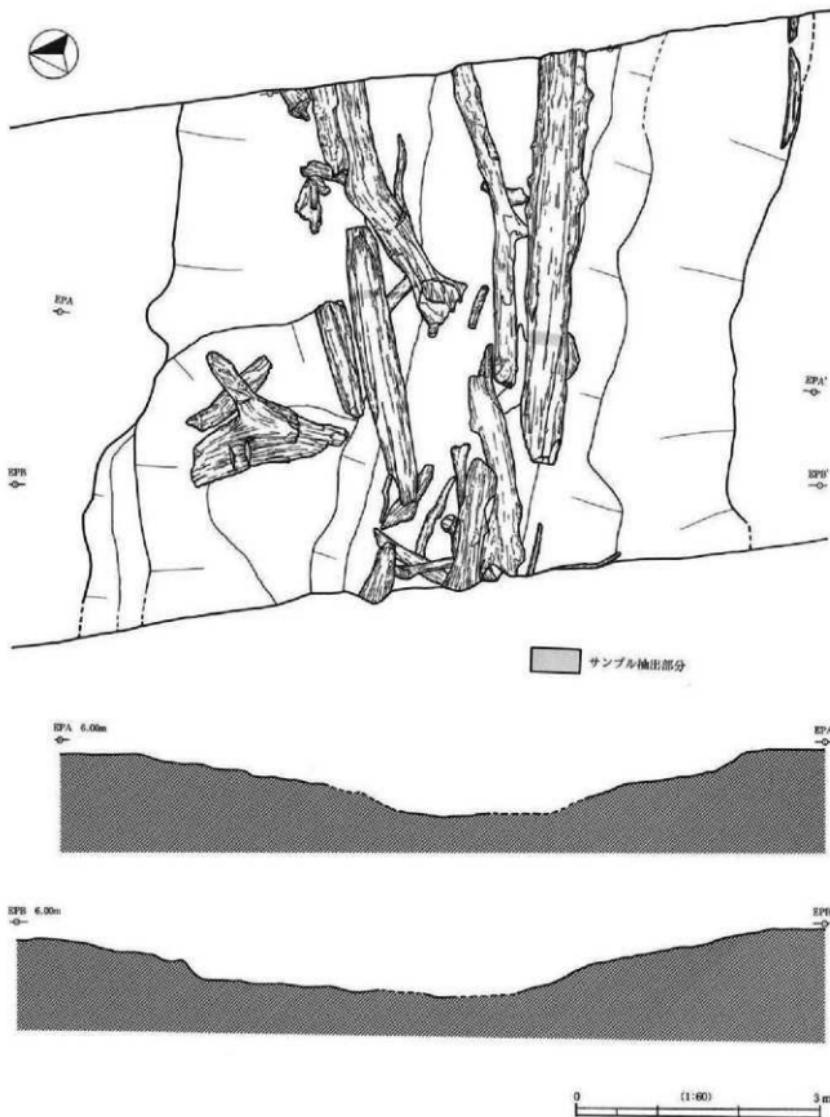
1. 青灰色粘土 : 粘性があり、青灰色粘土と深色粘土の間に位置する。
2. 黄褐色粘土 : 小やや硬で、青灰色粘土と深色粘土の間に位置する。
3. 青灰色砂質粘土 : 砂分が多く含み、粘性がない。



SD-70病跡

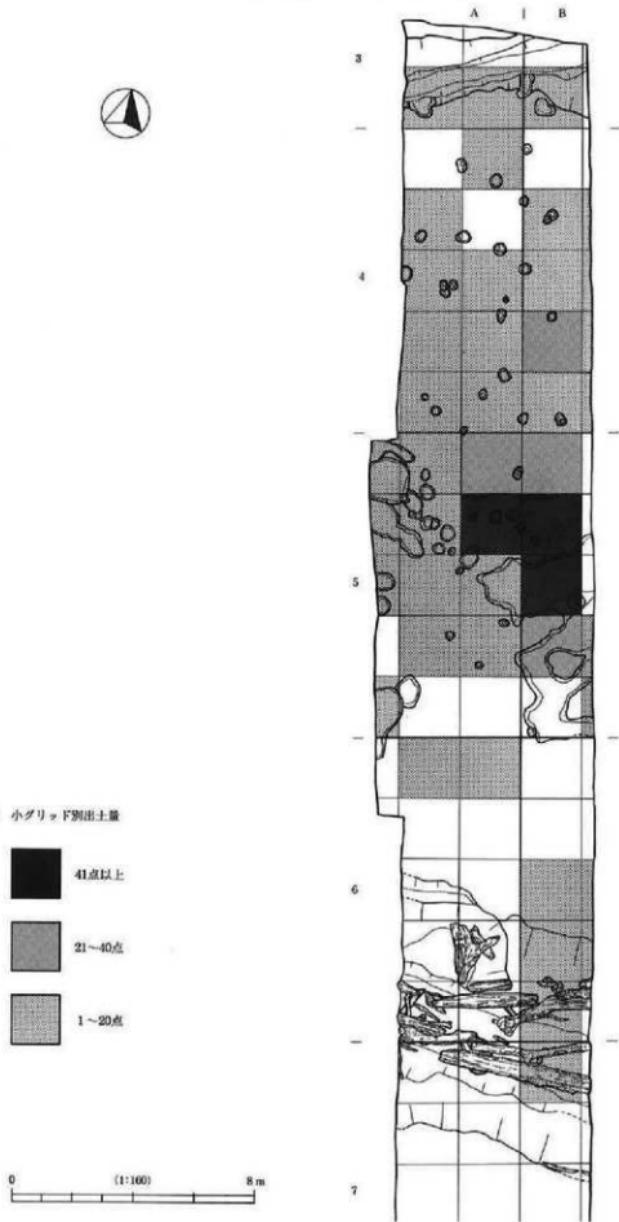


前掛り遺跡遺構個別図 3 (SD-70)



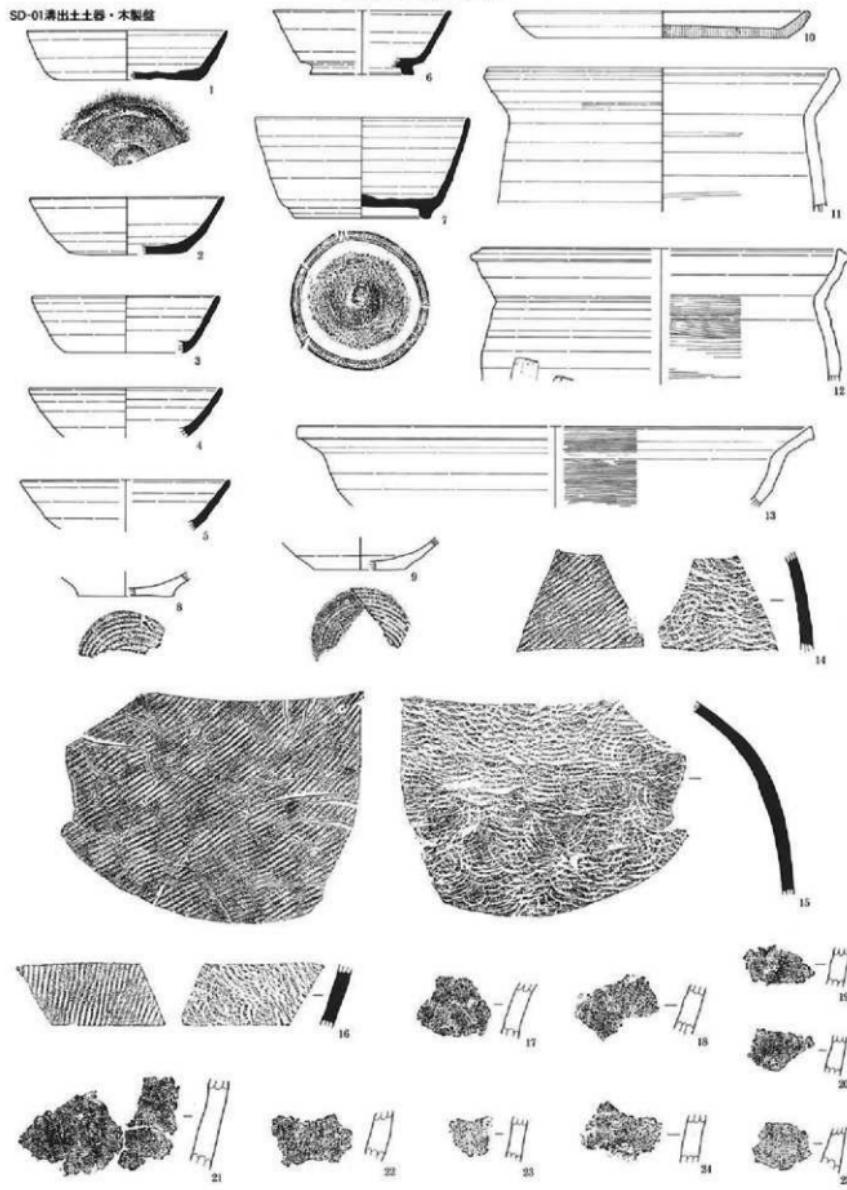
図版8

前掛り遺跡小グリッド別出土量



前掛り遺跡出土遺物 1

SD-01清出土土器・木製盤

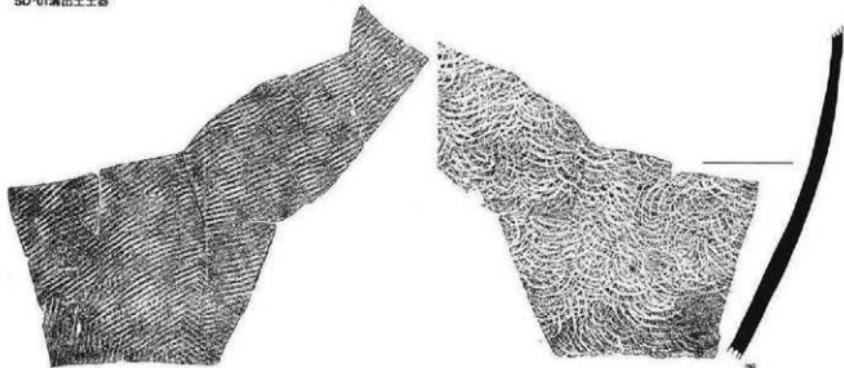


0 10cm

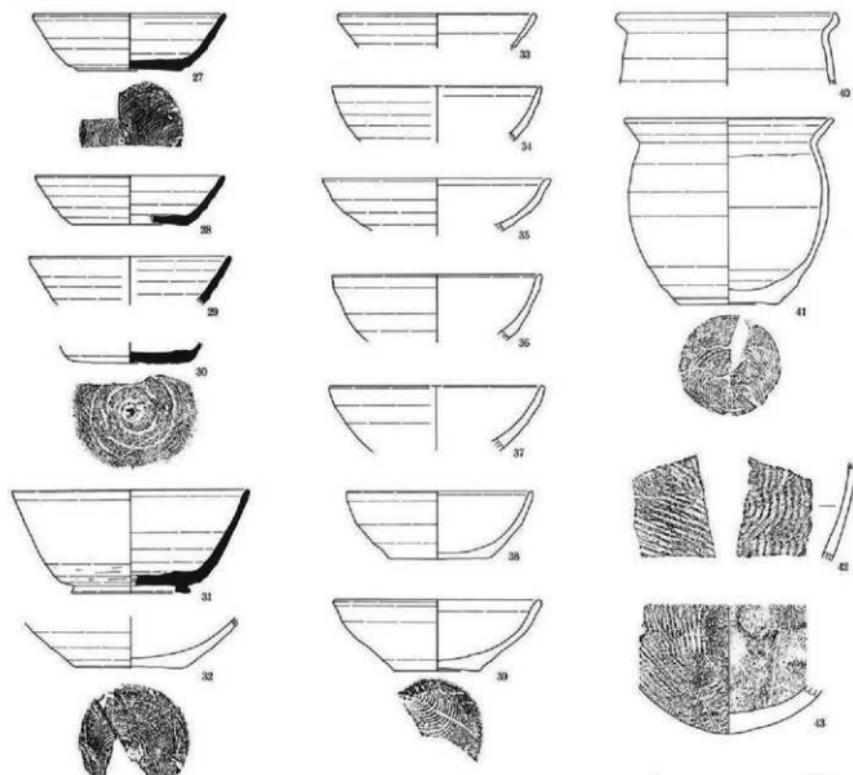
図版10

前掛り遺跡出土遺物2

SD-01溝出土土器



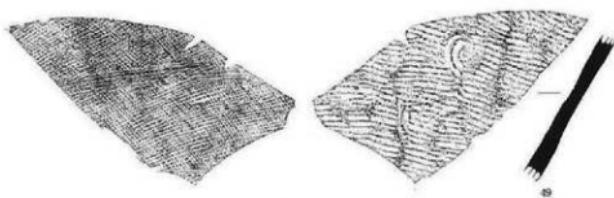
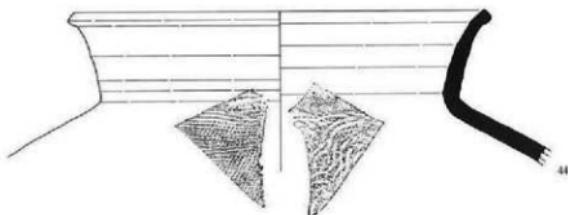
SD-70溝出土土器



0 10cm

前掛り遺跡出土土器

SD-70層出土土器

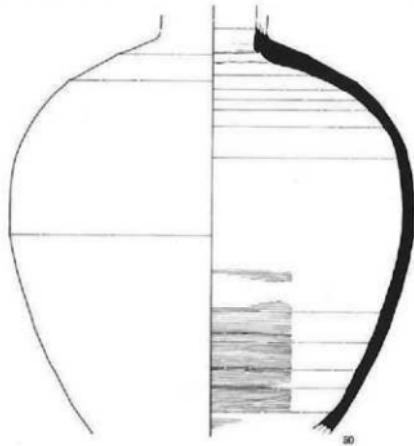


0 10cm

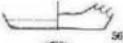
図版12

前掛り遺跡出土遺物4

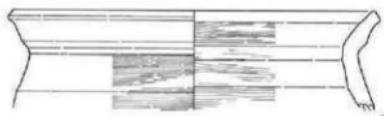
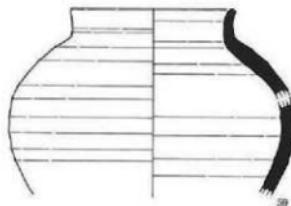
SQ-70溝出土土器



SX-53落込み出土土器



SX-53落込み出土土器



SX-33落込み出土土器

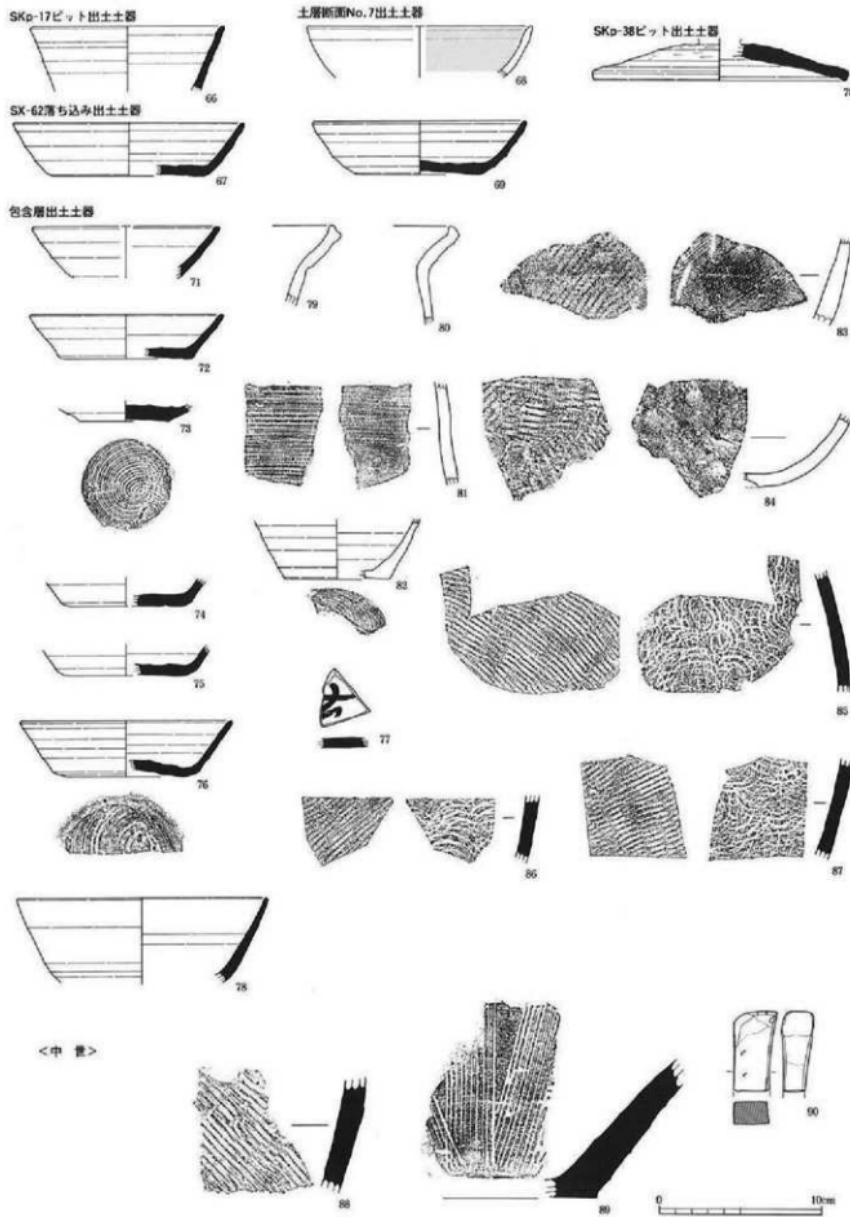


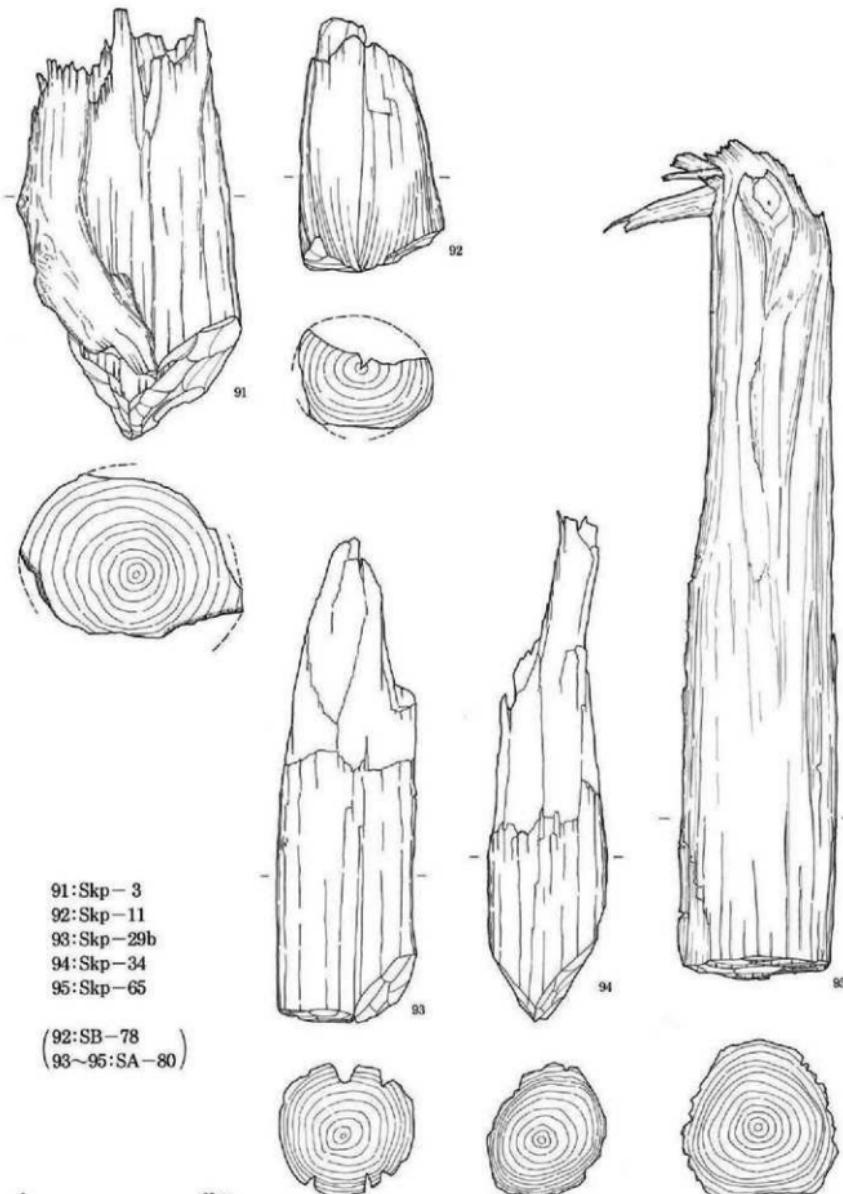
SKP-25ピット出土土器



0 -10cm

前掛り遺跡出土遺物 5



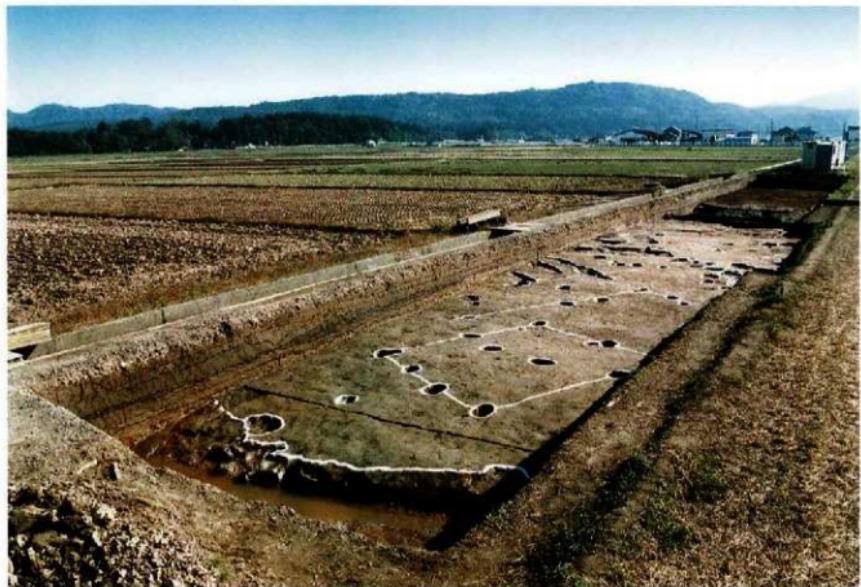


前掛り遺跡1



a. 調査区全景

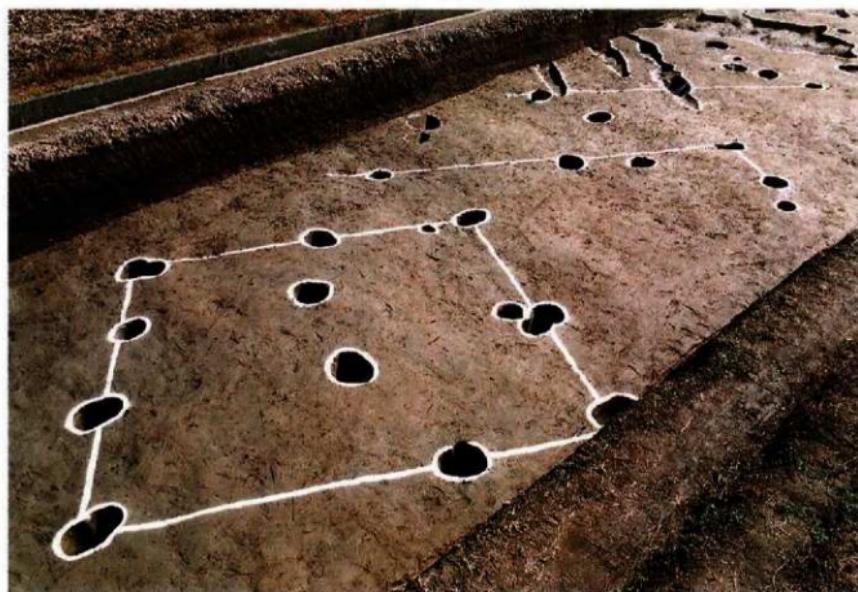
(南から)



b. 遺構群全景

(北西から)

前掛り遺跡 2



a. S B - 79 建物跡と柵列

(北西から)



b. S D - 70 溝跡と流木

(西から)

前掛り遺跡 3



a. 遺跡遠景

(北東から)



b. 遺跡遠景

(南東から)



a. 表土剥ぎと遺構確認

(南西から)



b. 遺構完掘と全体清掃

(南から)

調査2



a. 表土剥ぎと遺構確認
(南西から)



b. 遺構の発掘作業
(南から)



c. SD-70溝の発掘作業
(西から)

調査3



a. 調査区南部



b. 遺構検出状況（全般）



c. 遺構検出状況（北部）



d. 遺構検出状況（中部）



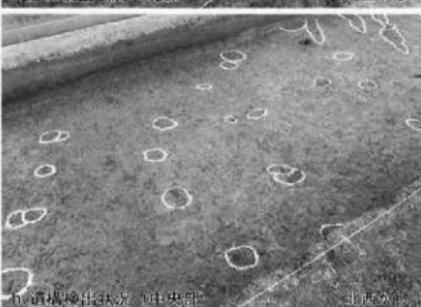
e. 上記調査区跡況（北部）



f. 遺構検出状況（北部）



g. 遺構検出状況（北部）



h. 遺構検出状況（中央部）

(西から)

(西から)

(西から)

(西から)

(西から)

(西から)

(西から)

(西から)

層序 1



a. SD-01溝東側断面

(西から)



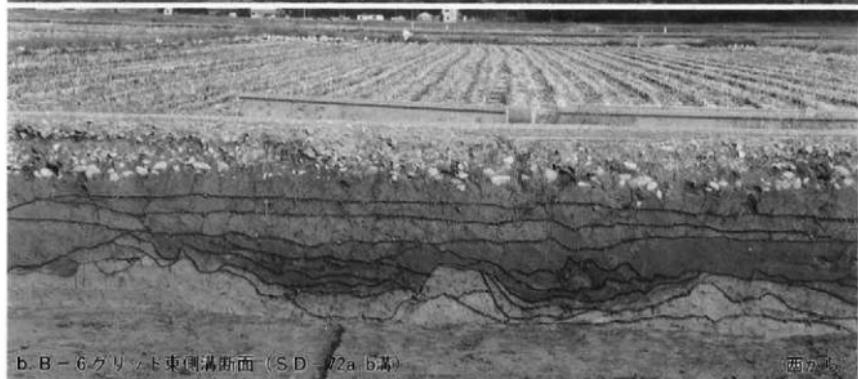
b. SX-53および調査区北半基本層序

(南西から)



a. SD-70溝と土壠断面

西から



b. B-6クリット東側溝断面 (SD-72a. 5高)

西から



c. B-4クリット水田跡土壠断面

西から

遺構 1



a. 調査区全 景

(南から)



b. 調査区北半部と遺構群

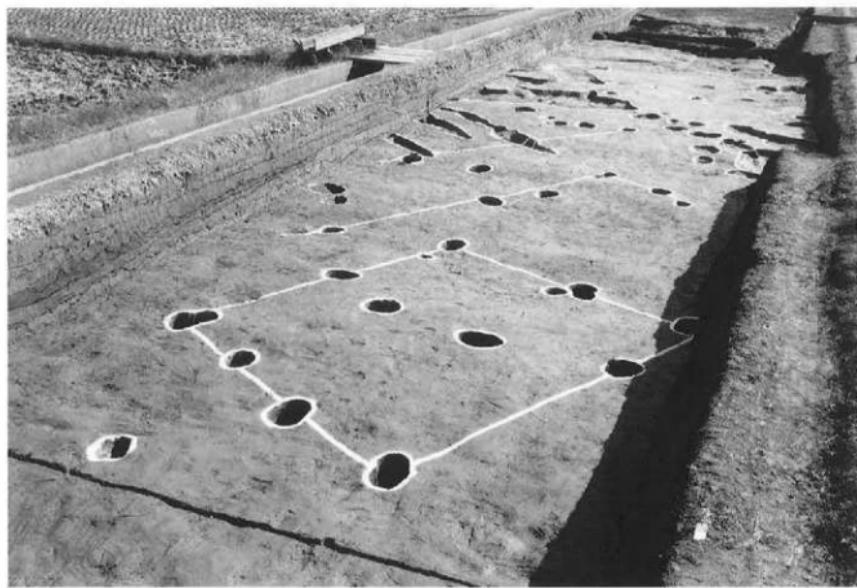
(北西から)

遺構 2



a. 調査区北半部と遺構群

(南西から)



b. S-B-79 建物跡と柵列

(北西から)

遺構 3



a. 調査区南半部とSD-70溝跡

(北西から)



b. SD-70溝跡と北半部の遺構群

(南西から)



a. SD-70溝跡と土層断面

(西から)



b. SD-70溝跡と流木

(北から)

遺構 5



a. S D - 70 溝跡と流木

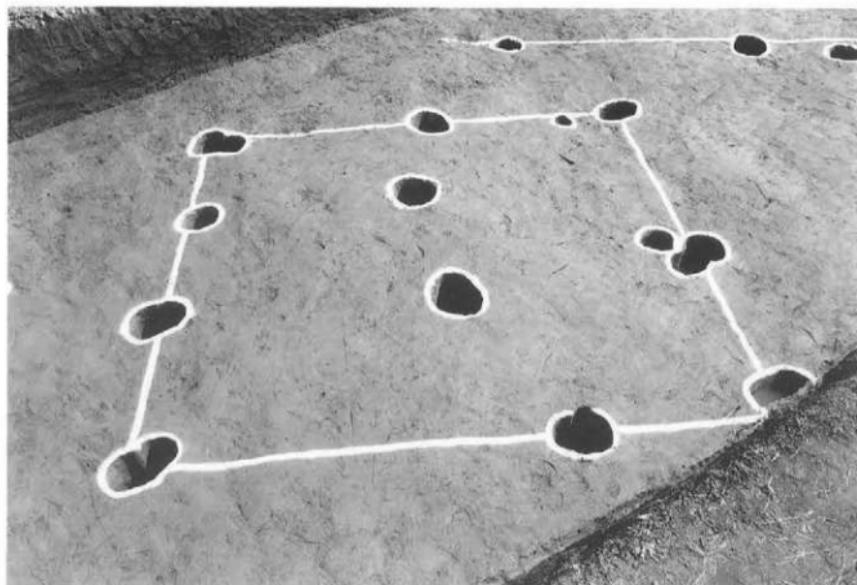
(南西から)



b. S D - 70 溝跡の工具痕を残す流木

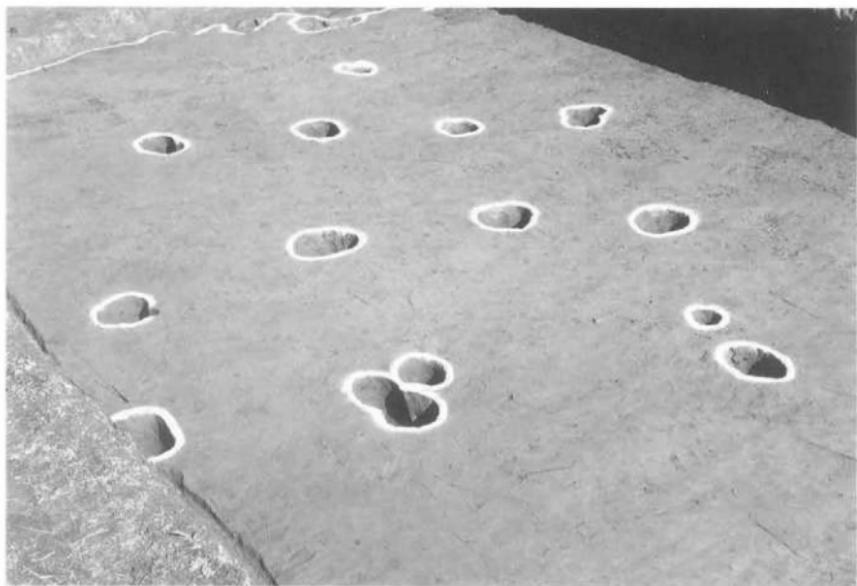
(南西から)

遺構 6



a. S B - 79 建物跡

(北西から)



b. S B - 79 建物跡

(南西から)

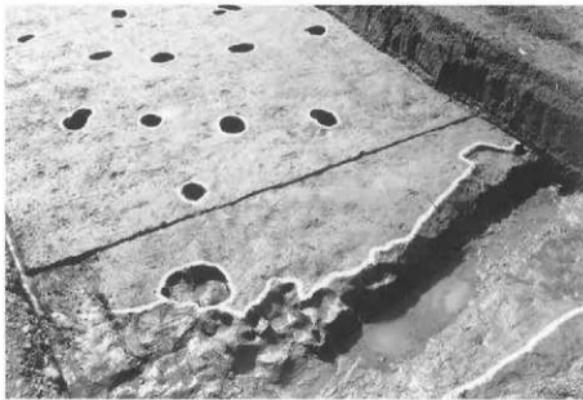
遺構 7



a. SD-01溝跡 (西から)



b. SD-01溝跡 (南西から)



c. SD-01溝跡と建物跡 (北東から)

遺構 8



a. 調査区北半部のピット・土坑群

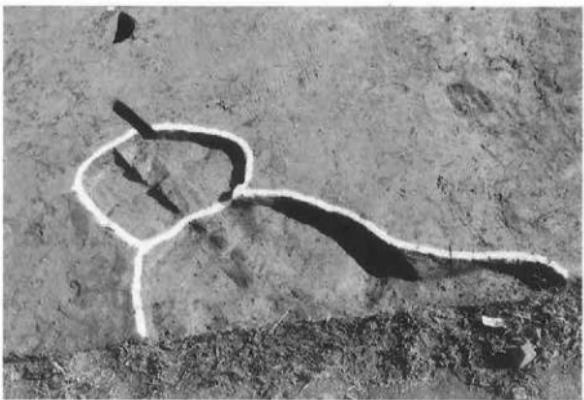
(北西から)

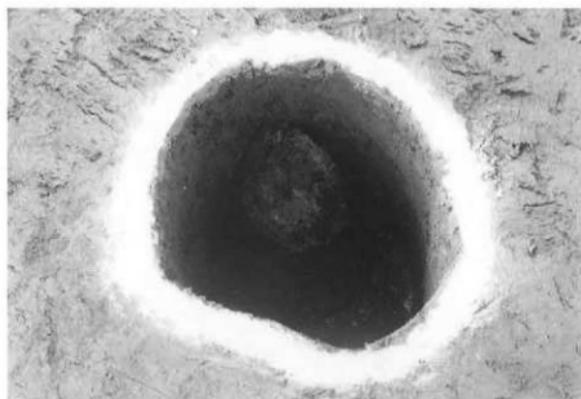


b. A-5 グリッドのピット・土坑群

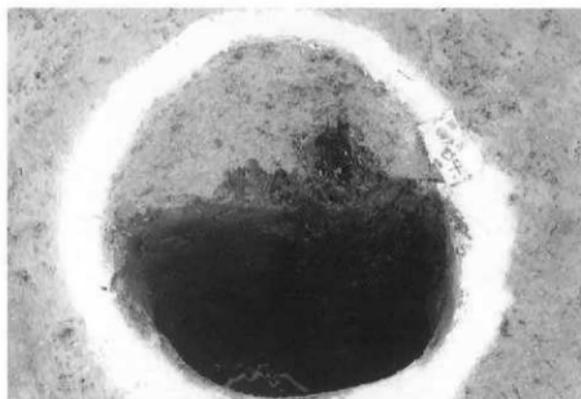
(西から)

遺構 9

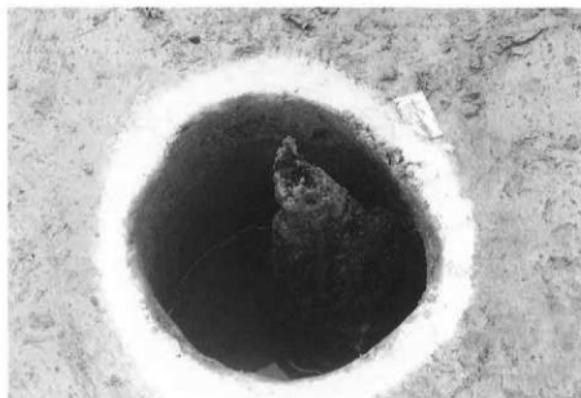




a. SKP-11柱穴 (東から)



b. SKP-34柱穴 (南から)



c. SKP-34柱穴 (南から)

遺構 11



a. SK p-29 柱穴 (南から)

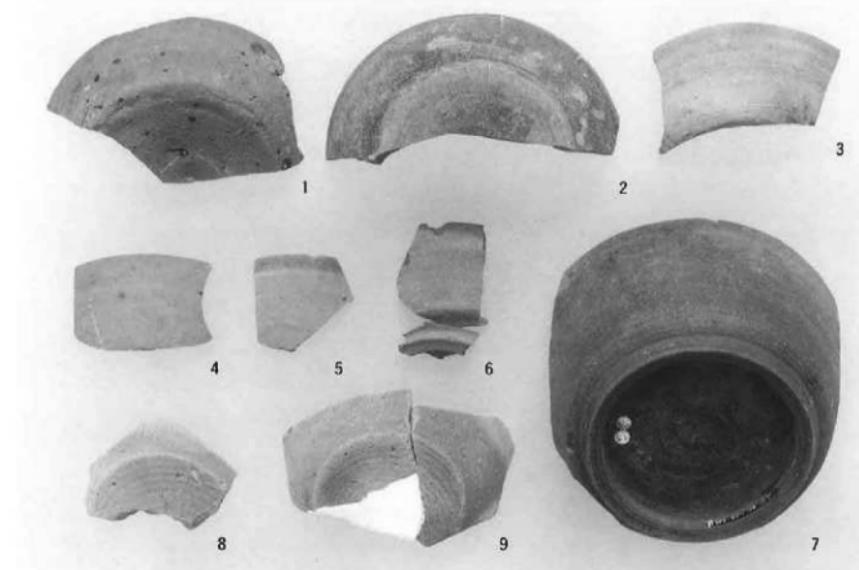


b. SK p-65 柱穴 (東から)



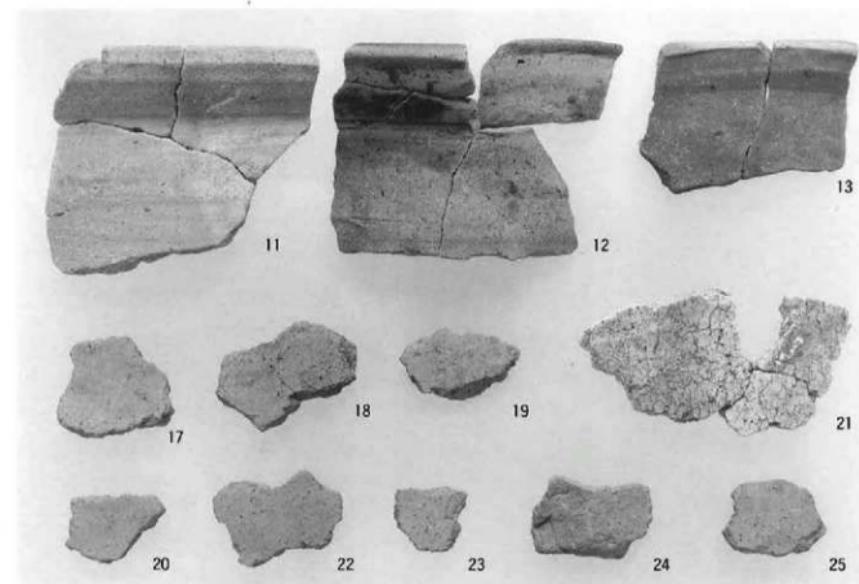
c. SK p-65 柱穴 (東から)

遺 物 1



a. S D - 01 溝跡出土土器 (1)

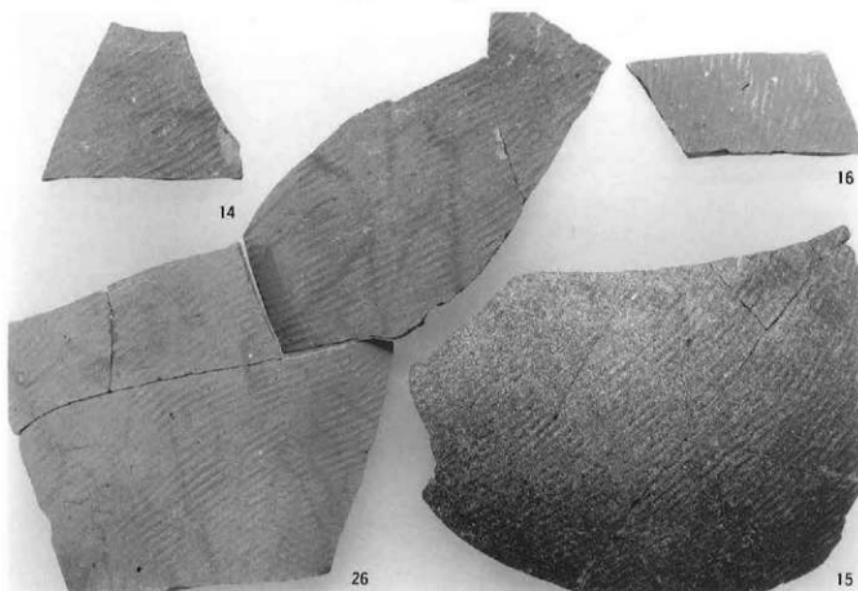
約1:2



b. S D - 01 溝跡出土土器 (2)

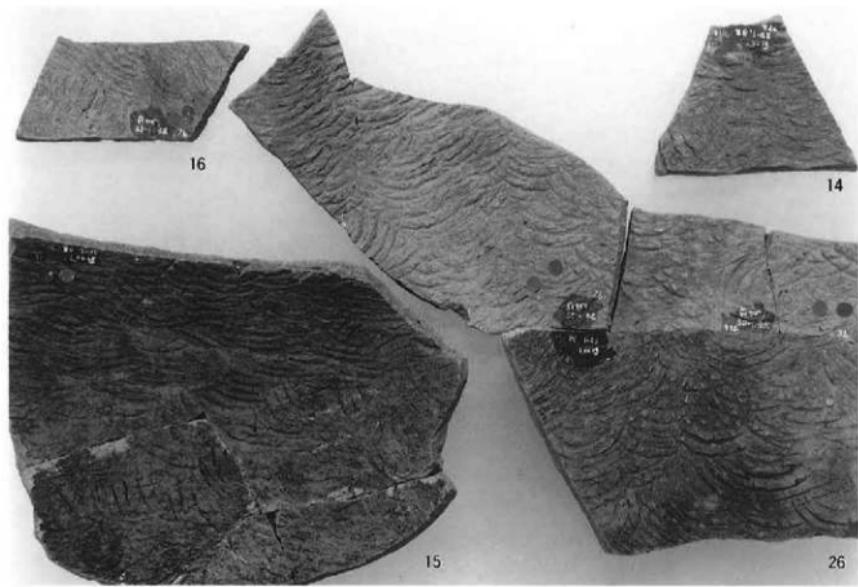
約1:2

遺物 2



a. SD-01溝跡出土土器 (3) : 表

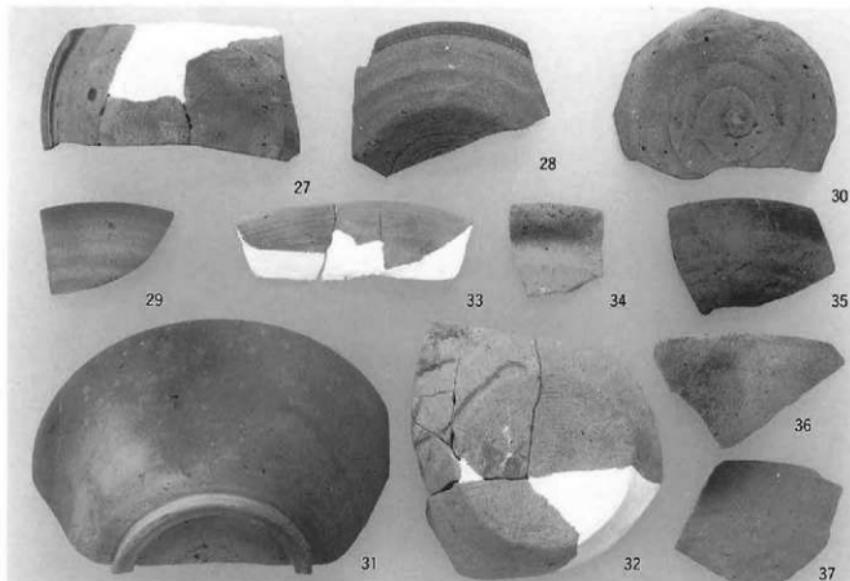
約1:2



b. SD-01溝跡出土土器 (3) : 裏

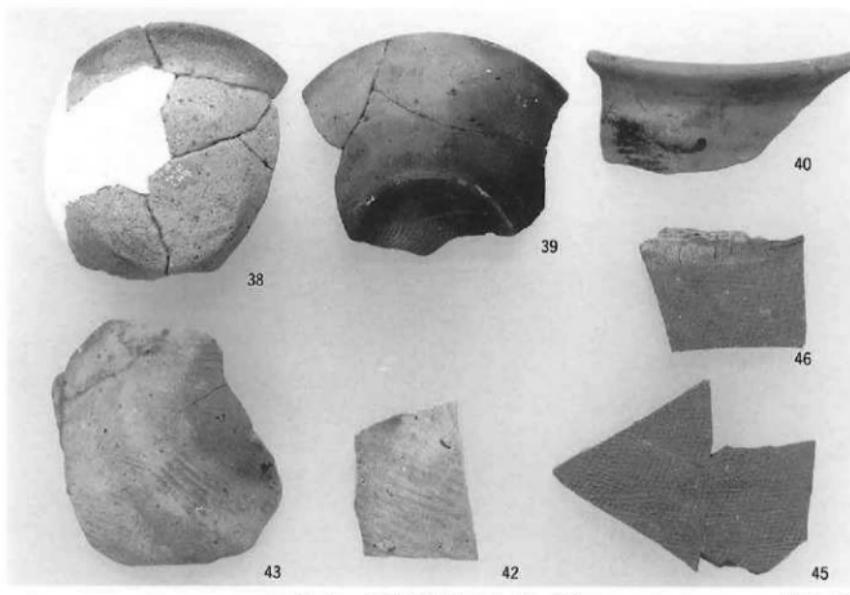
約1:2

遺物 3



a. S D - 70 溝跡出土土器 (1)

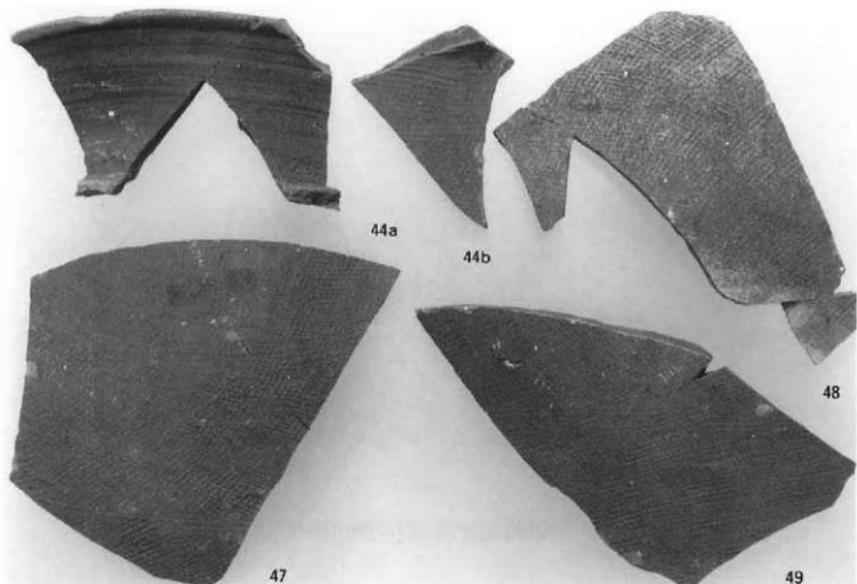
約1:2



b. S D - 70 溝跡出土土器 (2)

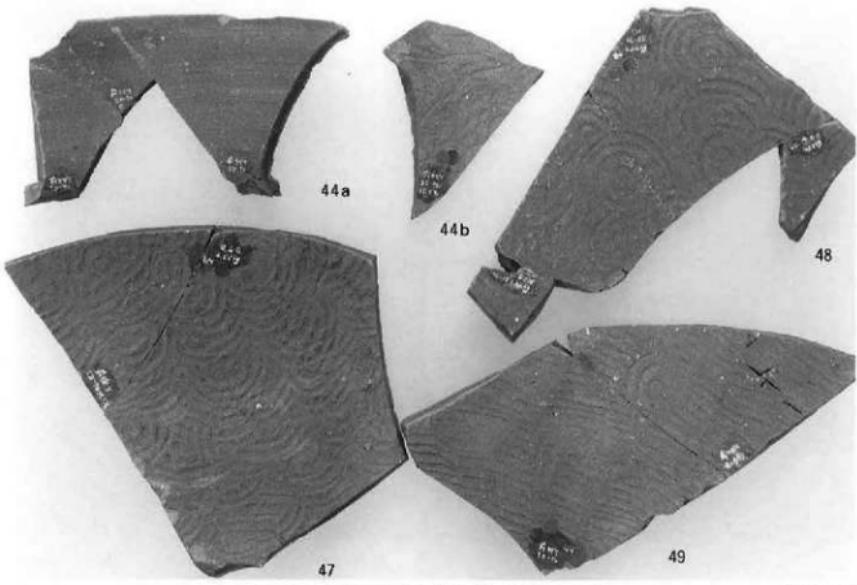
約1:2

遺物 4



a. S D - 70 溝跡出土土器 (3) : 表

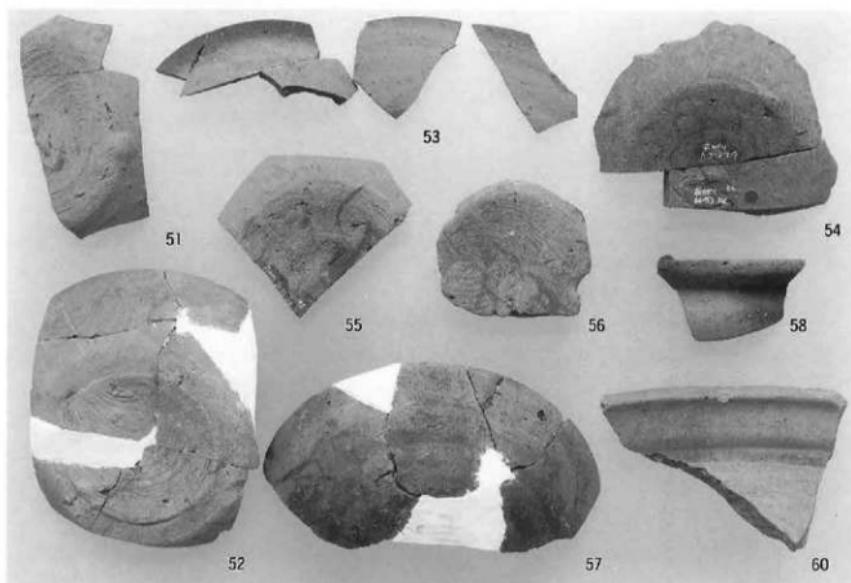
約1:2



S D - 70 溝跡出土土器 (3) : 裏

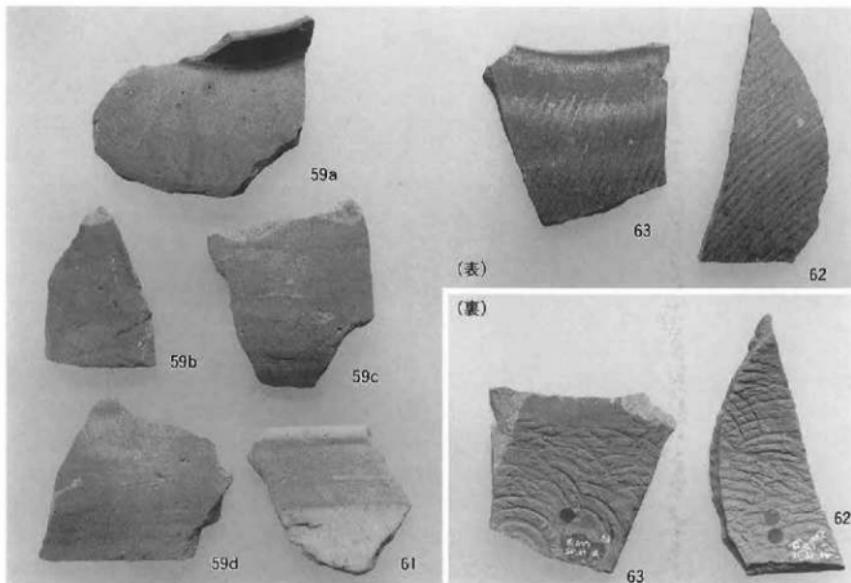
約1:2

遺 物 5



a. S X - 53出土土器 (1)

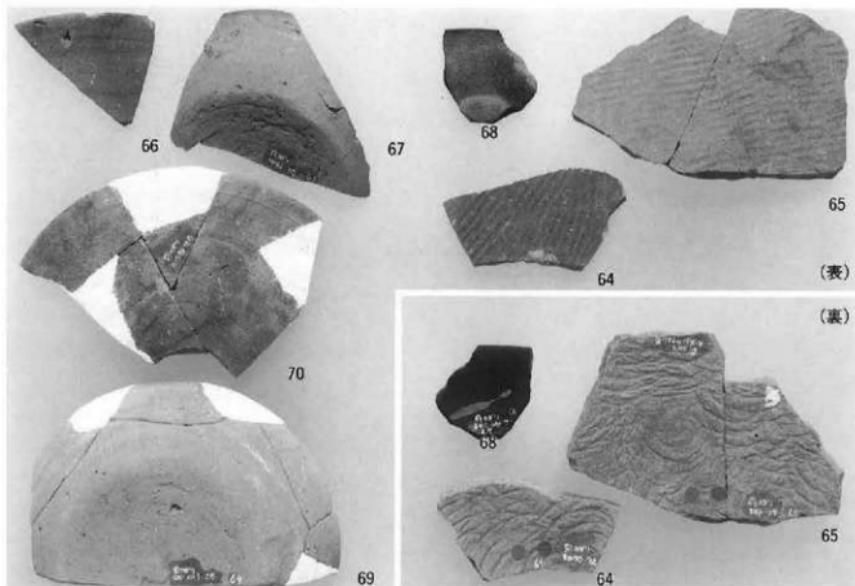
約1:2



b. S X - 53出土土器 (2)

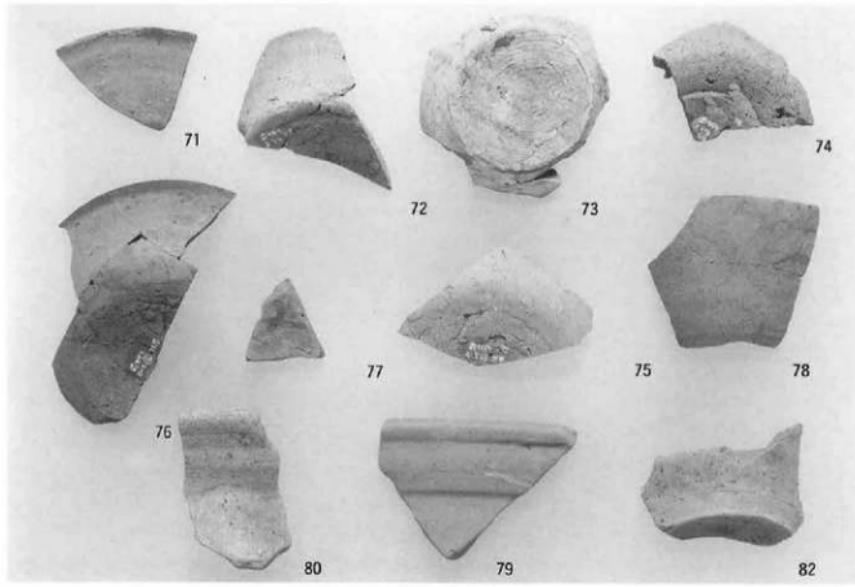
約1:2

遺物 6



a. その他の遺構出土土器

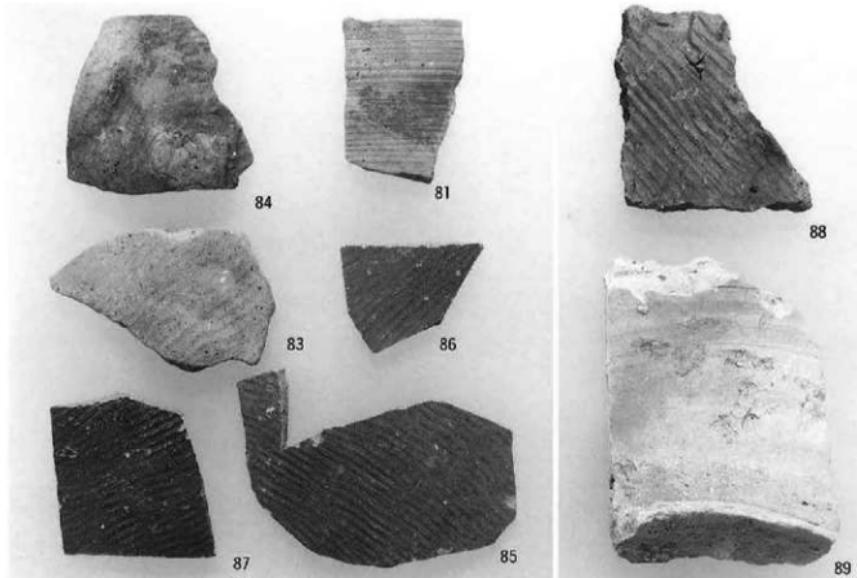
約1:2



b. 包含層等出土土器 (1)

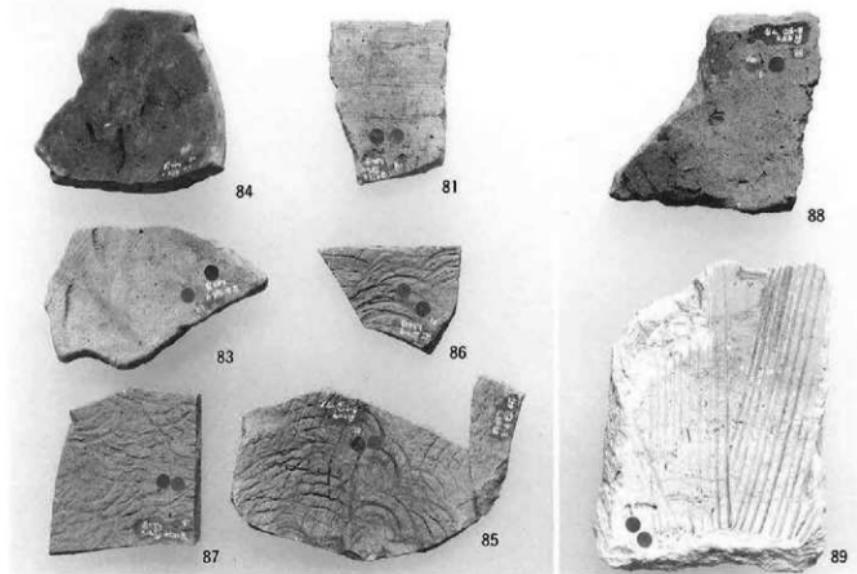
約1:2

遺物 7



a. 包含層等出土土器 (2) : 表

約1:2



b. 包含層等出土土器 (2) : 裏

約1:2

遺物 8

図版41



44

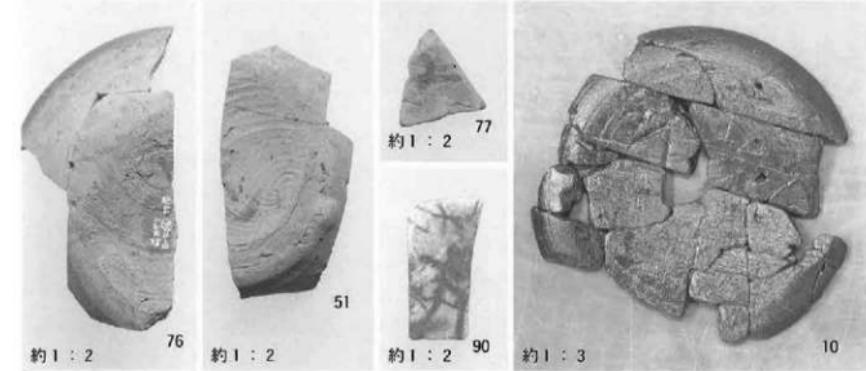
約1:2



41



50



約1:2

76

約1:2

51

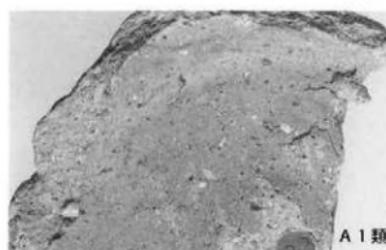
約1:2

77

約1:3

10

完形品・墨書き・石製品・木製盤



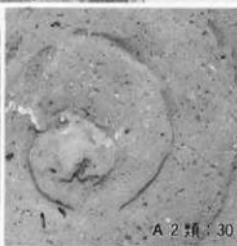
A 1 類 : 74



A 1 類 : 80



A 2 類 : 66



A 2 類 : 30



A 2 類 : 11



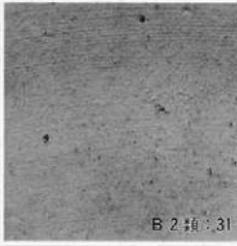
B 1 類 : 70



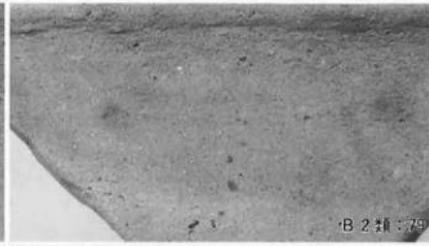
B 1 類 : 32



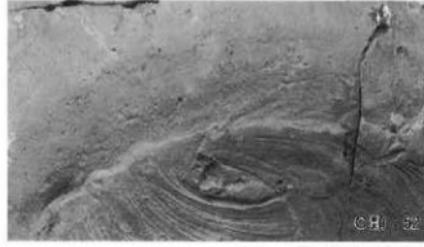
B 2 類 : 55



B 2 類 : 31



B 2 類 : 74



C 類 : 52



D 類 : 28

遗 物 10



91



91

(正面)

(侧面)



94



(侧面)

94



a

(正面)

木柱根 (1)



(正面)

(裏面)

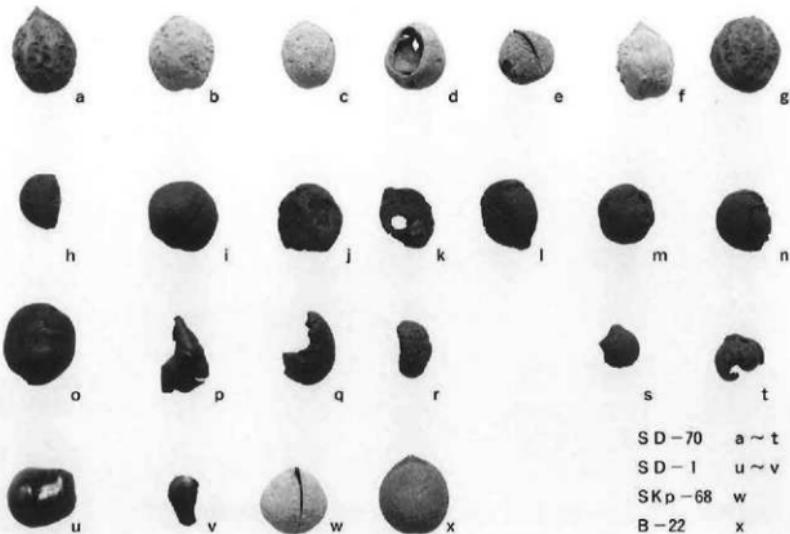


(正面)

(側面)

木柱根 (2)

遺物 12



a. 自然遺物（種子）

約1:2



b. 焼 磚

調査スタッフ



a. 前掛り遺跡の調査区全景

(南から)



b. 発掘調査オールスタッフ

(SK-70溝跡)

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第26集

前　掛　り

— 新潟県柏崎市・前掛り遺跡発掘調査報告書 —

平成9年3月28日　印 刷

平成9年3月31日　発 行

発 行　柏崎市教育委員会

新潟県柏崎市中央町5-50

印 刷　株式会社 柏崎インサツ